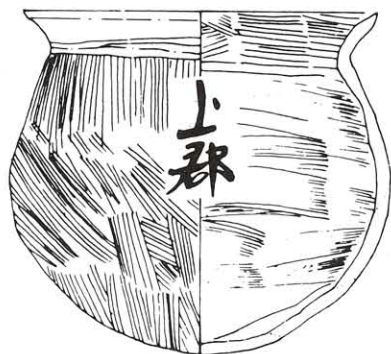


鳴上郡衙跡<sub>他</sub>関連遺跡発掘調査概要・13



1989

高槻市教育委員会

頁	行	誤	正
9	図 4	5	15
11	22	所在 <u>して</u> い	所在 <u>している</u> 。
	26	受けて <u>い</u>	受けて <u>いる</u> 。
14	13	図7~ <u>9</u>	図7~ <u>10</u>
17	26	作業 <u>杭</u>	作業 <u>坑</u>
19	4	<u>20</u> . 前塚古墳の調査	<u>22</u> . 前塚古墳の調査
26	図15	<u>5</u>	<u>6</u>
		<u>6</u>	<u>5</u>
		<u>16</u>	<u>16'</u>
		<u>16'</u>	<u>17</u>
		<u>17</u>	<u>16</u>
29	4	胎土・色調は <u>22</u> と同	胎土・色調は <u>21</u> と同
40	32	(図版第 <u>25</u> ・ <u>28</u> )	(図版第 <u>25</u> )
41	24	図 <u>19</u>	図 <u>21</u>
図版第11	a	約 <u>1/2</u>	約 <u>1/2</u>
	b	約 <u>1/2</u>	約 <u>1/2</u>
図版第20	a	(土器番号) <u>8</u>	<u>9</u>
		<u>9</u>	<u>8</u>
		<u>13</u>	<u>13'</u>
		<u>13'</u>	<u>13</u>
図版第21	a	(土器番号) <u>1</u>	<u>1'</u>
		有文深鉢 ( <u>1</u> )	有文深鉢 ( <u>1'</u> )
図版第27	b	郡家今城遺跡 ( <u>13</u> )	郡家今城遺跡 ( <u>11</u> )
図版第39	写真説明	建物 <u>2</u>	建物 <u>1</u>
		土坑 <u>2</u>	土坑 <u>2</u>
図版第40	写真説明	土坑 <u>3</u>	土坑 <u>3</u>
		土坑 <u>4</u>	土坑 <u>4</u>
図版第51	タイトル	6-A <u>E</u> 地区	6-A・ <u>E</u> 地区
図版第59	タイトル	郡家今城遺跡 ( <u>11</u> )	郡家今城遺跡 ( <u>9</u> )

## は し が き

激化する地価上昇は全国的規模に波及し、住宅需要が増大するなかで土地の高度利用が唱えられ、これに伴って埋蔵文化財発掘調査も件数、内容とも増加の一途をたどっております。本市においても、中小規模の再開発、住宅建設の増加の一方、大規模開発が続々と計画段階から実行に移されようとしております。

このような情勢のなか、嶋上郡衙跡を端緒に本市直営事業として実施してきた嶋上郡衙跡および周辺遺跡の発掘調査事業は、今年で13年目を迎えました。この間、史跡・嶋上衙跡周辺部の調査から郡衙域やその成立発展の過程、周辺遺跡の状況について積み上げてきた資料は質量ともに多大であり、近年はとくにこれまでの調査地を面的につないでいく形での調査が増加しております。

今回その概要を報告いたしますのは、嶋上郡衙跡、土室遺跡、前塚古墳、郡家今城遺跡、大蔵司遺跡、安満遺跡など、おもに5～12世紀の古墳と集落に関する調査成果であります。いずれもこれまでの知見を補い、改定するに足る好資料を追加するものとなりました。

ここに今年度の発掘調査の結果をまとめ、多くの方々のご教示をあおぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝いたします。

平成元年3月31日

高槻市教育委員会

社会教育課長 鳥越仁道

## 例 言

1. 本書は、高槻市教育委員会が昭和63年度国庫補助事業（総額9,000,000円）として計画、実施した高槻市所在の史跡・嶋上郡衙跡周辺部および郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。

2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和63年4月11日に着手、平成元年3月31日に終了した。

3. 調査は、高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。組織及び調査担当者は以下のとおりである。

所 長	富 成 哲 也
次 長	大 船 孝 弘
事 務 吏 員	桑 田 喜 代 子
技 術 吏 員	橋 本 久 和・森 田 克 行・鐘ヶ江 一 朗・ 宮 崎 康 雄・高 橋 公 一
文化財専門員	大 塚 隆・中 村 公 一・武 村 雅 一

4. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、分担は文末に記した。出土遺物の写真撮影は中村公一、同実測・製図は各担当者がおこなった。遺物整理については北原治氏のほか以下の各氏の援助をうけた。厚く感謝する。

上田弥一・恵谷英俊・大平知世・清田悦子・楠瀬久恵・後藤勇子・佐藤喜久子・白銀良子・武谷利子・土井芙佐子・古木寿子・森本真理

5. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

土戸實、岩本義一、金堂文俊、昭和シェル石油(株)、羽瀬ノブエ、梶和雄、宮田和比呂、遠藤徳之進、稲上泰史、村田稔、長澤幸栄、堀芳雄、塩見孝夫、伊藤明、有川治子、吉田工務店、川中正一、福田文子、厚地秀昭、浜田武、河野敏昭、沢田薫、古場邦男、奥健太郎、伊藤健、高谷文子、大阪開発(株)、久保田幸子、西田正義、(有)東本工務店、加納房三、柴田政明、入谷薫、長尾俊行、平八重弘實、(宗)春日神社、(株)大江住宅、池下勇次



# 目 次

I	嶋上郡衙跡 .....	1
II	土室遺跡 .....	11
III	前塚古墳 .....	19
IV	宮田遺跡 .....	23
V	富田遺跡 .....	32
VI	郡家今城遺跡 .....	33
VII	郡家本町遺跡 .....	42
VIII	大蔵司遺跡 .....	43
IX	芥川遺跡 .....	48
X	高槻城跡 .....	48
XI	悉檀寺跡 .....	49
XII	安満北遺跡 .....	52
XIII	安満遺跡 .....	53
ま	と め .....	68

No	地 区(遺跡名)	調 査 地	面積(m <sup>2</sup> )	申 請 者
1	1-D・G・H・K	郡家本町(水路改修)	314.50	高 槻 市 長
2	3-J・N, 13-B・F	郡家本町(水路改修)		高 槻 市 長
3	4-A	郡家本町896-1	319.80	土 戸 實
4	4-G・K	郡家本町934	424.07	岩 本 義 一
5	5-D, 6-A・E・F	清福寺町(水路改修)	112.90	高 槻 市 長
6	6-I・M, 16-A・E	清福寺町(水路改修)	190.50	高 槻 市 長
7	11-J	郡家本町544-4	101.62	金 堂 文 俊
8	22-A	郡家本町523-6	631.58	昭和シェル石油
9	23-B	郡家本町423-3	56	羽 瀬 ノブエ
10	25-F	郡家新町(水路・現状変更)	27	高 槻 市 長
11	27-H	清福寺町85-4	148.38	梶 和 雄
12	28-I	清福寺町852	88.51	宮 田 和比呂
13	28-J	清福寺町848	76.00	高槻市教育長
14	38-F	清福寺町5-7	206.15	遠 藤 徳之進
15	48-H	川西町一丁目954-12	43.99	稲 上 泰 史
16	48-I	川西町一丁目959-13	78.59	村 田 稔
17	54-I・M	郡家新町351-1	552	長 澤 幸 栄
18	74-P	郡家新町159-13	103.82	堀 芳 雄

No	地 区(遺跡名)	調 査 地	面積(m <sup>2</sup> )	申 請 者
19	84-E	今城町181-1	431.13	塩 見 孝 夫
20	84-M	今城町191-9	60.85	伊 藤 明
21	土室遺跡	上土室一・三丁目(分水路新設)	2,000	高 槻 市 長
22	前塚古墳	岡本町96-1・4, 97-1	906	有 川 治 子
23	宮田遺跡	宮田町三丁目101, 431	1,206	吉 田 工 務 店
	〃	宮田町三丁目100, 430	2,019	吉 田 工 務 店
24	富田遺跡	富田町四丁目2516	370.24	川 中 正 一
25	郡家今城遺跡	氷室町一丁目768-1	216	福 田 文 子
26	〃	氷室町一丁目779-7	91.38	厚 地 秀 昭
27	〃	氷室町一丁目767-1, 764-3	195.49	河 野 敏 昭
28	〃	氷室町一丁目767-1	63.05	浜 田 武
29	〃	氷室町一丁目767-1, 764-3	261.36	沢 田 薫
30	〃	氷室町一丁目781-13	135.87	古 場 邦 男
31	〃	氷室町一丁目781-17	57.31	奥 健 太 郎
32	〃	氷室町一丁目781-17	64.66	伊 藤 健
33	〃	郡家新町(道路改修)	58	高 槻 市 長
34	〃	郡家新町43-3, 44-2, 45-3	745.95	高 谷 文 子
35	〃	郡家新町48の一部	791	(有)東本工務店
36	〃	郡家新町48の一部	903.04	西 田 正 義
37	〃	郡家新町45, 47の一部	1,990	大 阪 開 発(株)
38	〃	郡家新町49-3, 51-1	193.38	久 保 田 幸 子
39	郡家本町遺跡	郡家本町1560-2	293.26	加 納 房 三
40	大蔵司遺跡	大蔵司二丁目204-1	766.89	柴 田 政 明
41	〃	大蔵司三丁目102	1,312	入 谷 薫
42	芥川遺跡	殿町92-1	478.77	長 尾 俊 行
43	高槻城跡	城内町1105-7	131.95	平 八 重 弘 實
44	悉檀寺跡	成合北の町647-1他3筆	762.30	(宗)春日神社
45	〃	成合北の町606	490	(宗)春日神社
46	〃	成合北の町604-1, 605	765	(宗)春日神社
47	〃	成合北の町646-1	63.60	高 槻 市 長
48	安満北遺跡	安満中の町488	1,315	(株)大江住宅
49	安満遺跡	高垣町85-1他4筆	3,151	(株)大江住宅
50	〃	高垣町225-69, 230-1	970.52	池 下 勇 次
	〃	高垣町229他3筆	881.70	池 下 勇 次

昭和63年度 嶋上郡衙跡他関連遺跡調査地一覧(その2)

# 嶋上郡衙跡発掘調査概要

## I. 嶋上郡衙跡

### 1. 1-D・G・H・K地区の調査

調査地は高槻市郡家本町710～712番地にあたり、小字は位前である。現状は農業用水路である。丘陵が平野へと変換した場所であり、調査地の北50mの丘陵上では平安時代中期の芥川廃寺瓦窯を検出している。今回の調査は、水路改修に先立って実施した。調査地に2ヶ所のトレンチを設定し、掘削には重機を使用して表土等を除去後、人力で地山面まで掘り下げた。

#### 遺構・遺物(図版第2a・b)

Aトレンチは幅2.5m・長さ74mの南北に細長いトレンチである。層序は、耕土(0.2m)、床土・整地層(0.2m)、黒色砂質土層(0.3m)、灰色粘土層(0.1m)、暗灰色砂層(0.2m)、黒色粘土層(0.4m)、灰色砂質土層

〔地山〕である。地山は北側(丘陵側)に向かってわずかに下降しており、標高は南端で21m、最も低い北端付近で20.8mと浅い谷地形になっている。

Bトレンチは幅1.3m、長さ11mを測り、Aトレンチとは直交する位置関係にある。層序は、耕土(0.2m)、床土(0.1m)、茶灰色土層〔整地層〕(0.2m)、暗褐色土層(0.2m)、黒褐色土層(0.1m)、黒灰色土層(0.4m)、黒色粘土層(0.1m)、暗灰色粘土層〔地山〕である。地山面の標高は約21mでほぼ水平である。

本調査区は、芥川廃寺瓦窯に近接しているため、それに関連するなんらかの遺構・遺物の検出が期待された。しかし、A・B両トレンチからはまったく遺構を検出せず、遺物も客土中より土器片がわずかに出土したのみである。調査区周辺は浅い谷と湿地であって、居住等には適していなかったためとかがえられる。(宮崎)

### 2. 3-J・N、13-B・F地区の調査

高槻市郡家本町725番地他にあたり、小字は西垣内・屋上である。現状は水路であり、これを改修するのに先だって発掘調査を実施した。

調査地には2本の道路が横切っているので、調査区を3ヶ所(I～IIIトレンチ)に分けて実施した。掘削は、I・IIトレンチは重機を、IIIトレンチでは人力を使用し、地山面まで掘り下げて遺構・遺物の検出に努めた。

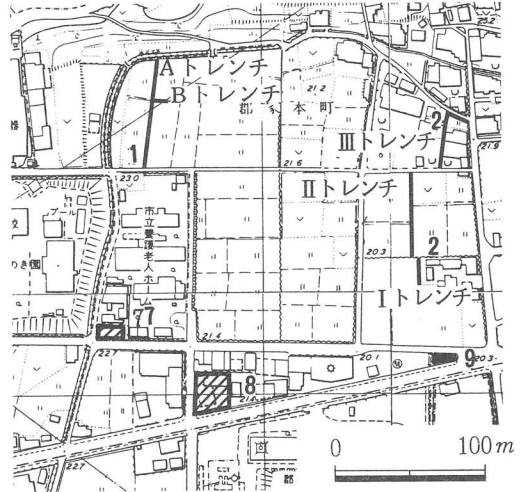


図1 嶋上郡衙跡の調査位置図(1)

遺構・遺物(図版第2c・d・3)

I トレンチは調査地中央に設定した。幅2m、長さ55mの規模である。層序は耕土・床土(0.2~0.3m)、暗褐色土層〔遺物包含層〕(0.2~0.4m)、緑灰色砂礫層(北半)・黄褐色粘土層(南半)〔地山〕である。地山面の標高は北端で20.3m、南端で20.1mと緩やかに南へ傾斜している。検出した遺構は柱穴と落ちこみであり、黄褐色粘土層がひろがる南側に散在する。遺物は柱穴埋土及び包含層より土器片がわずかに出土したのみである。1は小型の鉢。口径10.7cm、器高7cmを測り、色調は淡茶灰色である。柱穴埋土より出土した。

II トレンチはI トレンチの南にあり、幅2m、長さ29mを測る。層序は耕土・床土(0.2~0.3m)、暗褐色土層〔遺物包含層〕(0.2~0.4m)、黄褐色土層〔地山〕である。地山は南半で礫を多く含み、遺構の分布は疎である。地山面の標高は約20.1mを測り、緩やかに南へ傾斜している。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、落ちこみ1ヶ所、柱穴多数である。

掘立柱建物1は、トレンチ北端近くで検出した。妻側2間分(3.5m)のみ検出し、大半は調査区外へと続いている。柱掘形の形状は方形を呈し、1辺約0.7m、深さ約0.2mを測る。柱は遺存していなかったが、径0.2m前後の柱が沈み込んだ痕跡が認められた。柱列軸の方向はN-1°-Wを測る。東西棟と推測できるが、トレンチの幅が狭いために、検出した柱列が東西いずれの妻であるのか明らかにできなかった。

落ちこみ1はトレンチの北側で検出した。幅2.2m、深さ0.15mを測り、トレンチの外へひろがっている。埋土は暗褐色土で、6世紀末ごろの遺物が出土した。

柱穴はトレンチ北側に集中しているが、まとまりに欠いている。

遺物は、概して少なくコンテナ1箱に満たない。また、完形に復元できたものはわずかである。落ちこみ1からは須恵器蓋杯(2~5)・甕(6)、土師器甕(7)・甗(8~10)が出土した。蓋(2)は口径13cm、器高4.3cmを測る。色調は暗灰色を呈している。杯身(3)は口径13cm、器高3.6cmを測る。暗灰色。4は口径13cm、器高3.2cmを測る。色調は暗灰色である。土師器(7)は甕の口縁部である。色調は赤褐色である。甗(8~10)には外面に縄蓆文が施されている。胎土には砂粒を多く含み、もろい。色調は茶褐色を呈している。

III トレンチは調査区のもっとも北に位置している。幅0.45m、総長46mを測り、南側より36mで東に屈曲している。調査は、トレンチが狭長なために重機を使用することができず、

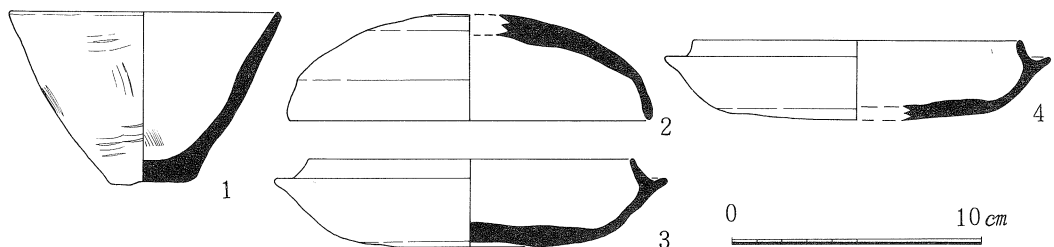


図2 3-J・N, 13-B・F地区出土遺物 I区:P-1(1),  
II区:落ちこみ1(2~4)



図3 嶋上郡街跡の調査位置図(2)

人力で地山面まで掘り下げた。層序は、表土・盛土(0.4m)、整地層(0.25m)、暗灰色礫土層〔地山〕である。地山が礫層であり、居住などに適していないためか、遺構・遺物は検出できなかった。

### 小 結

今回の調査地は、遺跡の西端付近と考えられ、周辺部の調査においてもほとんど遺構・遺物を検出しない場所であった。遺構は地山に礫を含まない黄褐色粘土層に集中して検出した。掘立柱建物1はN-1°-Eの方向を示し、その時期は8世紀後半ごろと考えられる。本遺跡北西側では、7世紀から8世紀はじめごろの掘立柱建物が集中する傾向にある。今回検出した掘立柱建物は、もっとも西に位置しているが、調査区の関係で掘立柱建物の規模、配置などは明らかにすることはできなかった。周辺の調査に期したい。(宮崎)

### 3. 4-A地区の調査

調査地は郡家本町896-1番地にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の増築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北辺に位置し、遺構の分布が希薄な地域とされているところである。調査は届出地の南側に東西辺2m、南北辺2mのトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は表土(0.1m)、暗茶褐色土層〔整地層〕(0.1m)、暗黄褐色礫土層〔地山〕であり、調査区の大部分は以前建物などを建てた際に整地を受けており、遺構はまったく検出することができなかった。遺物は弥生土器・須恵器・埴輪・磁器片が整地層中から少量出土し、付近一帯に弥生時代から古墳時代にかけての住居・古墳などの遺構が存在していたことが推測される。(大船)

### 4. 4-G・K地区の調査

調査地は高槻市郡家本町934番地にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の建て替えの目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北側中央部に位置し、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地の北西部に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は表土(0.05m)、暗褐色土層(0.15m)、黄褐色粘土層〔地山〕であり、遺構はまったく検出することができなかったが、暗褐色土層中からは弥生土器片が少量出土した。土器片はいずれも細片であって、時期、器形等は明確でない。(大船)

### 5. 5-D、6-A・E・F地区の調査

高槻市清福寺町876番地他5筆にあたり、小字名は東垣内、現状は水路である。式内社阿久刀神社西側で、周辺のこれまでの調査において古墳時代の竪穴式住居をはじめ各時代の遺

構・遺物が検出されており嶋上郡衙の成立と展開を考えるうえで重要な地域である。

このたび、水路改良の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ事前に発掘調査を実施した。

調査は人力で幅約1mのトレンチを設けるような格好になり、最も北側に位置する東西方向の水路(5-D、6-A地区)をA区、これに接続する南北方向の水路(6-A、6-E地区)をB区、B区の東側に接続する東西方向の水路(6-E、6-F地区)をC区とした。

#### 遺 構(図版第4・51・52)

A区は東西約27mを調査したが、層序は耕土(0.3m)、黄灰色土(0.2m)、暗褐色土(0.2m)で地山は礫を含む黄褐色土である。暗褐色土は阿久刀神社周辺の調査で常に認められる遺物包含層であるが、古墳時代とみられる土師器・須恵器の細片が若干出土しただけである。

遺構は数個の柱穴が検出されたが、いずれも地山をしっかりと掘削したものである。調査区が狭小なためどのような建物になるのか、また時期も不明である。

B区は南北方向に約50mを調査したが、北側の約20mについては現状の水路側壁をそのまま残すため、断面の観察はできず、底部のみ遺構検出作業を行った。A区同様、礫を含む黄褐色土が地山であるが、柱穴を1個検出しただけである。

B区南半部では、耕土(0.3~0.4m)、黄灰色土(0.4m)、青灰色土(0.2m)、暗褐色土(0.2m)、暗灰色土(0.1~0.6m)と堆積し、地山は灰色砂礫である。地山上に堆積した暗灰色土は無遺物のヘドロ状で、この付近は沼状の落ち込みとなっているようで遺構も検出されなかった。

C区はやや湾曲しているが、幅1.1~1.6mで約27mを調査した。層序は耕土(0.2m)、黄灰色土(0.3m)、暗褐色土(0.3m)と堆積し、地山は礫を含む黄褐色土である。遺構は竪穴式住居の一部(住居跡1)や柱穴・溝などを検出した。

住居跡1は南西の隅が確認できた方形竪穴式住居で深さ0.1mを測る。古墳時代前期に属するものである。溝1は幅1.2m・深さ0.15m、溝2は幅2.2~2.6m・深さ0.2m、溝3は幅2.2m・深さ0.15mを測る。いずれも南北方向に掘削され、時期は古墳時代とみられる。他に柱穴や浅い土壇状の落ち込みが検出されているが、これらの遺構がどう関連するものか不明である。

#### 遺 物(図版第5・6)

A・B・C区全体でコンテナ2箱程度の遺物しか出土しなかったが、大半はC区の暗褐色土から出土したものである。そのなかでも量的に多いものは縄文式土器の破片である。

縄文式土器は巻貝条痕の認められるもの(14)や、口縁外面と口縁端内側に沈線を施すもの(15)もわずかに含まれているが、大半は器壁外面を二枚貝条痕によって調整している。器形は浅鉢が大半であるが注口土器の破片(28)も1点出土している。底部(7~11)はいずれもくぼみ底である。胎土は粗質で砂粒を多く含む。色調は淡褐色あるいは黄褐色を呈しているが、褐色あるいは暗褐色を呈するものも若干含まれ河内地方からの搬入品の可能性がある。今回出土した縄文式土器は晩期の滋賀里Ⅲa式にほぼ相当するものとみられる。

縄文時代の石器も出土しており、石斧(35・37)や磨石(38)がある。磨石は先端と側面にくぼみがあり敲石に転用されたものであろう。材質は砂岩系統である。石英(36)も出土しているがどのような製品か不明である。32・34は製品の製作過程とみられ、34の側面には調整痕が認められる。他に石核(29・30)、剥片(31・32)も出土している。

須恵器は古墳時代の器台(40)、高杯(42・43)、壺(44)や奈良～平安時代の甕(39)、杯(41)、壺(45)が出土しているが少量である。(橋本)

## 6. 6-I・M、16-A・E地区の調査

高槻市清福寺町886-2番地他6筆にあたり、小字名は東馬場である。現状は水路で、さきに調査を実施した5-D、6-A・E・F地区の南側に位置し、やはり水路改良工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委関係者とも協議のうえ事前に発掘調査を実施した。

調査の対象となった水路は、昭和40年代の宅地造成工事の際にコンクリート擁壁となっている部分が多く、水路の底もかなり攪乱を受けている。このため、断面観察だけでなく地山面の確認もほとんどできなかった。わずかに、6-E地区のB区に接する6-I地区北端で黄褐色砂礫の地山と北側へ落ちこむように堆積した暗灰色土が確認できた。この結果、6-E地区から6-I地区にかけて南北約30mが沼状になっていることが想像される。(橋本)

## 7. 11-J地区の調査

調査地は高槻市郡家本町544-4番地にあたり、小字名は位前と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の建て替えの目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北西部に位置し、遺構の分布が非常に希薄な地域である。調査は届出地の中央部に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.55m)、耕土(0.15m)、床土(0.15m)、黄褐色粘土層〔地山〕であり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。(大船)

## 8. 22-A地区の調査

調査地は高槻市郡家本町523-6番地にあたり、小字名は雲りと称する。現状はガソリンスタンドである。このたび改築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北西部に位置し、遺構の分布が希薄な地域とされているところである。調査は届出地の西側に東西辺4m、南北辺6mのトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1m)、耕土(0.2m)、床土(0.1m)、黄灰色砂層〔整地層〕(0.3m)、黄褐色粘土層〔地山〕であり、調査区の大部分は以前に地下タンクを設置した際に攪乱を受けており、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。(大船)



## 9. 23-B地区の調査

高槻市郡家本町423-3番地にあたり、小字名は屋上と称する。現状は宅地である。このたび事務所兼倉庫建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査地は郡衙跡西北辺にあたり、東南方約50mで古墳時代の住居跡等を検出しているほかには、遺構の分布の希薄な地域である。調査は、届出地の中央に2m×4mの調査区を設定し、盛土を重機で排土後、人力で掘削して遺構の精査をおこなった。層序は表土・盛土(1.25m)、暗灰色粘質土層(0.15m)〔旧耕土〕、暗褐色礫土層(0.2m)〔旧床土〕、灰～黄褐色粘土層(0.4m)、灰褐色礫土層〔地山〕である。地山面の標高は約19mをはかる。

遺物包含層・遺構・遺物とも全く検出されず、これまで当該地の北および西方で実施してきた発掘調査でも遺構・遺物はごく希薄な状況であるところから、当該地まで古墳時代の集落は及んでいないとかがえられる。(鐘ヶ江)

## 10. 25-F地区の調査

調査地は高槻市郡家新町293～297番地に位置する。史跡嶋上郡衙跡附寺跡指定地の北東隅にあたり、小字名は東馬場である。現状は農業用水路である。今回の調査は、水路改修の目的で史跡の現状変更許可申請書が提出されたため、文化庁および大阪府教育委員会とも協議のうえ実施した。

調査は、改修工事による掘削が床土内でおさまり、遺構面まで及ばないために、最小限のものとした。調査地の南端部に小規模なトレンチを設定し、人力で地山面まで掘り下げて遺構・遺物の検出につとめた。層序は、耕土(0.4m)、床土(0.15m)、暗褐色土層〔遺物包含層〕(0.15m)、黄褐色粘土層〔地山〕である。小規模なトレンチであったためか、遺構・遺物は検出しなかった。(宮崎)

## 11. 27-H地区の調査

調査地は高槻市清福寺町85-4番地にあたり、小字名は清福ノ内である。住宅建設が計画されたため発掘調査を実施した。南北1.5m、東西0.6mのトレンチを設定した。層序は、盛土(0.6m)、暗褐灰色土(0.4m)、黒褐色粘質土(0.6m)、黄褐色砂礫〔地山〕である。遺物は、暗褐灰色土と黒褐色粘質土から極く少量の土師器片が発見されるにとどまった。

今回の調査は、様々な制約のために、非常に小規模の調査となり、大きな成果はあげられなかったが、層序を確認したことにより、今後の調査を進めていくうえで重要な資料となるであろう。(高橋)

## 12. 28-I地区の調査

調査地は高槻市清福寺町852番地で、小字名は清福ノ内である。現状は宅地である。今回の調査は個人住宅建設にともなうもので、調査地は遺構・遺物の希薄な地域であるために、

1.5m×3mの小規模なトレンチを設定し、人力で地山面まで掘り下げた。層序は暗黄褐色土層(0.3m)、茶灰色土層(0.4m)、茶褐色土層(0.3m)、淡茶褐色土層(0.45m)、暗褐色粘土層〔遺物包含層〕(0.3m)となり、地山は淡灰色土層で北へ向かって緩やかに下降している。暗褐色土層より上層は、近世～近代にかけての整地・攪乱層である。調査の結果、遺構は検出することはできなかつた。遺物も、包含層より出土した弥生時代後期から古墳時代に属す土器や、整地層の硯・煙管などわずかである。(宮崎)

### 13. 28-J地区の調査

高槻市清福寺町848番地にあたり、小字は清福ノ内である。今回の調査は、清福寺太子堂の移築にさきだつて実施したものである。太子堂の現位置から約9m東側の移築予定地に、1辺3mのトレンチを設定し、断面観察および遺構・遺物の検出につとめた。

#### 遺構・遺物

東側の壁面で土層をみると、最近の盛土と攪乱土(黄色土・黄褐色土)が1.1m堆積し、以下は褐色土・黄褐色土・暗褐色土と続き、地山は砂礫を含む黄褐色土である。

遺構は地山面で小ピットを1個と南壁ぎわで南側へ落ち込む溝状のものを確認した。いずれも遺物が全く出土していないため、明確な時期をおさえられないが、周辺の状況からみて古墳時代とみられる。壁面のほぼ中程でみられる暗褐色土とその下位の灰色土は、褐色土を切りこんでいるが、灰色土から室町時代の土師皿が出土している。黄褐色土・暗褐色土からは古墳時代の土師器がわずかに出土しているだけである。

小範囲の調査であるが、清福寺の集落周辺では古墳時代から室町時代にかけての遺構・遺物が広がり、それが現在に続いていることがわかつた。(橋本)

### 14. 38-F地区の調査

高槻市清福寺町915-7番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。届出地は史跡指定地の東側に隣接する既存宅地で、このたび個人住宅の建替工事で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は届出地の中央に3m×2.5mの調査区を設定し、人力で遺構面まで掘り下げて精査した。層序は盛土(0.3m)、旧耕土(0.2m)、旧床土(0.1m)、黄褐色粘質土層(0.15m)〔整地層〕、黒褐色土層(0.25m)〔遺物包含層〕、含礫茶褐色土層〔地山〕である。地山面の標高は約14.9mをはかる。

検出した遺構はピット1個、不定形の落ち込み1基にとどまる。遺物包含層は少量の炭化粒を含み良好な遺存状態であった。遺物としては、包含層の上部から出土した若干量の土器片がある。いずれも破片であつて全形を知るには至らないが、弥生時代後期に属する壺、甕、高杯などがある。

本調査区は、昭和53年に北側隣接地で弥生時代後期の竪穴式住居跡を検出しており〔概報3：38-F地区〕、その関連遺構の存在が予想される地点であつた。今回は調査区が狭小な

こともあって遺構的には明確にできなかったものの、当該地が居住地域の一角にあたることが確認された。(鐘ヶ江)

### 15. 48-I地区の調査

高槻市川西町一丁目959-13番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅建替工事的な目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。届出地は史跡指定地の東側に隣接する住宅地の南端に位置し、周辺の調査から谷地形があると予想される地域である。

調査は届出地の中央を小型ユンボで掘削し、層序の把握と断面観察に努めた。基本的層序は、盛土(1.3m)、旧耕土(0.15m)、青灰色砂質粘土層(0.2m)、暗青灰色砂質粘土層となる。砂質粘土層からの湧水が著しく、調査区が狭小なこともあって遺物包含層及び遺構面には達しないまま調査を断念せざるを得なかった。後出48-H地区の調査では砂質粘土層下に遺物包含層がみつめられ、本調査区においても同様な堆積状況であることが想定される。(鐘ヶ江)

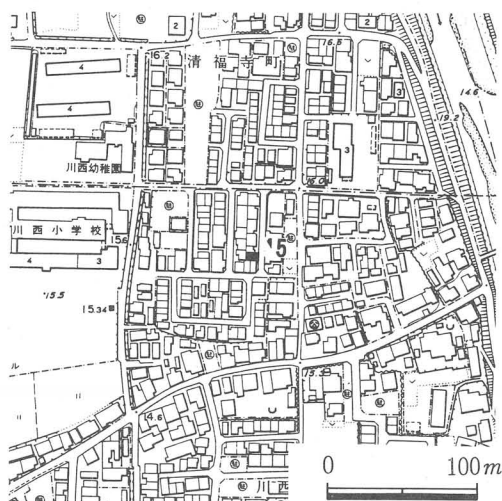


図4 嶋上郡衙跡の調査位置図(3)

### 16. 48-H地区の調査

高槻市川西町一丁目954-12番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は史跡指定地の東側に隣接する既存宅地であり、このたび個人住宅建替工事的な目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は、届出地の中央を小型ユンボで掘削し、断面観察に努めた。層序は盛土(1.0m)、旧耕土(0.1m)、青灰色砂質粘土層(0.15m)、緑灰色砂質土層(0.6m)、暗茶褐色土層(0.5m)〔遺物包含層〕、茶褐色礫土層〔地山〕となり、地山面の標高は約13mをはかる。遺物包含層は小礫などをほとんど含まず、粘土質で比較的均質である。同層中には若干量の弥生時代後期に属する土器片がみつめられた。

調査区が狭小であるうえ遺構面が深く断面観察にとどめざるを得なかったが、周辺の調査と併せてみると本調査区まで谷地形が及んでいると判断される。(鐘ヶ江)

## 17. 54-1・M地区の調査

高槻市郡家新町351-1番地にあたり、小字名は林田と称する。現状は畑地である。このたび宅地造成工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

当該地は嶋上郡衙跡の西南隅付近に位置し、遺構の希薄な地域である。これまでの調査では、東南方約40mで旧石器の製作跡、北側約50mでサヌカイト剥片が検出されている。そのため今回の調査では、旧石器を包含するとかんがえられる土層を検出すべく届出地の中央に調査区を設定し、小型ユンボで整地層より上部を排土し、以下は人力で掘削しておこなった。

基本的層序は、耕土(0.2m)、黄褐色粘土(0.2~0.3m)、灰~黄褐色粘土(0.2m)、灰白色粘土〔地山〕である。地山面では届出地の中央より北側に旧河道がみられ、そこでの地山は灰~黄灰色砂となっている。地山面はほぼ平坦で標高約16.6mをはかる。南端で地山を掘り下げ、旧石器を探索したがほとんど小石すら含まぬ均一な粘土層がつづき、なんら遺構・遺物は検出できなかった。(鐘ヶ江)

## 18. 74-P地区の調査

高槻市郡家新町159-13番地にあたる。小字名は東藤ヶ本、現状は住宅地である。このたび、個人住宅建替えのため土木工事等にもなう発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は届出地内に1.5m×1.5mのトレンチを設定し、小型ユンボを使用して地山面まで掘り下げた。層序は、盛土(1.2m)、旧耕土(0.3m)、青灰色砂質土層〔整地層〕(0.3m)、淡黄灰色粘土層〔地山〕である。遺構・遺物はまったく検出しなかった。(宮崎)

## 19. 84-E地区の調査

高槻市今城町181-1番地にあたり、小字名は中久保である。今回の調査は、共同住宅建設に先立つものであり、文化庁・府教委等関係者とも協議し実施した。

調査地に2m×10mのトレンチを設定し、重機で盛土を除去後、人力で地山面まで掘り下げた。1.2mの盛土を除くと旧耕土(0.2m)が顔を出す。以下は黄灰褐色粘土層〔床土〕(0.2m)、黄褐色粘土層〔地山〕となる。地山面の標高は約15mを測る。遺構・遺物はまったく検出しなかった。(宮崎)

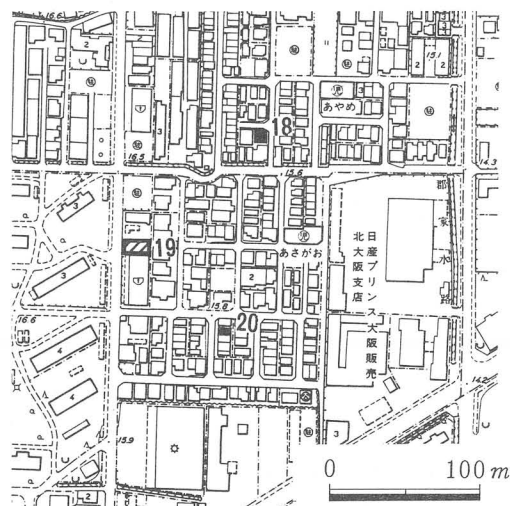


図5 嶋上郡衙跡の調査位置図(4)

## 20. 84-M地区の調査

調査地は高槻市今城町191-9番地にあたり、小字名は中久保と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南側一帯に分布する川西古墳群の西南に位置することから、遺構の分布が希薄な地域とされているところである。調査は届出地の中央部に東西辺2m、南北辺1.5mのトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1m)、耕土(0.2m)、床土(0.1m)、黄灰色砂層〔整地層〕(0.3m)、黄褐色粘土層〔地山〕であり、遺構・遺物はまったく検出できなかった。(大船)

## II. 土室遺跡

### 21. 土室遺跡の調査

高槻市上土室6丁目14・17番地にあたり、字は宿名、小字は長山及びび谷と称する。土室川分水路工事に先立って、昭和63年8月22日から11月22日まで発掘調査を行った。

調査地は、阿武山の南東斜面から連なる丘陵部の段丘崖直下に位置し、上土室遺跡のすぐ南側に隣接している。周辺には阿武山古墳をはじめ、塚原古墳群、新池遺跡、番山古墳、土保山古墳、二子山古墳(以上高槻市域)、石山古墳、太田茶臼山古墳、太田遺跡(以上茨木市域)などが所在してい

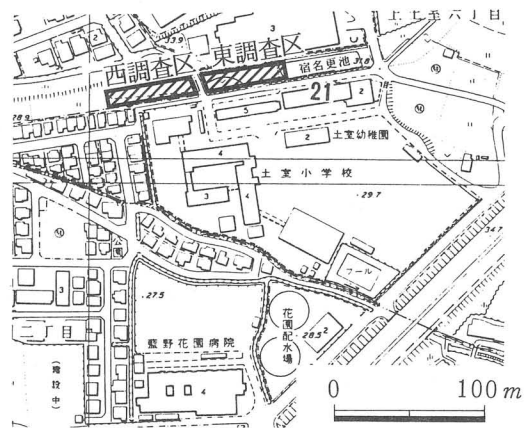


図6. 土室遺跡の調査位置図

調査地の北側は西向きの緩やかな斜面地をなし、約700mで安威川の東岸に達する。南側は約50mで茨木市域となる。東側、約60mには短冊形を呈する宿名更池があり、そこより東側の20m地点から埋没谷がはじまり、谷沿いには自然流路が存在した。西側では、約80m付近で北側の斜面が南へ張り出した地形となっており、水田化に伴ってかなり削平を受けてい

調査は、東西に調査区を設定して行った(図6)。現状は水田と荒地で、荒地は宿名更池の埋め立てによるものである。地表面の標高は、東調査区がO. P. +31.4~31.8m、西調査区がO. P. +31.2~31.3mと30.8~31.0mで、2段の水田となっている。

層序は、東調査区では、耕作土(0.2~0.25m)、床土(0.1~0.2m)、整地土層(0.2~0.3m)

をもって地山となる。東側約3分の1は、地山上に約0.7mの宿名更池の埋め立てに伴う盛土があるのみで、耕作土及び整地土層は認められなかった。

西調査区は、水田の段差にかかわらず、耕作土0.15~0.2m、床土0.05~0.1m、整地土層0.1~0.4mで地山となっている。断面観察から、本来は北から南へ約5°前後の傾きのほぼ水平な地面であったと推定される。

#### 遺構(図版第7・53)

遺構は、全て地山層の上面で確認し、東・西の両調査区で、ほぼ全面にわたって検出した。小形平窯、土壇群、掘立柱建物、井戸、溝等がある。以下、各々の遺構について記述する。

#### 小形平窯(図版第8a・54)

小形平窯は、西調査区の東寄りで検出した。東側を井戸1に切られており、西側には幅0.7mの南北溝がある。窯体はほとんど削平を受けており、上部構造は不明である。平面形は、焚口を南向きに付けた隅丸方形を呈している。現存長は幅1.0m、長さ1.6mを測り、焚口・燃烧室部分は幅0.7m、奥行1.0m、焼成室部分は幅1.0m、奥行0.6mを測る。

燃烧室は、焚口から傾斜を持って、深さ0.6mまで地山を掘り下げ、焼成部とは段を持って隔絶する。側壁・奥壁はともに硬化しており、奥壁の一部が灰白色、その他は赤褐色を呈している。床面は舟底形の断面形を呈し、厚さ約6cmの炭化物層が堆積している。その下は、茶褐色に焦げている。壁面、床面ともに粘土・スサ等を貼りつけた痕跡は認められない。

焼成室部分の床は赤褐色で、一部は灰白色を呈して硬化している。上面には幅約2~4cm、長さ約18~23cmの黒炭色に焼けた痕跡が、燃烧室奥壁上端から主軸方向とほぼ平行に5本、さらに約5cm離れて奥に8本が魚の背骨のように並んでおり、この焼けた痕跡は、焙道部分にあたと判断された。窯体主軸は、燃烧室の奥壁からみてN-3°-Wにとると推定される。残存部分の構造は、瓦窯等に見られる構造を模倣しているように見受けられる。

#### 土壇群

土壇群は東調査区西端で30基以上を検出した。平面形は不整形な円形から隅丸方形を呈し、長辺(最大幅)約0.8~2.0m、短辺(最小幅)約0.6~0.8m、深さ約0.4~0.6mを測り、埋土は灰褐色砂混シルト層である。これらは、小形平窯に伴う粘土採取壇であろう。

#### 掘立柱建物

掘立柱建物は10棟を確認した。建物1・2は西調査区西端、3・4は西調査区中央、5は東寄り、6~8は東端で、9・10は東調査区西寄りでそれぞれ検出した。

建物1は、2間×2間の総柱建物で、南北約3.6m(柱間約1.8m)、東西約3.4m(柱間約1.7m)、平面積12.2㎡を測る南北棟建物である。柱穴の掘形は、一辺約0.8mの方形で深さ約0.3mを測り、埋土は暗褐色砂混土である。

建物2は、東西2間約3.4m(柱間約1.7m)、南北1間以上(柱間約1.7m)、南北棟建物と推定される。柱穴の掘形は、一辺約0.8~1.2mの方形で、深さ約0.6mを測り、埋土は暗褐色砂混粘土である。建物1の南側に隣接して建てられていたと解される。

建物3は桁行東西3間約6.8m(柱間約1.6m)、梁間は南北3間約6.8m(柱間2.3m)で、平

面積32.6㎡を測り、西側に2m離れて廂を持つ南北棟建物である。柱穴の掘形は、南北に長い方形を呈する平面形で、長辺約0.8~1.4m、短辺約0.6m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰褐色砂混シルトで、根石を持つ。今回検出した建物の内では、最大規模のものである。また建物1との中間で、鉤形に並ぶ柱穴を、東側2.6mの所では桁方向と平行に並ぶ柱穴列を検出した。建物3に伴う柵列か、あるいは東側のものは廂になる可能性もある。

建物4は、桁行南北2間約3.8m(柱間約1.9m)、梁間は東西1間約3.7m、平面積14.1㎡を測る南北棟建物である。柱穴の掘形は、一辺約0.6~0.8mの方形で深さ約0.4mを測り、埋土は灰褐色砂混粘土である。北側へ約3.3m離れて、鉤形の柵列がある。柵列の柱穴は建物3の柱穴を切っている。

建物5は、桁行東西2間約4.4m(柱間2.2m)、梁間南北1間約2.4m、平面積10.5㎡を測る東西棟建物である。柱穴の掘形は、約0.6mの不整形な方形を呈し、深さ約0.4mを測る。埋土は灰黄色砂質シルトである。小形平窯に伴う南北溝を切る柱穴を含む。

建物6は、東西2間約3.2m(柱間約1.6m)、南北1間以上(柱間約1.6m)で、調査区外へ拡がるものである。柱穴の掘形は、一辺約0.6mの方形で深さ約0.3mを測り、根石を検出した。埋土は暗褐色砂混粘土である。

建物7は、桁行南北3間約6.4m(柱間2.1m)、梁間東西2間約4.2m(柱間約2.1m)、平面積26.9㎡を測る南北棟建物である。柱穴の掘形は、1辺約0.6mの方形で深さ0.3mを測り、根石を検出した。埋土は暗褐色砂質粘土である。

建物8は、梁間南北2間約4m(柱間約2m)、桁行東西1間以上(柱間約2.4m)を測り、調査区より東へ拡がる。柱穴の掘形は一辺約0.4mの不整形な形状で、深さ約0.2mを測り、埋土は灰褐色砂混粘土である。

建物9は2間×2間の総柱建物で、南北約3.4m(柱間約1.7m)、東西約3.2m(柱間約1.6m)、平面積10.9㎡を測る。柱穴の掘形は、径約0.5mの楕円形を呈し、深さ約0.3mを測る。埋土は灰褐色砂混シルトである。

建物10は2間×2間の総柱建物で、南北約3.6m(柱間約1.8m)、東西約3.4m(柱間約1.7m)、平面積12.2㎡を測る。柱穴掘形は、方形を呈し一辺約0.8m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。建物10と同規模の柱穴が、西へ9.4m離れて、南北方向に3間(柱間約1.7m)分並んでいるが、建物か柵列になるのか判然としない。

なお、22は柱穴8、23は柱穴9の根石の出土状況である。根石は約10cmの大きさの石を3~5個組み合わせるものと、約30cmの大きさの石を1個使用するものがある。また柱穴1は、直径約20cmの柱材の芯部分が約10cm残っていた。底部を手斧で尖頭状に加工している。根石は使用していない。

#### 井戸(図版第8b・55)

井戸1は、西調査区の東寄りで見出した。掘形の平面形は隅丸方形を呈し、東西約2.8m、南北は2.0m以上で、南は調査区外へ拡がっている。深さ約2.2mを測り、底部は平坦で、井戸枠を一段持つ。井戸枠は、約10×8cmの角材を隅柱とし、横木として下段に約8×6×75

cmの角材と、上段に約3×6×75cmの角材を用いて、井の字に組む。そして外側から幅約10cm、厚さ0.8cmの板材を縦に7～8枚並べ、さらに目かくしとして、同様の板材を用いている。縦板の外側には栈木として角材、丸太杭などを用いている。これらはすべて建築廃材の再用品品である。小形平窯の燃焼室・焚口部と、燃成室の一部を切っている。

#### 溝

溝1は東調査区の西側と、西調査区東端の南寄りで検出したが、大半が調査区外にあり、幅、長さは不明である。深さ約1.0mを測り、底部は平坦に掘られており、西向きの流れを持つと考えられる。埋土は黄灰色～灰色砂・シルトである。出土する遺物からは、奈良時代前半頃の時期を推測することができる。

溝2は東調査区の中央を東西に横切る。幅約1.4m、深さ約0.7mを測り、断面形は舟底形を呈している。埋土は黄褐色砂混粘土である。出土した遺物から、奈良時代前半の時期を推測することができる。

#### 遺物(図版第9～11、図7～9)

遺物は、調査面積に比して少量である。また、包含層が認められていないので、遺物のほとんどが遺構からの出土である。土器は、総体的に破片が多く、復元しうるものが少ない。時期的には、8～9世紀代のものが、そのほとんどを占めている。土器以外には、石製品・木製品・植物遺体等がある。以下各遺構ごとに出土した遺物の概要を記す。

小形平窯から出土した40は、燃焼室埋土の黄灰色粘質土より出土した塼の破片である。厚さ4.8cm、残存幅10.8cm、長さ9.7cmを測る。この他塼の破片は2片出土している。いずれも赤褐色を呈し、表面を簡単になでているだけの雑な作りであり、2次的な熱を受けている。

井戸1からは土師器(1～3)、須恵器(4・5)が出土した。1・2・4・5は杯、3は皿である。1は口径13.6cm、高さ3.6cmを測る。淡灰褐色を呈し、底部を平らに荒く削っている。見込み部に、キズ(×印)を付ける。2は口径17.0cm、高さ4.5cmを測り、灰黒色を呈す。口縁部は外上方へまっすぐのびる。底部～口縁部にかけて削っており、底部は平らにしている。1と同様に、見込み部にキズ(×印)を付けている。3は口径15.8cm、高さ1.8cm、淡灰褐色、底部のみ平らに削る。4は口径15.2cm、高さ4.0cm、高台部径9.4cm、高さ0.5cmを測る。灰色で底部のやや内側に、「ハ」の字状に高台を付ける。接地面は平らである。5は口径15.2cm、高さ5.3cm、高台部径11.8cm、高さ0.7cmを測る。灰色で、口縁はやや内湾みみである。底部端に、「ハ」の字状に高台を付ける。接地面は平らである。見込み部分に、一定方向のユビナデによる調整がみられる。他に墨書土器片がある。灰褐色を呈する土師器の杯で、底部の一部分に、幅約0.3m、長さ1.5cmの墨線が円弧状に記されているが、全形は不明である。木製品としては24の齋串、井戸枠等がある。齋串は、針葉樹材の薄板を用い、上端を圭頭状に作り、左右両端近くに切り込みを1ヶ所ずつ入れる。下端は剣先状に作っている。表裏面を割面のままとし、側面のみを削っている。長さ15.8cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、切り込み1.2cmを測る。図7は井戸枠に用いている建築廃材のうち、用途部が明らかなものである。8.5×15.0×99.5cmの角材を切り直して使っており、端から約30cmの所に、直径約5cm、



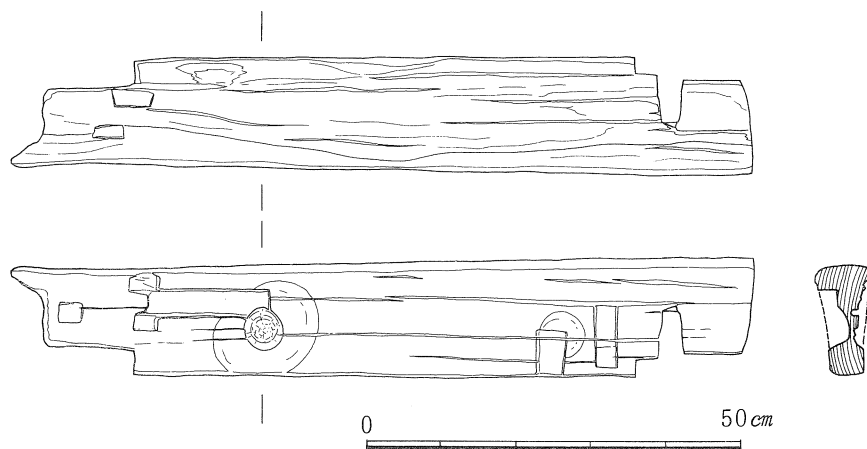


図7 土室遺跡 井戸1 井戸枿材

深さ3.5cmの軸受の穴が残っている。穴の周囲は凹面状になっている。約40cm離れて、同様に凹面状になっている所がある。3.5×2×3.0の枿穴が、3ヶ所穿たれている。樹種は、大阪府立三島高校教諭徳丸始朗氏の鑑定によると、モミである。植物遺体ではヒョウタンがみついている。

溝1からは6～12、27～39が出土した。うち9～12・37・38は須恵器、それ以外は土師器である。6・7・10～12は杯、8は鉢、9は蓋である。

6は口径14.6cm、高さ4.3cmを測り、色調は淡白褐色を呈する。摩耗が著しい。7は口径17.3cm、高さ5.0cmを測り、赤褐色を呈する。底部は平らで、体部は内弯し、口縁は外反ぎみである。外面は風化が著しい。内面は口縁部付近に、正方射暗文が1段、雑に施されている。8は口径20.4cm、高さ6.6cmを測り、赤褐色で、外面が一部灰白色を呈する。やや軟焼成である。口縁部外面をやや強くなでている。暗文は内面にヨコナデ後、雑に斜方射文を1段、右上りに施している。底部と外面は不明である。9は器径18.0cm、高さ2.4cm、つまみ径3.2cm、高さ1.1cmを測る。暗青灰色を呈する天井部はひくく、上面は平坦で、口縁部は短く端部で屈曲して下内方にのびるものである。焼成時のひずみが著しい。10は口径11.5cm、高さ3.1cmを測り、灰色を呈する。底部は平坦で口縁端部はやや外反する。11は口径13.5cm、高さ4.0cm、灰白色でやや軟焼成である。底部は平らで、上外方へまっすぐにたちあがる。底部外面に、タタキ目が2ヶ所みられる。10・11とも焼成時に大きくひずんでいる。12は口径18.0cm、高さ4.4cm、高台部径12.1cm、高さ0.7cmを測る。色調は灰色を呈する。底部は平坦で上外方へたちあがる口縁を有する。高台部は外端よりにほぼ垂直に近い形で付き、端面は内傾する平面をなし、外側で接地する。27・32・34・35は甕の口縁部、28～30は把手、31は高杯の脚部である。33は片口の鉢である。36は羽釜、37は壺、38は把手部分である。37・38ともに軟焼成で、37は内面白灰色、外面黒灰色、38は灰白色を呈する。39は磚、横幅15.4cm、厚さ4.8cm、残存長18.4cmを測り、黄灰色を呈する。

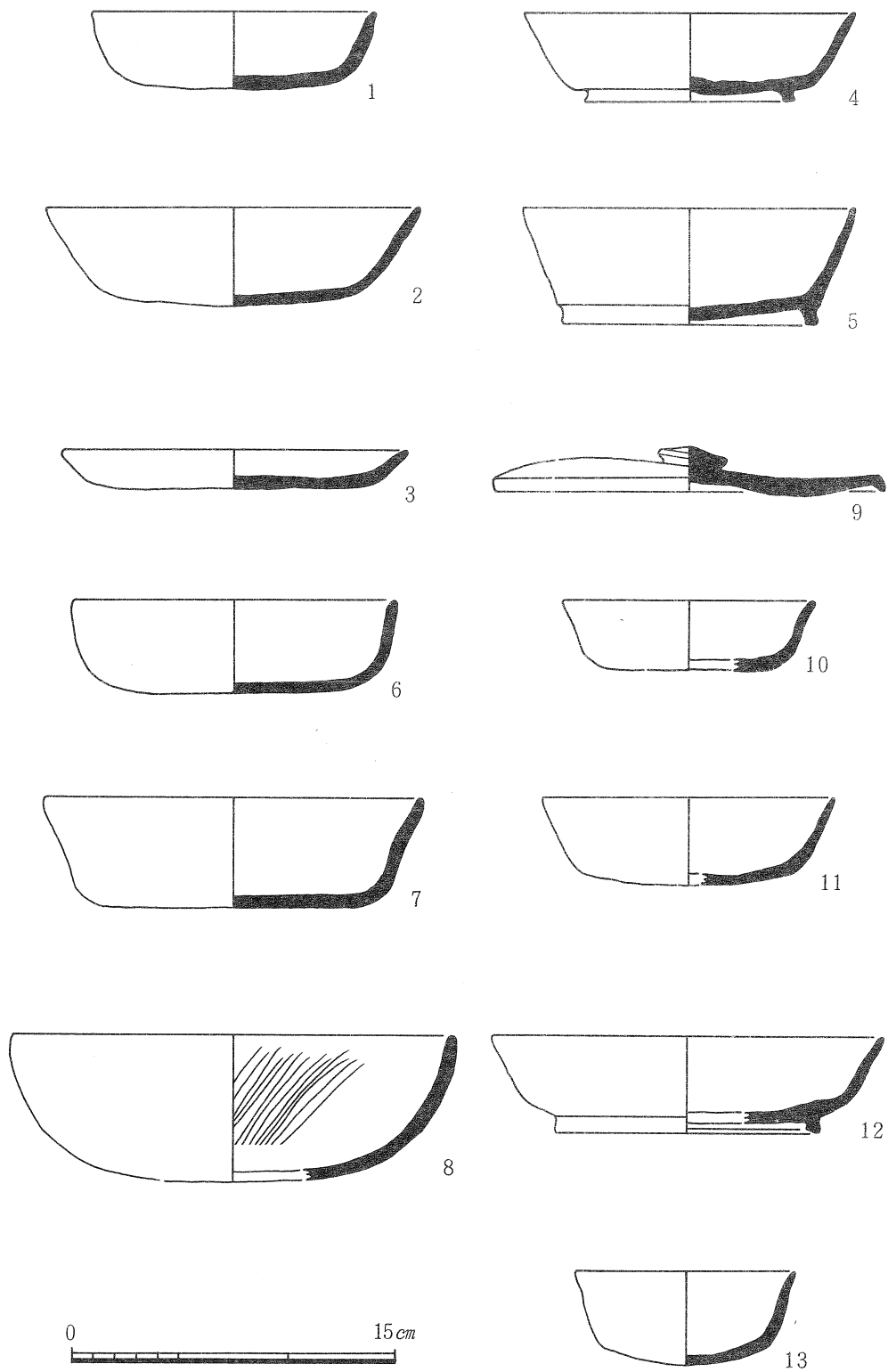


図8 土室遺跡 井戸1 (1~5), 溝1 (6~12), 土壙1 (13)

## 溝 2 (21)

溝2からは須恵器蓋(21)が出土している。

## 土 壙 (13・19・20)

土壙1からは、須恵器(13)が出土した。口径9.8cm、高さ4.3cmを測る。青灰色を呈し、口縁端部が外反する。19は土壙2出土の土師器甕である。黄白色から灰黄色を呈する。20は土壙3から出土した土師器高杯の脚部である。

## 柱穴(14~18・22・23・25・26)

柱穴1から、把手(25)、柱穴2から高杯脚部(26)、柱穴3から須恵器蓋(15)、柱穴4から甕(14)、柱穴5から(17)、柱穴6から甕(18)、柱穴7から羽釜(16)が出土している。

石製品としては旧石器や五輪塔がある。旧石器は、地山面上、あるいは地山粘土を用いた整地土層中から出土した。総数7点で、うち3点は国府型ナイフ形石器、残る4点は搔器・削器で、搔器1点にチャート製が混る。その他はサヌカイト製である。いずれも遺構に伴うものでなく、2次的に移動したものである。

五輪塔は、調査区外で、水道管切り換え工事中に出土したものである。東・西調査区間の作業杭から、3点出土した。全て花崗岩製である。うち1点を図10に示した。残存高24.6cm、空輪部の高さ14.2cm、幅17.2cm、風輪部は高さ9.8cm、幅17.2cmを測る。空輪部先端は欠損している。陰刻はない。

## 小 結

今回調査を行った土室遺跡は、新規発見の遺跡である。遺跡の範囲としては、北は調査地北側の斜面地上、南は石山古墳北側、西は調査区より西へ約150mの開析谷、東は宿名更池より東の谷地形までと推定され一部は茨木市域に及んでいる。

したがって、今回の調査区は、遺跡内の北東隅付近に設定されたことになり、東調査区内の建物9・10、あるいは溝2より東側に、遺構が検出されなかったことなどと合せて考える

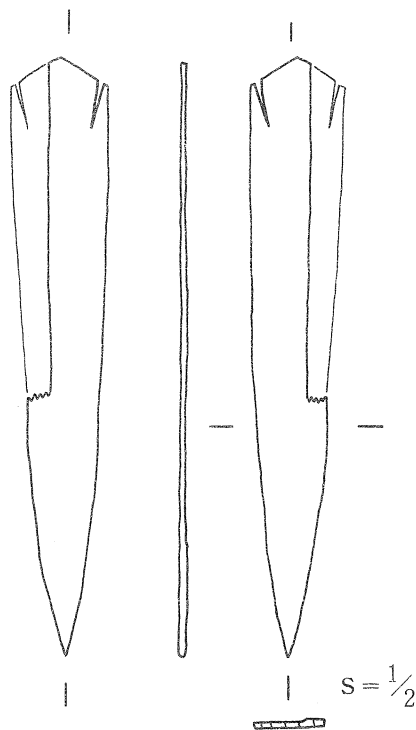


図9 土室遺跡 井戸1 斉串

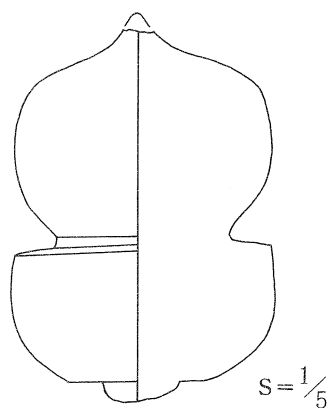


図10 土室遺跡 周辺出土の五輪塔

と、ほぼ集落の北東隅とみてよいだろう。溝2の性格づけとして、集落の端に設けられた溝とも考えられるであろう。

調査面積1200㎡から得られた成果として、とくに取り上げられるものは、

・半地下式有牀小形平窯の検出・掘立柱建物群と井戸の検出

があり、集落の一端をうかがい知ることができた。しかし、その全容を解明するに至っていないので、今後の周辺における調査の成果に期待したい。

小形平窯については、残存状況がきわめて悪く、上部構造・灰原等は検出されていないので、不明な部分が多い。したがって全容を解明することは困難であるが、想定の域も混じえながら復元を試みたものが、図版第54である。

小形平窯には、構造上必要不可欠なものとして、煙道、差し木口等がある〔陶邑 堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要1970、大阪府教育委員会〕。本例においてはその規模、取り付け位置等を復元しえなかったが、煙道は焼成室奥壁の中央付近にあったものと考えている。焼成室は、焼成室部分に検出された焼け跡状の部分で煙道部分として牀を復元し、有牀式とした。地山面を削り出すものか、盛土を用いるものか、判然としない。差し木口に関しては、焼成室の構造を有牀式としたので存在しないと考えた。

焼成室の全長約1.6mは、西側の溝が、北端で東へ屈折すること、地山層の焼け具合を示す線の延長と、本来の地山面との交点が約1.5mとなることから推定した。

幅については、燃焼室奥壁に直交する線が、窯体主軸線に平行すること、焚口部の一部をとどめること、東側を切る井戸1の掘形内に収まる幅であることなどから、約1.6mと推定した。

燃焼室部分の埋土及び周辺の遺構埋土から、磚が10数片出土しているが、幅、厚さとも全て同一の大きさ(全長20cm以上、全幅約15.5cm、厚さ約5.0cm)に収まるものである。2次的な熱を受けているものと受けていないものの割合は、4対6位で、焚口の閉塞として用いたものか、生産されていたものかは不明である。窯の時期については、井戸1の出土遺物からして、8世紀中頃以前に属すると考えられるが、明確な時期は決められない。

建物群と井戸については、集落内の数棟づつのまとまりを認めうるものの、その詳細は、今回明らかにできなかった。

検出した建物の主軸方位は、全て磁北より西へ5°前後の振れで揃い、切り合い関係のあるものも同一方位をとることが認められる。西へ5°前後振る主軸方位は、これまでの研究(「嶋上郡の方格地割に関する覚え書」嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要12 1988 高槻市教育委員会)によって、奈良時代中頃から後半にかけての時期が推定される。またこのことは建物柱穴掘形より出土した土器の時期とも矛盾しない。

井戸1は、8世紀末から9世紀初頭に、廃絶したことが推定される。集落の廃絶に伴うものとはいえないが、時期的に大きくずれるものとは考えられない。したがって土室の集落は、8世紀中頃以降から、9世紀初め頃の集落といえるのではないだろうか。

ただし、平窯は8世紀の中頃以前に窯業を行っていた集落が存在したことを示唆するもの

であり、両者が連続しているものか、別個のものかの判断は、今後の検討すべき課題である。  
(大塚)

### Ⅲ. 前塚古墳

#### 20. 前塚古墳の調査

調査地は高槻市岡本町96-1・4、97-1・2番地にあたり、小字は塚ノ前である。現状は畑であり、モータープールを造成するのに先立って発掘調査を実施した。

前塚古墳は今城塚古墳の北側に位置する。墳丘の削平がいちじるしく、現存する墳丘の規模は直径64m、高さ7mを測る。また、府道によって南側周濠が分断されている。過去に実施した測量調査によって、西向きの帆立貝形前方後円墳であることが判明している。近代になってから、墳丘を開墾した際に石棺が露出した。凝灰岩製の長持形石棺で長さ約2m、幅約0.6m、高さ約0.8mを測り、現在は大阪府立茨木高校にある。副葬品として鏡・鉄刀・鉄鉾が知られるが、詳細はあきらかでない。

調査地は古くに削平された部分にあたるため、掘削には重機を使用し、その後人力で地山面まで掘り下げた。基本的な層序は、北側で耕土(0.15m)、床土(0.2m)、淡黄褐色砂質土層〔地山〕であるが、南側では耕土(0.15m)、床土(0.2m)、旧耕土(0.1m)、整地層(0.2m)、淡黄灰色砂質土層(0.2m)、暗灰色砂礫層(0.2m)、淡青灰色粘土層・灰色礫層〔地山〕となる。

#### 遺 構 (図版第12~14・56・57)

検出した遺構は、前方部・後円部の一部分と周濠、自然流路などである。

墳丘は古くに削平・攪乱を受けているために、基底部付近しか検出できなかった。前方部はくびれから隅に向かって直線的にのびている。墳丘削平時の攪乱や流路によって検出状況はよくない。前方端部は約9mにわたって検出した。側面と同様に後世の攪乱を受けているものの、一部で葺石を確認した。くびれ部コーナー付近は、緩やかなカーブを描いている。前方部側の残存状態がよい反面、後円部側の葺石等はほとんど崩落し、自然流路に侵食されていた。

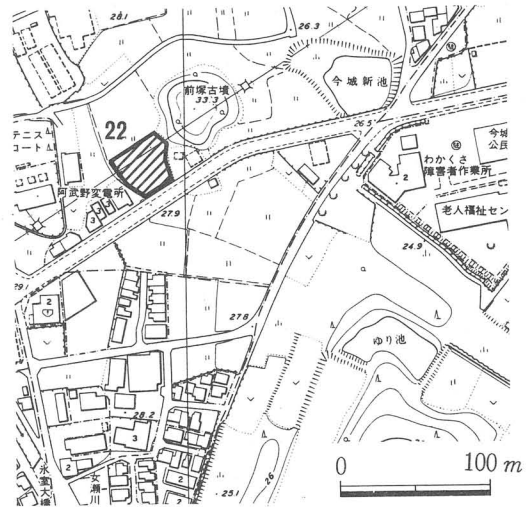


図11 前塚古墳の調査位置図

葺石はくびれ部と前方端部南側を除けば、流路の侵食や攪乱のために遺存状況はよくない。基底石は、長辺0.2~0.5m、短辺0.2~0.3m前後の矩形の石を使用している。また、長辺を墳丘と平行に据える傾向がみられる。他の部分の石は一辺0.2m以下の矩形もしくは円礫である。据えかたは一定していないが、小口側を前面にするものが多いようである。石材には在地のものを使用したとかがえられ、特に変わった材は認められない。また、埴輪列も検出できなかった。

周濠の幅は、後円部で16m、くびれ部18m、前方部10mを測り、深さは1~1.2mである。平面形は、墳丘と相似するような形態であるが、前方部は端部に向かってすぼまっていく。自然流路による侵食が著しいものの、くびれ部付近では暗灰色粘土が5cm程度堆積していることからみて、わずかながら水が溜まっていたようである。埋土からは墳丘から転落した埴輪片が出土する。断面観察により、墳丘削平時には埋められていたことが判明している。

自然流路は墳丘の南側、調査区を西から東へ貫流している。幅5~8m、深さ1.5m~2.2mを測り、くびれ部付近は淵のように深くなっていた。埋土は暗灰色粘土と暗灰色砂の互層となっている。また、北側肩には葺石や墳丘の崩落土が堆積している。この流路の侵食力はかなり強かったらしく、前方部や後円部の一部はえぐりとられている。地形測量図を見ると、西側(流路上流側)には周囲より1段低い水田があり、下流にあたる後円部南東隅では地形が乱れている。この流路の名残をしめしているといえよう。流路が開析した時期はあきらかではない。しかし、中位以下の埋土より中世ごろの遺物が出土し、上位では近世の遺物が出土していることから、中世に開析して、近世頃には埋没したとかがえることができる。

攪乱坑は数カ所認められた。葺石の内縁側にあり、いずれにも礫が投棄したように堆積している状況からみて、墳丘削平時にじゃまになった葺石を埋めたとかがえられる。また、東西に続く暗渠にも葺石を使用していた。

#### 遺物(図版第15・16)

今回の調査で出土した遺物は、埴輪と自然流路から出土した土器などである。いずれも細片で完形に復元できたものはなかった。埴輪は、墳丘が削平されるなどしているために、出土量は少なく、遺存状態もよくない。出土位置はくびれ部と前方端部及び整地層中であり、くびれ部からその大半が出土している。円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪などがあげられる。

蓋形埴輪(1~12・19)は、前方端部で出土した19をのぞけば、すべてくびれ部から出土した。完形に復元できるものはなかったが、2個体分ある。1・4は、立ち飾りの先端部分である。内・外の縁には鱗状の飾り板をつけている。また、両面ともにヘラで線刻を施している。1は灰白色、4は淡赤灰色と色調・焼成が異なり、両者は別個体と考えられる。2・3は立ち飾りと基部(受け部)の接合部分である。2条のヘラ描き線刻が認められる。色調は両者とも淡赤灰色である。5は立ち飾りの基部(受け部)である。十字形に配した立ち飾りを束ね、5cm程度の粘土版を横方向に張り付けて補強している。下方には断面円形の軸がつく。色調は淡黄灰白色である。6・7は5の軸を受ける部位にあたり、円筒形を呈している。6は上端近く、7は笠付近の破片である。色調は灰白色である。8~11は笠部の破片である。

横方向のヘラ描き沈線を2条1組で中央部に巡らし、11は裾に1条の沈線を巡らせている。また、縦方向の沈線を2条1組で描き、縦方向の沈線間の距離は、9で、約10cmを測る。12は遺存状態が悪く、どの部位かあきらかでない。受け骨の先端部分かも知れない。

円筒埴輪(13~18)は、前方部前端でもっとも多く出土した。いずれも有黒斑で二次調整はヨコハケ、端部はヨコナデを施す。ベンガラの遺存するものもみとめられる。

自然流路からは21~23・30が出土した。21は瓦器碗である。内面の暗文は粗く、外面には認められない。高台の断面は三角形を呈している。時期は、13世紀後半ごろである。22・23は底部に糸切り痕をのこす小皿である。12~13世紀ごろの東播系の皿であろう。色調は淡黄褐色である。

攪乱坑では葺石に混じって25~29・32が出土した。26は常滑の大甕である。13世紀頃であろう。27は備前鉢、時期は15世紀後半頃である。28・29は唐津の碗である。口縁付近に乳白色の釉を施している。

### 小 結

前塚古墳は、これまで本格的な発掘調査を実施しておらず、全長や平面形態など不明な点が多かった。今回実施した調査は、初めての本格的な調査であり、多くのデータを得ることができた。

墳丘は、削平が著しく旧状をとどめていなかった。後円部は調査区の関係でごく一部を検出したのみである。後円部径は、比較的残存状態のよい北東側との位置関係から判断して、69mの値を得ることができた。また、前方部は前端の葺石・基底石を確認したことによって、長さ約25mと後円部径の約1/3の値であったことが明らかになった。そしてくびれ部から隅へむかって直線的にのび、わずかに開いた平面形を呈している。墳丘は完全に削平されているが、削平時に掘ったとみられる攪乱坑からは近世ごろの遺物が出土しているので、該期に削平を受けたみることができよう。

周濠は、後円部側で16m、前方部側は10mとその幅は狭くなるが、墳丘と相似形をなすようにめぐっている。前方部前端側の幅はあきらかにすることはできなかつた。墳丘西側には現地表面で約1mの段差が認められることから、これが周濠の肩にあたると考えたい。ただ、前端線とこの段差が平行でないことから、前端部分は剣先状をしていたか、もしくは後世に整地など手を加えられた可能性がある。それゆえ、前方部の幅は葺石の位置関係や隅部の角度、地形などを考慮して約25mと推定した。

以上のことから、前塚古墳は墳丘長94m、後円部径69m、前方部長25m、前方部幅25m(推定値)、周濠幅9~16m、総長120mを測る帆立貝形前方後円墳であることがあきらかになった。この数値を築造企画(石部正志<sup>ほか</sup>「帆立貝形古墳の築造企画」考古学研究27-2)にあてはめると、1区5.5尋=約8.63m、1尋約157cmとなり、その平面形から3区型の帆立貝形古墳ということになる。周濠も後円部側2区、前方部側1区の幅で企画しているようである。いっぽう前方部幅は25mと3区に近い値を示している。3区型の古墳では前方部幅が4区以上あることが多く、前塚古墳の場合前方部は後円部に対して非常に細長く、特異な感がある。

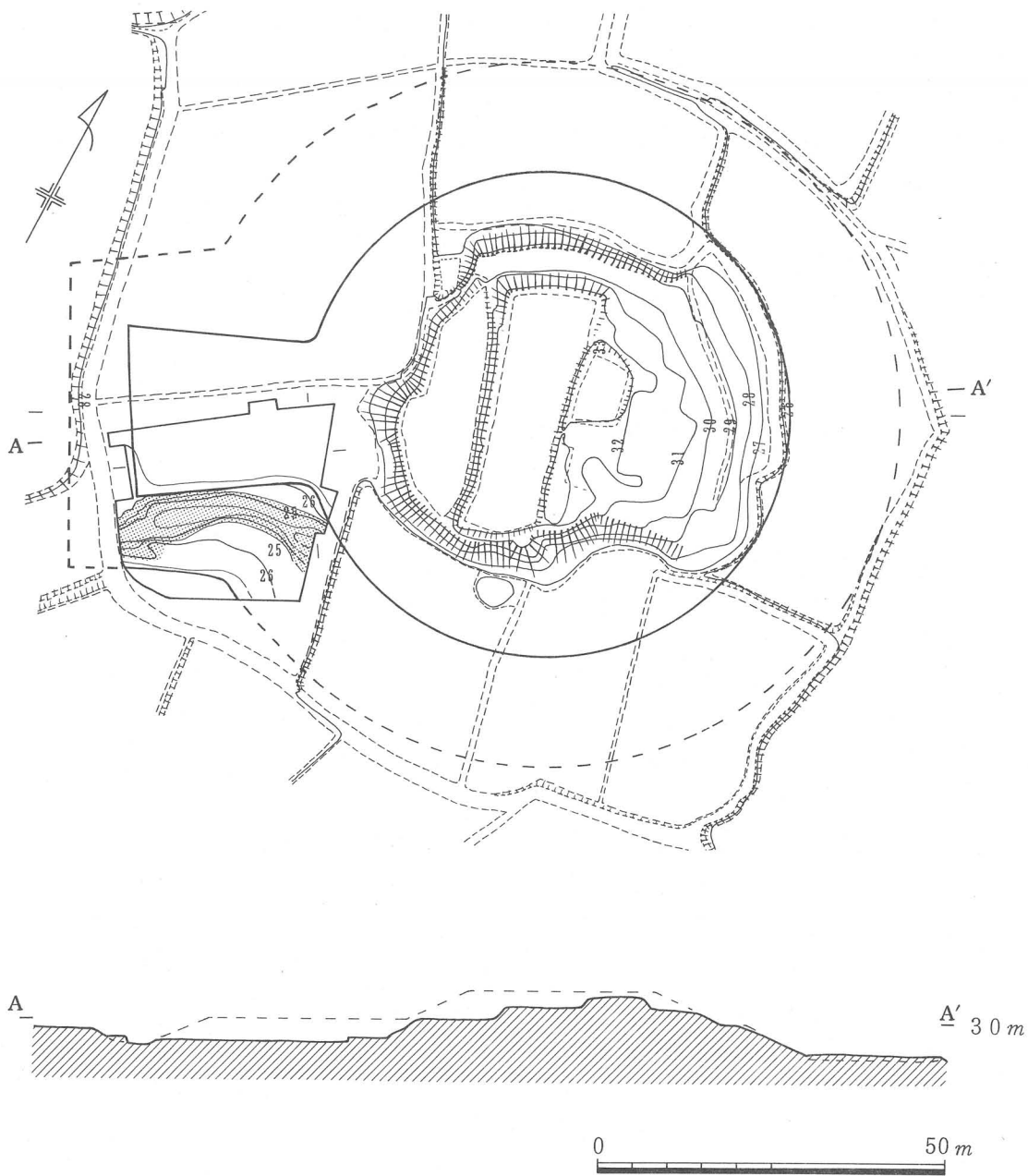


图12 前塚古墳 平面図・断面図



前方部の形態に関しては、隣接地の調査を待つて解決しなければならない課題である。

遺物に関しては、古くに削平を受けていることもあり、まとまった資料を得ることはできなかった。くびれ部から出土した蓋形埴輪2個体は、立ち飾りが大きく開いている。今回は蓋形埴輪以外の形象埴輪は出土しなかったが、過去に墳丘(後円部)の中央付近で家形埴輪片が採集されている。

前塚古墳の築造時期は、検出した埴輪や長持形石棺の編年観から5世紀はじめごろと考えられる。この時期の帆立貝形前方後円墳に限っていえば、前塚古墳は畿内でも有数の規模を誇っていることがあきらかとなった。なお、前塚古墳と同一プランであるといわれる番山古墳も帆立貝形前方後円墳である可能性が高いが、築造時期は過去の調査で出土した埴輪から判断して、前塚古墳よりは降るようである。(宮崎)

## IV. 宮田遺跡

### 23. 宮田遺跡の調査

高槻市宮田町3丁目101番地他にあたり、小字名は鎌木と称する。現状は水田であるが、このたび宅地造成工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を実施した。

宮田遺跡は富田台地(低位段丘)の中央部東寄りにあって、奈佐原の谷間から流れる小河川(女瀬川)の縁辺に所在している。今回の調査地は、宮田遺跡の南半部に位置し、昭和46・47年の調査で検出した中世の集落跡<sup>①</sup>の南方約150mの地点にあたる(図13)。当該地区の東隣の調査区では中世の水田らしきものを検出したにとどまり、ほかに顕著な遺構はみあたらなかった。しかしながら、以前の集落跡の調査において少量の縄文時代晩期後半の土器が出土していることから、該期の遺構・遺物の検出をめざして、調査区の全面にわたって数本のトレンチを設定した。調査はまずユンボでトレンチを掘削し、層序の観察をおこなったのち、遺構・遺物の検出にとりかかった。果たして、以下に述べるような縄文土器を発見することができた。

基本層序は、1層<耕土>(0.2m)、2層<整地層 [褐色土層・暗灰褐色土層・黄灰色土層]>(0.18m)、3層<淡暗灰褐色土層>(0.2m)、4層<黄褐色土層>(0.2m)、5層<暗灰褐色粘質

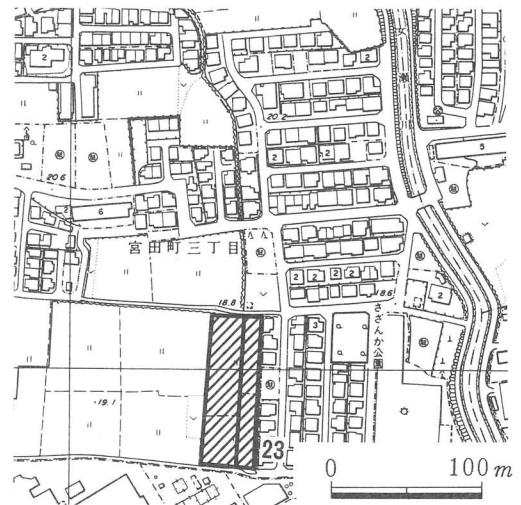


図13 宮田遺跡の調査位置図

土層〔中世期水田相当層〕(0.25m)、6層<黄茶色粘質土層>(0.3m)、7層<黄茶灰色粘質土層>(0.1~0.3m)、8層<茶灰色粘質土層>(0~0.1m〔部分的にみられる〕)、9層<淡青灰色粘土層>(0~0.15m)、10層<淡青灰色砂質土層>(0~0.3m)、11層<淡青緑灰色砂質土層>(0.1~0.5m)となり、以下12層<青灰色砂質土層>の地山となる。このなかで7層以下が縄文時代の遺物包含層である。縄文時代の地山面の標高は18.2~18.4mを測り、おおむね西から東に緩く傾斜している。

遺 構(図版第17・18、図14)

遺構としては、中世期の水田面とおぼしきものと縄文時代の土坑および風倒木による土坑を検出した程度で、顕著なものはない。

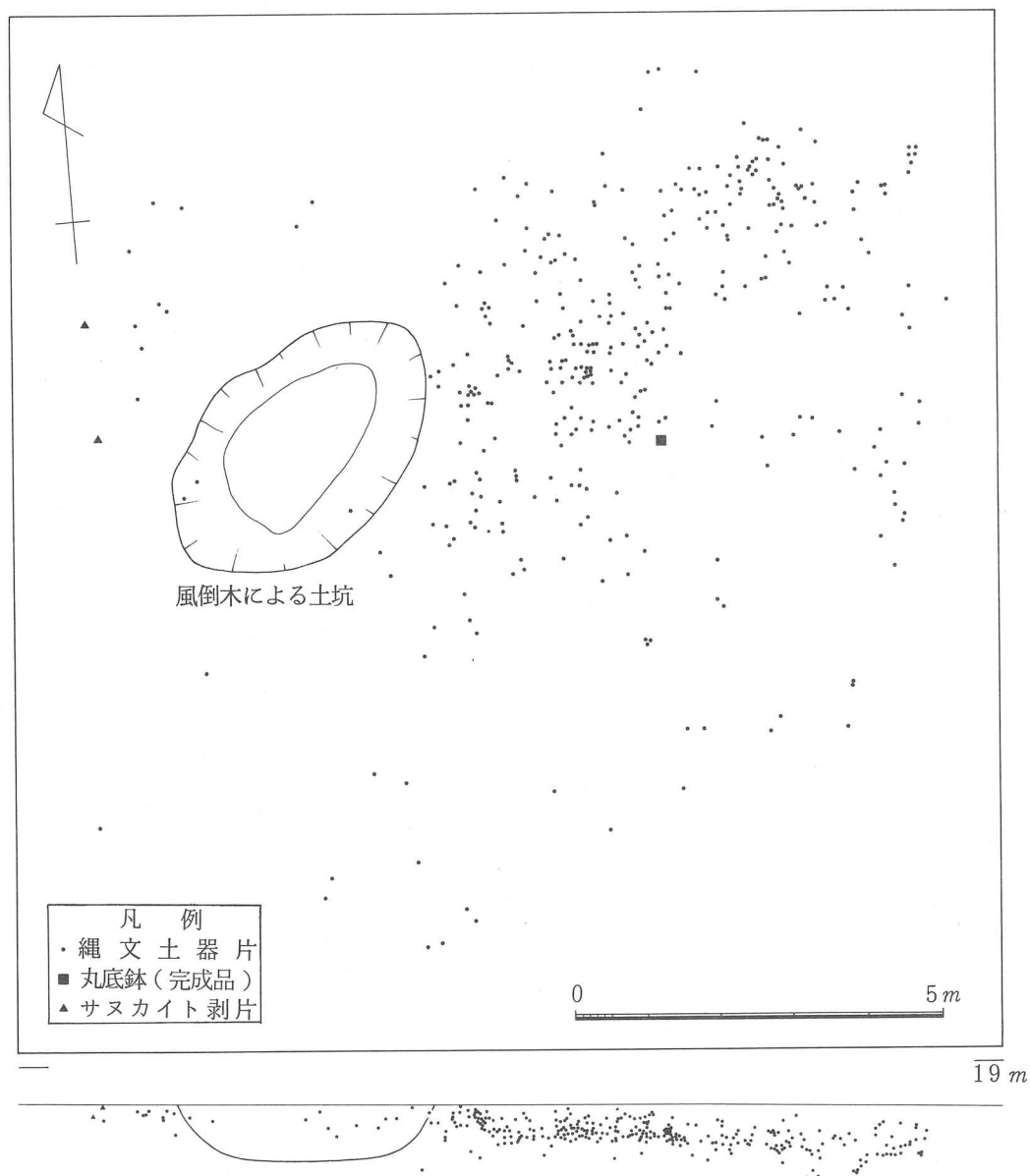


図14 I群縄文土器 水平・垂直分布図

中世の水田は調査区を横断する東西トレンチ1本と同じく縦断する南北トレンチ2本を設定し追及したが、水平に堆積している暗灰褐色粘質土層の広がりをも認めただけで、明確な畦畔や水路の痕跡は見いだせなかった。また当該層からの出土遺物もわずかに瓦器の小片を検出しただけで、水田地帯であろうとする推定を積極的に押し進めるだけの資料は得られなかった。

縄文時代の土坑は調査区の北辺部で検出した。長径1.7m・深さ0.2mを測る不整形を呈する。埋土の大半は青緑灰色砂質土で、そのなかで炭を含んだ暗青緑灰色砂質土の薄層が形成されており、周囲の土砂の流入によって埋まっていったことがわかる。坑底には若干の炭と縄文土器の細片がみられた。

風倒木によって形成された土坑は、東西3.5m・南北3.3m・現存深0.95mの規模を測る。層位的には縄文時代後期終末の土層(後述する)を切り込むかたちになっている。埋土は、周縁部に暗灰色土が貫入し、南半分は暗灰色砂質土ないし暗灰色粘質土を主体としながら、一部が底辺におよんでいるのに対し、北半分は黄灰色粘質土を主体としている。埋土の状況からすると、樹木が北側へ倒れ込んだものと考えられる。落ち込みからは縄文土器片が若干出土している。

なお遺構としては明確でないが、7層中に一個体の縄文土器が比較的まとまって出土するところがあり、もともと土坑状の掘り込みがあったものとおもわれる。また9～11層ではおよそ10m四方の範囲に約350点の縄文土器の破片が散在していた。とくに後者では同一個体とおもわれる土器片をかなりはなれたところで認めており、本来的には落ち込みのなかに二次堆積したものと判断される。

#### 遺物(図版第19～21、図15・16)

旧石器時代のサヌカイトの剥片が若干みられるほか、ほとんどが縄文土器の破片である。

サヌカイトの剥片は4点認められ、いずれも調査区の包含層中に点在していた(図版第21b)。1～3は長さ3cm程度の薄い剥片で、背面側に剥離面をもっている。石核から剥片石器を取り出す際の調整時にはぎ取られたものであろう。4は原礫面をもつ大形の剥片で、主剥離面のほかに調整痕が認められないことから、原礫から石核を作出する最初の段階に剥離したものと考えられる。サヌカイトの産地は、原礫面および剥離面の質感からみて二上山産と推測される。

縄文土器は、9～11層出土のⅠ群(図版第19・20a)と7・8層出土のⅡ群(図版第20b)とに大別される。

Ⅰ群には、有文深鉢形土器・無文条痕系深鉢形土器・小型鉢土器などがみられるが、大半は破片資料であり、形態不明の胴部片や底部片も多く認められる。

#### 有文深鉢形土器

Ⅰは波状口縁を呈する口頸部であるが、口縁部の肥厚はみられない。外面には横方向に幾条もの細くて鋭い沈線をほどこしたのち、LRの細かな縄文を付している。波頂部の下方に

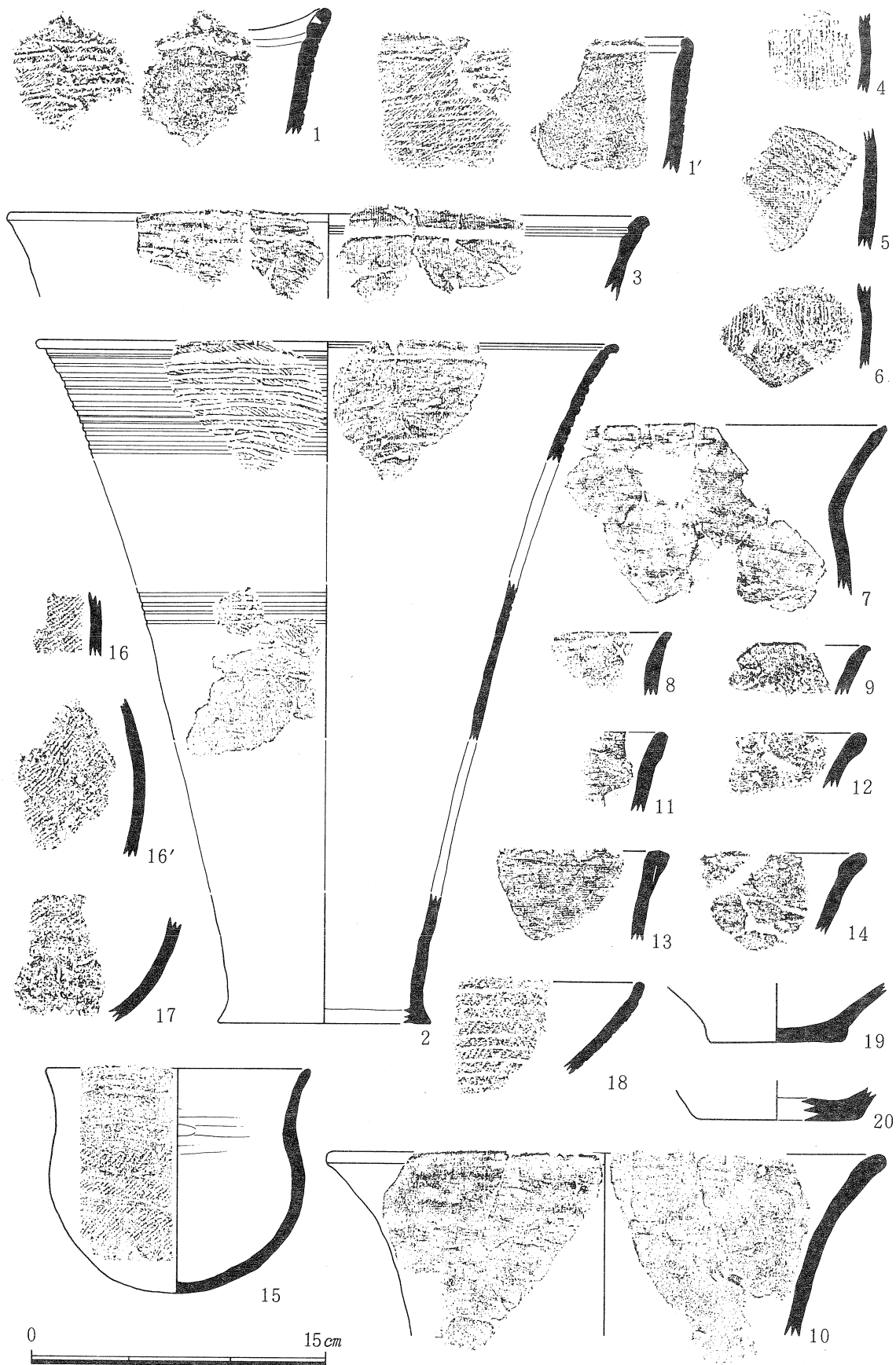


图 15 绳文土器 (I群)

は縦位にS字状の篋描沈線をつらねているが、この沈線は縄文施文後に刻まれている。内縁には口縁に沿って1条の凹線をほどこし、波頂部には刺突がみられる。胎土には砂粒を多く含んでおり、灰褐色を呈している。外面に煤が付着している。

2は朝顔形を呈する深鉢で、器高35cm程度に復元できる。口頸部は外上方に単純にひろがり、上縁部は短く外折している。底部は薄手の平底で、周縁が外方に突出している。外面は縦方向のナデ調整をほどこしたのち、器体の上半部を、口唇部にいたるまで、横位の多条沈線とRLの縄文で飾っている。1とは違って縄文の地文上に沈線をひいている。内面は下半が横方向のナデ調整、上半はヘラナデしている。上縁に1条の沈線をほどこすが、外面のそれとは原体が異なるようだ。色調は灰白色を呈し、砂粒を多く含んでいる。外面には煤が付着している。

3はやや外開きの口縁部片で、端部は丸くおさめている。外面は条痕が顕著で、内面はていねいにナデている。内縁に沿って1条の太い沈線がめぐっている。色調は茶灰褐色を呈し、微細な角閃石を含んでいる。生駒西麓産のものであろう。

4～6は胴部片で、楕状工具による垂下沈線がみられる。いずれも生駒西麓産のものだが、垂下沈線に粗密・深淺の差が顕著で、別個体である。4には頸部下端部に横位の沈線が認められる。このほかにも、これらと同一個体とおもわれる垂下沈線をもつ小片が10数片あり、その多くに煤の付着がみられる。

#### 無文条痕系深鉢形土器

全形を知るものはない。7～9は口縁部を肥厚させない部類である。7はわずかに内傾する体部から外湾気味に口頸部が立ち上がるもので、上縁部は上下からつまんで意識的に薄く仕上げ、端部を面取りしている。外面はヘラミガキで仕上げ、内面も口縁部をヘラミガキしている。胎土には粗砂を多く含み、色調は暗灰褐色を呈している。外面に煤が付着している。8・9は口縁部片で、上縁部をこころもち外反させ、端部はわずかに面をもつ。どちらも外面はヘラナデ調整し、内面はナデている。8は灰褐色、9は淡茶灰色を呈する。9の胎土には砂粒が目立ち、外面には煤が付着している。

10～14は口縁部を肥厚させる部類である。10が内外面とも、11～13が外面を肥厚させているのに対し、14は屈曲気味に外反した上縁部のみを肥厚させている。

10はやや外開きの体部から外反する口縁部に続いている。口縁部を包み込むように粘土を薄くかぶせて成形しているため、体部よりも口縁部の器壁がいくぶんか分厚くなっている。端部をわずかに面取りしている。調整は内外面とも体部がナデで、口頸部はヘラナデしている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土に多量の細砂を含んでいる。

11・12は口縁部外面をわずかに肥厚させたもので、いずれも内外面をヘラナデ調整している。色調は暗茶灰色ないし灰褐色を呈している。

13は外面に粘土帯を貼付したもので、上縁部ほど肥厚が顕著である。口縁端部を面取り気味に撫でつけている。色調は淡茶褐色ないし茶褐色を呈する。胎土には砂粒が目立ち、角閃石や金雲母を多く含んでいる。生駒西麓産。

14は外反させようとする上縁部にやや太めの粘土紐を継ぎ足したために分厚くなったと考えられるものである。内外面ともナデ調整している。色調は暗茶褐色を呈し、角閃石を含む。生駒西麓産。

#### 丸底鉢形土器

1点の完形品のほか、胴部とおもわれる破片が若干ある。15は球形の体部に外反気味にたちあがる口縁部がつき、口径13.5cm・器高11.3cmを測る。器面はナデ調整しているが、頸部から口縁部にかけてはナデ削ったような痕跡がみられる。体部中位には上端に閉端部をもつLRの縄文をほどこしている。地文上には2本の条線がめぐっているほか、下端部でも条痕が縄文の一部を消している。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡茶灰色を呈している。

16の破片は上方にLRの縄文が観察されるもので、断面のカーブからみて、15とほぼ同形・同大の小型鉢と考えられる。16'はLRの縄文地に条線がめぐっている破片で、16と同一個体のものである。どちらも胎土に含まれる砂粒は粗くて、色調は暗茶灰褐色を呈している。外面に煤がわずかに付着している。

17は薄手の破片だが、やはり器面にLRの縄文が付されている。胎土は極めて砂質で、色調は淡灰褐色を呈している。外面に煤が付着している。

#### 浅鉢形土器

18は内湾気味に大きくひらいた水平口縁の浅鉢の口縁部片で、外面には、深鉢1と同じく、横位の多条沈線の施文後にLRの縄文をほどこしている。ただし1と比べて、沈線がやや太くなっており、縄文も粗目で角度もきつい。内面はていねいにナデられていて、器壁もやや薄い。胎土・色調からみて、生駒西麓産と考えられる。

#### 底部

19は平底となる円盤の上面縁端部に粘土を継ぎたして成形したもので、やや突出した形になっている。胎土は砂粒を多含し、色調は灰褐色を呈している。

20も同様に粘土を継いでいるが、円盤の側縁をナデあげて成形するために、体部へ直線的に移行している。胎土に角閃石と金雲母を多く含み、色調は茶褐色を呈している。

Ⅱ群は若干の細片をのぞけば、浅鉢と鉢をあげるにとどまる。

#### 有文浅鉢形土器

21は波状口縁の有文浅鉢で、口径29.6cmを測る。底部を欠くが、器高は14～15cmになろう。口縁部は短く立ち上がったあと内湾気味に外上方へひろがり、波頂部は4ヶ所みとめられる。それぞれの波頂部の外面およびその直下の屈曲部に小巻貝の圧痕がみられるほか、波頂間の口縁部にも上下2段に同様の圧痕をほどこしている。波頂部の圧痕は小巻貝(ヘナタリか)の先端部をあてがい、それをひきおろすことによって印しているのに対し、ほかのは扇状圧痕となっている。また口縁外面に3条の凹線がめぐっている。器面は全体にナデ調整がみられ、外面に煤が付着している。胎土には長石・石英・角閃石を多く含み、暗茶褐色を呈している。生駒西麓産のものである。

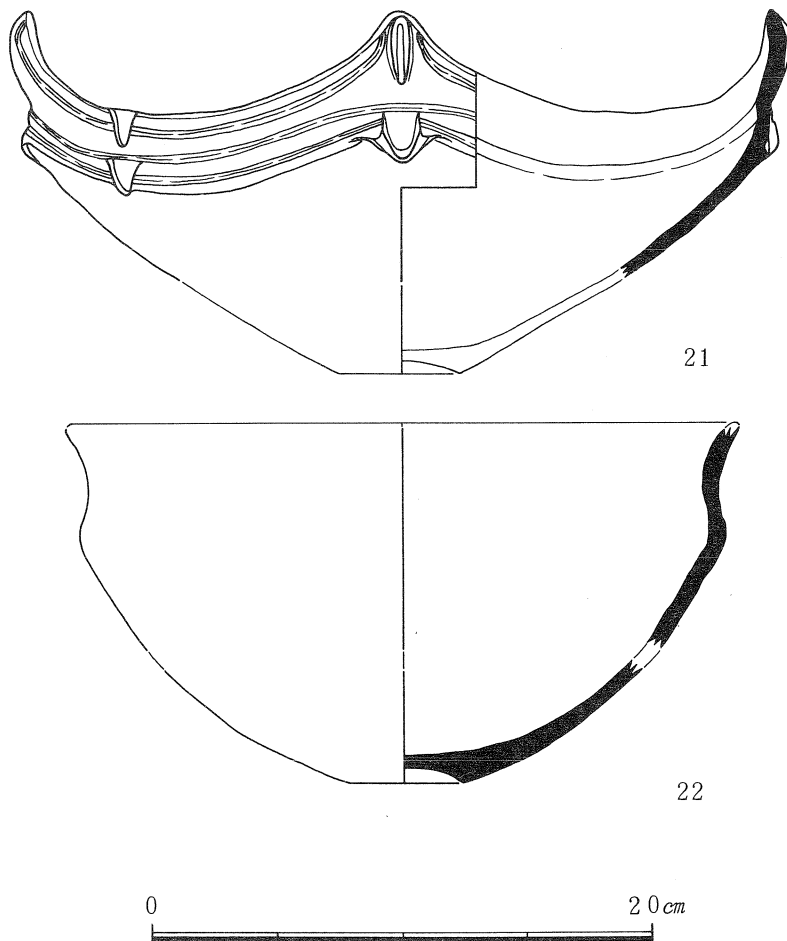


図16 縄文土器(Ⅱ群)

#### 無文鉢形土器

22は口縁端部を欠くが、無文の鉢とみられる。口径26.5cm・器高14cm程度の大きさに復元される。半球形の体部に外反する口縁部がつくもので、底部は皿状に凹んでいる。体部外面は条痕が顕著だが、口縁部はナデている。胎土・色調は22と同じで、生駒西麓産である。

#### 小 結

今回の調査で検出した縄文期の遺構は土坑と落ち込みぐらいで、集落の具体像を示すだけの資料は得られなかった。しかしながら、後述するように、後期のなかでも中葉(Ⅰ群)と末葉(Ⅱ群)の土器が上層と下層に分かれて出土しており、以前に検出した晩期の一群とあわせれば相当の期間にわたって集落が営まれていたと推定されるようになった。今後の周辺地区の調査を期して、縄文のムラを解明していきたい。

遺物ではⅠ群とⅡ群の縄文土器について若干検討してみる。

Ⅰ群の約350点の土器片のなかで、口縁部の形態や文様などから器種の判明したものは、上記した18点にとどまるが、注口土器を除いたおおよその器種は出揃ったものと考えられ

る。あらためて示せば有文深鉢形土器(1～6)・無文条痕系深鉢(7～14)・丸底鉢(15～17)・浅鉢(18)となり、他の大多数は有文・無文深鉢の胴部片および若干の底部片である。これらを北白川上層式～元住吉山Ⅰ式の編年のなかに位置づけるために、泉拓良氏が設定した形式分類<sup>②</sup>に照合させれば、Ⅰ群の組成は深鉢A'(1)、深鉢BないしC(4・6)、深鉢D(2)、深鉢G(7～14)、鉢B(15・16)、浅鉢A(18)ということになろう。また3は深鉢Bかともおもわれるが、むしろ桑飼下遺跡<sup>③</sup>の第4群沈線文系深鉢Fの形式に対応させるのが無難である。このⅠ群のなかには形式変化が比較的明瞭におさえられている深鉢Aの典型例が欠落しており、その比定にやや困難がともなう。そこでⅠ群の時期を考定するために、これらのなかのいくつかについて検討してみたい。

まず深鉢A'(1)は口縁部外面にみられる文様の在り方からみて、A類にふくめて考えるべきものだが、Ⅰ群のなかに「ゆるく内湾する口縁」や「T字形や逆L字形口縁」をもつものがみられず、A分類から派生したA'類としてとらえた。そこで波頂部下方のS字状沈線文についてみると、北白川上層式3期の資料である桑飼下遺跡第4群の同種文様(磨消縄文系深鉢Cの2など)と比べれば、後者は連続する蛇行文であるのに対して、前者は沈線が途切れ途切れになっており、まさにS字状に刻まれている。また横位の直線文との対応も、後者が蛇行文部を区切りとして、きちっと割り付けて施文しているのに、前者はS字文が区切りとならず、横位沈直線文帯→LR縄文→波頂下のS字文の順で施文しており、S字文と沈直線文との一体性がうすれてきている(図版第21a左)。このことは「縦方向から横方向」へ施文形態が転換していく流れ<sup>④</sup>のなかで、縦方向の文様が軽んじられていく過程を示すものとうけとれる。

つぎに深鉢D(2)をみると、口縁上端部の外折が顕著な特徴となる。東日本系の形式である深鉢Dは北白川上層式1期以降3期にいたるまで、口縁部が内折する形態から口頸部が素直に外反する形態へと移行することが確かめられており、2のようなものは従来あまり知られていない。類品としてはやはり桑飼下遺跡の第4群沈線文系深鉢I(4)があげられるが、形式変化の流れからみて本品はその直後におくのが妥当なようだ。とくに口縁端部が外折する形態は、D類がそれまでもっていた東日本系の形態的就縛を払拭した段階での所産と考えられる。また横位に多条の沈直線文をかさねる手法も、さきに深鉢A'で記した施文形態の流れに合致するものであろう。

深鉢Gでは9個体分の口縁部片があり、いずれも外反している。そしてそれらは肥厚する部類としない部類に大別されるとともに、広狭の差こそあれ、端部を面取りするものが目立っていた。北白川上層式各期の口縁部形態の変遷は、素縁で端部を丸くおさめるもの(1期)から、次第に肥厚するものが多く(2期)なり、やがて外反気味に薄く仕上げているものが主体になる(3期)とされている。Ⅰ群にみられる口縁部の肥厚は低平な段状になったものと端部にむかって徐々に厚くなるものであって、2期にみられるような外端面に粘土帯を貼付して内傾気味に調整したもの<sup>⑤</sup>は認められない。さらに留意したいのは、3期の特徴とされる口縁部の先端を薄く仕上げているものがみられない反面、端部を面取りするものが多い



という事実であろう。とくに後者は後続する一乗寺K式の指標とされていることから、このI群の深鉢Gは現行の北白川上層式3期のなかでもより新しい傾向をもつものといえよう。

鉢B(15・16)で注目されるのは口径と器高に大差がないという、この形式としてはかなり深身の器形を呈することであろう。丸底鉢の形態は北白川上層式1・2期では口径が器高の2倍ちかくあるような比較的浅いものが主流であって、3期になるとそれが若干深くなる傾向がみられるようになるが、15のような割合をもつ器形は管見では知らない。また鉢Bは体部と口縁部外面に斜行縄文をほどこし、頸部を無文とするのが通例であり、ときとして口縁部界に沈線文や段を有している。しかるに15では口縁部の縄文を欠いているのと合わせて、胴部のLR縄文の上端に閉端部をのこすこと(図版第21右)などは、口頸部を無文化し胴部のみに施文しようとする現象、言い換えれば頸胴部界に沈線文や段をはじめから設けない意志が反映したものであったとおもわれる。

以上、形式の判明しているいくつかの資料についてみてきた。現在近畿地方の後期縄文土器は初頭、前・中葉・後葉の3段階に分けられ、それぞれまたいくつかの型式に細分されている。ここで比定の対象となる前・中葉段階については、北白川上層式1期・同式2期・同式3期・一乗寺K式・元住吉山I式の各型式に編年されており、おもに組成の単純化から北白川上層式3期と一乗寺K式の間には画期が求められている<sup>⑥</sup>。そこでI群の資料を編年づけるために、上記の検討結果をあらためて示せば、深鉢A'(1)では施文の構成変化から、深鉢D(2)や深鉢Gは口縁部形態の変化過程から、鉢Bでは器形と施文の変遷から、それぞれ現行の北白川上層式3期に直続するものと判断される。しかし一方では一乗寺K式に深鉢D・F、丸底鉢、浅鉢Aが消滅していることが明らかにされており、I群の資料はそれ以前ということになる。したがって上記の検討を踏まえれば、I群は北白川上層式の1期～3期の変遷のなかで、なおかつその延長線上に位置する資料とみるのが、正当な評価ということになる。ただし、このI群のみで型式設定はとてまかなわず、当該資料が北白川上層式3期の新相として同式同期に大きく包みこまれるのか、独立させうるのかは、今後の類似資料の増加を持って検討すべきものとする。

ところで、個々の土器を観察したときに、しばしば生駒西麓産のものを見出し、その量が多いことに気付いた。そこで350点余りの土器片すべてについてみたところ、半数近くのもの生駒西麓産の土器片であった。この意外な事実がなにに起因するのかは判然としないが、I群土器を理解するうえにおいて、看過できない事象とおもわれる。

II群では浅鉢と鉢の2点を検出したのみであるが、浅鉢(21)にみられる小巻貝の扇状圧痕や凹線文様の特徴から、後期末葉の宮滝式土器と考えて大過ない。また鉢(22)にみられる凹底も、この型式に類出するものである。ただこの2点がいずれも生駒西麓産の土器であることは注目される。この点に関しては、I群での状況も踏まえて、あらためて考えてみたい。ちなみに宮滝遺跡の出土品<sup>⑦</sup>で、諸書にしばしば引用されている波状口縁部の深鉢(図版第26上図『宮滝の遺跡』)についても、淡茶褐色の色調とその胎土に角閃石と雲母を含むことから、生駒西麓産とみなせるものであった。こうした類品は宮滝式に属する他の土器のなかに

も少なからず認めている。

なお、この概要を報告するにあたり、坪井清足・佐原真・泉拓良・松尾信裕の各氏から種々教示いただいた。感謝申し上げます。(森田)

- 注 ① 富成 哲也 1973「宮田遺跡」『高槻市史』(考古編)  
② 泉 拓良 1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』  
③ 渡辺 誠編 1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館  
④ ②と同じ。  
⑤ 中村友博<sup>ほか</sup> 1976『縄手遺跡2』東大阪市遺跡保護調査会 後期Ⅷ群土器(第14図2・6)  
⑥ ②と同じ。  
⑦ 末永 雅雄 1986増補『宮滝の遺跡』

## V. 富田遺跡

### 24. 富田遺跡の調査

調査地は、高槻市富田町4丁目2516番地であり、小字名は市西ノ口町である。現状は宅地である。個人住宅建て替えにさきだち、調査区内に2m×4.5mのトレンチを設定した。盛土・整地層の除去には小型ユンボを使用し、その後人力で地山まで掘り下げて遺構・遺物の検出に努めた。層序は盛土(0.1m)、暗茶灰色土層〔整地層〕(0.6m)、黄褐色礫土層〔地山〕である。

調査の結果、近世以降の落ちこみを2ヶ所検出した。両者とも深さ0.2~0.3mを測り、調査区外へと広がっている。埋土は暗灰色粘土1層である。遺物は弥生土器や瓦片がわずかに出土したのみである。(宮崎)



図17 富田遺跡の調査位置図

## VI. 郡家今城遺跡

### 25. 郡家今城遺跡の調査(1)

調査地は高槻市氷室町1丁目768-1番地にあたり、小字名は石橋と称する。現状は宅地である。このたび住宅建て替え工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北西部に位置し、遺構の分布が希薄な地域とされているところである。調査は届出地の中央部に東西辺3m、南北辺2mのトレンチを設け、小型ユンボを使用して遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は表土(0.2m)、盛土(1m)でそのすぐ下は黄褐色粘土層の地山面となり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

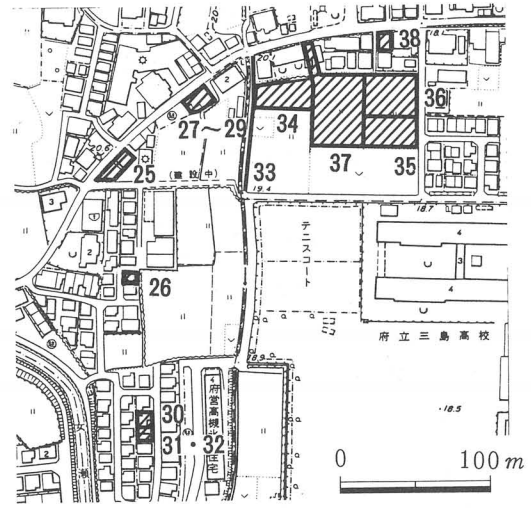


図18 郡家今城遺跡の調査位置図

(大船)

### 26. 郡家今城遺跡の調査(2)

調査地は高槻市氷室町一丁目779-7番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅建築工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

今回の調査地は郡家今城遺跡の北西部に位置し、掘立柱建物群を検出した昭和62年度調査地〔概報12：郡家今城遺跡(2)〕のすぐ西側にあたる。このため調査は、遺構の広がりを確認するべく届出地の中央に3m×3mの調査区を設定し、人力で掘削して遺構精査をおこなった。

層序は、盛土(0.7m)、旧耕土(0.15~0.25m)、床土(0.05~0.1m)、暗茶褐色土層(0.45~0.6m)〔遺物包含層〕、黄灰色~灰白色粘土層〔地山〕となる。地山面は南に傾斜し、標高は約19.1~19.3mをはかる。

暗茶褐色土層は炭粒をわずかに含み、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器片が少量出土した。いずれも小片であるが器種としては杯・高杯・甕などがみとめられ、時期は8~9世紀代に属する。

遺構としては、調査区底が起伏を有し、地山面に暗茶褐色土が島状に貫入していること、付近の調査例では遺物包含層の厚さが0.1mを越えることは少ないことなどから、本調査区が落ち込み等の大形遺構の中央部にあたる可能性が高い。(鐘ヶ江)

### 27～29. 郡家今城遺跡の調査(3)

高槻市氷室町一丁目767-1、764-3番地にあたり、小字名は石橋と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅建築工事を目的として土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

届出地は郡家今城遺跡の北西部に位置し、旧西国街道に面している。昨年調査した近世～近代の瓦工場跡〔概要12：郡家今城遺跡(4)〕のすぐ北側にあたり、ひきつづき平窯跡が存在することが想定された。そのため調査は、重機で表土を排出し、人力で遺構の検出をおこなった。基本的層序は表土(0.05m)、黒褐色土層〔耕土〕(0.1m)、黄褐色粘土層〔床土〕(0.1～0.2m)、灰褐色粘土ないし淡褐色土層〔整地層〕(0.1～0.2m)、灰白色粘土〔地山〕となり、地山面の標高は約19.6mをはかる。調査区南半部の整地層は木炭・焼土を含む暗褐色～黒褐色土が複雑に堆積し、部分的な整地がくりかえしおこなわれたことを示していた。

#### 遺構・遺物(図版第22)

遺構としては、平窯1基、井戸2基、暗渠1条、窯壁等の廃棄跡と粘土採掘跡多数を検出した。

平窯は調査区の中央部南側で検出した。昨年度南側調査区で検出した窯Ⅲの北側で窯Ⅹの北西側に位置する。復元長径4.8m、短径1.9m、現存深0.3mをはかり、南側調査区で検出した平窯と同程度の規模構造である。同位置で1度やや方向を違えてつくりかえられており、主軸の方位は下層がN-4°-W、上層がN-5°-Eをはかる。床面は上層のみ遺存し、3面が確認できた。この窯は井戸1埋め戻し後に整地層の上面からつくられており、掘形と窯体の間は当初は真砂土が、窯つくりかえの際には粘土が、充填されていた。また焼成室下には瓦片がぎっちり詰められていた。おそらく焼成室をかさ上げするためとおもわれる。窯構築にあたっては瓦塼は用いず、瓦片と窯土で築いている。

なお昨年度の調査区で北側につづくことが確認された窯Ⅹについては、その延長部分が浄化槽にあたり調査できなかつたため、今回検出した平窯との先後関係は不明である。

井戸1は、平窯の北側燃焼室～焼成室下から検出した。円形素掘りで深さ約0.9m、底径約1mをはかる。底を浚えてから埋められたらしく、泥土や遺物はまったくみとめられなかつた。

井戸2は、平窯の西側で検出した。掘形は長径2.0m、短径1.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.8mをはかる。底から約0.2m上方で、一辺0.8mの井戸枠の痕跡がみとめられた。

暗渠は、幅、深さとも0.25m程度をはかり、井戸2から西南へ伸び、途中で南へ屈曲して調査区外へつづいている。屈曲部までは直径22cm、長さ33cmの瓦質の土管を用い、その先は瓦片を詰めたもので、井戸からの排水用とかがえられる。

粘土採掘跡および廃棄跡は、ほぼ調査区全面にわたって検出された。平面形、規模とも一定しないが、深さは0.2～0.3m程度をはかる。切り合い関係から、まず粘土採掘跡が形成され、ついで焼土・木炭・瓦片・窯体片などの廃棄跡が形成されたことが推察される。窯井戸、暗渠はいずれも粘土採掘跡を切っていることが明らかであるものの、相互の先後関係は確認

できなかった。

遺物としては暗渠の瓦質土管のほか、窯埋土、採掘跡・廃棄跡から瓦片が出土した。瓦片については棧瓦片が大多数を占め、ごく少数の道具瓦とみられるものの破片がみとめられたが、全形を知ることのできるものはなく、各遺構の時期を明確にできる資料は得られなかった。

#### 小 結

今回検出した遺構は、昨年度南側調査区で明らかになった瓦製造遺構と一体のものである。両年度の調査の結果、当該窯場には少なくとも13基の平窯と井戸3基が存在したことが知られる。これら遺構は、両調査区ともその縁辺に沿う形でつくられていることから、街道に面して店を構え、裏手を作業場としていた瓦屋をかんがえた前回の所見を補強する結果となった。その敷地としては、両調査区を西・南辺とし、北を西国街道、東を南北水路に区切られたほぼ台形を呈する約1,000㎡程度が考えられよう。しかし窯場の全容については今後に譲らねばならない。

なお、本遺跡の本体をなす奈良～平安時代の遺構・遺物は全く検出されず、当該地は当時の集落の範囲から外れていたと考えられる。(鐘ヶ江)

#### 30. 郡家今城遺跡の調査(4)

調査地は高槻市氷室町1丁目781-13番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地であるが、今回住宅の建て替えが計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

調査は東西3m、南北2.3mの調査区を設けておこなった。層序は、盛土(0.5m)、黒灰色土〔耕土〕(0.2m)、淡青褐色土〔床土〕(0.2m)、灰色砂礫〔女瀬川旧河道堆積〕である。遺構・遺物は全くみつからず、灰色砂礫上面で自然流路を確認したのみである。(高橋)

#### 31. 郡家今城遺跡の調査(5)

調査は高槻市氷室町1丁目781-17番地にあたり、小字名は下河原である。現状は宅地であるが、新たに住宅建て替えが計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

調査は東西2.0m、南北1.2mの調査区を設けておこなった。層序は、盛土(0.5m)、黒灰色粘質土〔耕土〕(0.15m)、淡灰色粘質土〔床土〕(0.1m)、淡黄灰色粘質土〔地山〕である。この地山は女瀬川旧河道の堆積と思われる。遺構・遺物は全くみつからなかった。

(高橋)

#### 32. 郡家今城遺跡の調査(6)

調査地は高槻市氷室町1丁目781-17番地にあたり、小字名は下河原である。現状は宅地であるが、新たに住宅建て替えが計画されたため、発掘調査を実施した。

調査は東西2.5m、南北1.0mの調査区を設けておこなった。盛土(0.7m)、黒灰色粘質土〔耕土〕(0.2m)の下層には淡青褐色粘土があり、さらに下層にいくにしたがって微砂質と

なっていく状況が観察された。おそらく、これは女瀬川旧河道の堆積であろうと思われる。

遺構は調査区が狭小なため明確にしがたいが、断面観察によれば淡青褐色粘土に一部ピット状の落ち込みがあり、土師器片もごく少量ではあるがみつまっている。

最近、当調査地の周辺(下河原地区)で調査が度々おこなわれているが、明確な遺構・遺物がみつからず、郡家今城遺跡は女瀬川旧河道までは広がっていないと考えられてきた。しかし今回の調査では、ごく一部とはいえ遺構の存在の可能性を指摘した点で重要であろう。

(高橋)

### 33. 郡家今城遺跡の調査(7)

高槻市郡家新町42番地他にあたり、小字名は石橋、現状は道路である。三島高校西北隅から北側の旧西国街道までの道路の整備工事に伴い土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委関係者とも協議のうえ調査を実施した。

調査地周辺では本年度も12件の調査を実施しているが、当遺跡の北限を知るような資料も得られている。調査は道路の路肩を幅約1m、長さ約68mにわたって小型重機で掘削した後を人力によって遺構検出作業を行なった。

調査の結果、耕土(0.2m)、床土(0.05~0.1m)の下は黄灰色あるいは黄白色の砂質粘土が厚く堆積するのみで遺構・遺物はまったく検出されなかった。(橋本)

### 34. 郡家今城遺跡の調査(8)

調査地は高槻市郡家新町44-3番地他にあたり、小字名は石橋と称する。現状は水田である。このたび個人住宅建設工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

当該地は本遺跡の北西部に位置し、旧西国街道から約20m南側の東西に長い土地である。このため調査は、重機を使用して排土を東西に反転し、人力で遺構精査をおこなった。層序は、耕土(0.2m)、黄褐色粘土層〔床土〕(0.05m)、灰白色粘土層〔地山〕となり、地山面はほぼ平坦で標高約19.9mをはかる。

調査の結果、全面から瓦製造に伴うと考えられる窯体・焼土・瓦片の廃棄跡1カ所と粘土採掘跡多数を検出した。

粘土採掘跡は17ヶ所を数え、とくに調査区東南側は、幅0.1~0.3mの畔状に地山を残して整然と採掘跡が並んでいた。それぞれ深さ0.2~0.3m、幅2~5m、長さ5~16mの矩形を呈し、採掘土量は4~6㎡と見積もられる。埋土は黄褐色~淡褐色粘土ないし茶褐色土で、棧瓦片が一部に混じっていた。

廃棄跡は調査区中央部で検出した。3m×7mの南北に長い不整形を呈し、深さ0.15~0.35mをはかる。埋土は木炭、焼土を含む黒褐色土で、窯体・瓦片が多量みとめられた。当初平面形から平窯跡かとおもわれたが、断面観察をおこなった結果、単なる廃棄跡と判明したものである。

今回検出した廃棄跡及び採掘跡は、近世～近代の瓦製造に伴うものとかんがえられる。今年度調査した氷室町一丁目767-1番地他(本概報25～27項)は、今回調査地の西側約25mに位置し、同項で推定した瓦屋の敷地とは南北水路を挟んで接している。したがってこれら遺構は、当該瓦屋にかかわるものとみてよいであろう。

また奈良～平安時代の遺構については全く検出されず、埋土も遺物包含層を客土した形跡はみとめられなかったところから、本遺跡は当該地まで及んでいないとかんがえられる。この点、後述の当該地東側の調査区でも似た結果が得られており、本遺跡の北限をほぼ把握しつつある。これまで、本遺跡の北限は旧西国街道におき、同街道は山陽道をほぼトレースしているのとみて、これが付近で北へ屈曲しているのは本遺跡が広がっていたためとかんがえてきた。ところが昨年度から今年度にかけて、本遺跡の北西～北部の面的な調査をおこなったところ、遺構の分布は北部ほど散漫な状況を呈している。山陽道についてもこれまでのところ郡衙周辺のような石敷・側溝は発見されていない。したがって今後、本遺跡北部については山陽道の所在と、集落との関係を追及していく必要があるとかんがえられる。(鐘ヶ江)

### 35. 郡家今城遺跡の調査(9)

高槻市郡家新町48番地の南半部で小字名は茶屋之前である。現状は水田で、今回分譲住宅を建設する目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ事前に調査を実施した。

当調査区は府立三島高校の北側約50mにあたり、これまでの周辺の調査では、旧石器時代から平安時代にかけての遺構・遺物が数多く検出されている。昨年度においては、すぐ南側で平安時代の井戸・溝・掘立柱建物が検出されており、これらの遺構が当調査区にも広がっていることが予想された。調査は届出地全面の耕土・床土を重機で除去し、以下は人力掘削による作業を行なった。

#### 遺 構(図版第23・24・58・59)

調査区の層序は、耕土(0.2m)、床土(0.1m)、灰褐色土(0.15～0.2m)で地山は黄灰色土である。

調査区中央で幅約5mの溝1が検出された。この溝はほぼ東西方向に掘削されたもので、調査区西部にかけて徐々に浅くなり、調査区西端では肩部は不明となる。深さは調査区東端で約1mを測る。溝内から奈良時代の須恵器・土師器の破片が出土しているが、黒色土器A類杯Bや灰釉陶器も含まれているため平安時代中期に埋没したものとみられる。

溝2・溝3は溝1とほぼ同一方向をとるもので溝内には黄灰色砂が堆積していた。この黄灰色砂は調査区西部に広がるもので、溝の肩部は必ずしも明瞭なものではない。

溝1の南側と、溝2の南側に柱穴が検出されたが、規模にかなりのばらつきがあり建物としてまとめることができなかった。なお、溝1北側の肩部は南側より0.5m程低く、北側では遺構は検出されなかった。土地の古老の話によれば、国道171号線建設等や耕地整理の際に水田面をかなり削平しているとのことであった。

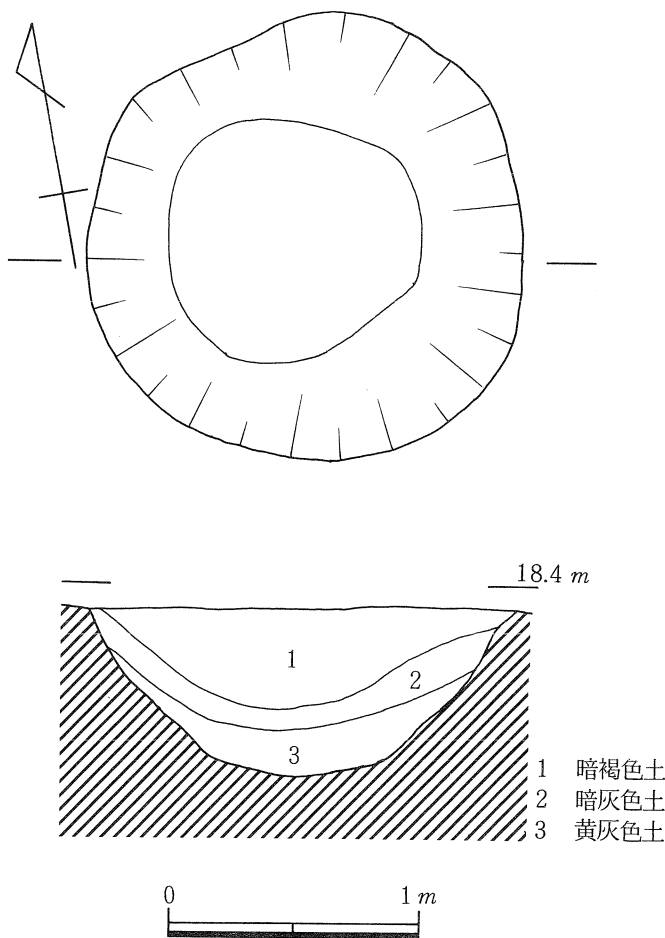


図19 郡家今城遺跡(9)井戸1 平面図・断面図

溝1の南側で2基の井戸が検出された。井戸1は奈良時代末～平安時代初頭、井戸2は平安時代中期に属するものである。

井戸1は直径1.75m、深さ0.65mを測る円形で、井戸枠は検出されなかった。埋土から土師器・須恵器・製塩土器が検出された。

(図19)。

井戸2は掘形上面で一辺1.6m、底部で一辺0.8m、深さ1.55mを測る。井戸枠は四隅に直径0.2mの柱をたて、ほぞ穴に横棧をさしこみ、その外側に幅約0.5mの板を縦にたてたもので「縦板組隅柱横棧どめ」と呼ばれる。枠の内法で一辺0.7mを測り、底部には直径0.55m、高さ0.5mの曲物をすえて水溜としている。縦板と

#### 遺物(図版第26～28・図20)

灰褐色土層からも奈良～平安時代の遺物が出土しているが、まとまりのある井戸1・2を中心を概要を記していく。

井戸1からは土師器杯(1)、須恵器杯(2・3)、製塩土器(12～17)が出土している。土師器杯は底部をへら削りするb手法のもので、須恵器杯は高台が底部の端に付くものである。製塩土器は粗製砲弾型といわれるもので、15・17のように粘土紐の痕跡が明瞭なものが多い。内面は指先でなでて仕上げるもの(12・14・17)と細かい布目の付くもの(15・16)がある。

井戸2からは黒色土器A類杯B(8・9)、土師器皿(4)・杯(5～7・18・19)、須恵器瓶(10)、緑釉陶器(37～39)が出土している。黒色土器は外面をへら削りして、内面をていねいにへら磨きしている。8の内面には暗文が施されている。土師器皿・杯はすべて口縁部を横



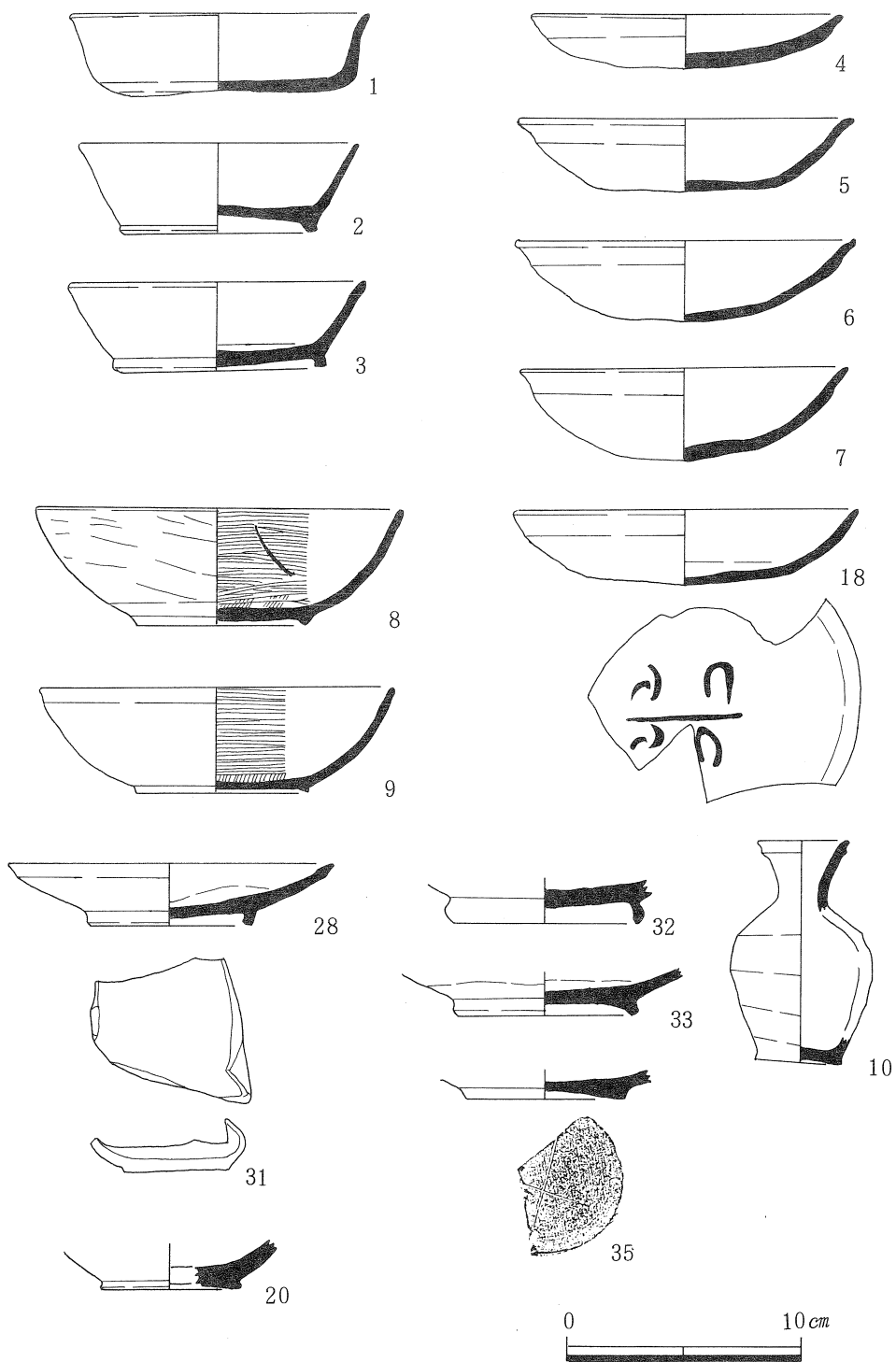


図20 郡家今城遺跡 (9) 井戸1 (1~3), 井戸2 (4~10), 溝1 (28)  
 包含層 (31~33・35)  
 郡家今城遺跡 (11) 包含層 (20)

なでする手法である。18の底部外面には墨書があり、何らかの呪術を示すものであろうか。須恵器瓶は底部を糸切りしたもので体部に凹凸がみられる。36・37は底部も施釉された硬質の緑釉陶器で、37は円盤高台を削り出している。いずれも京都洛西窯の製品とみられる。38も底部まで施釉されているが、貼り付け高台であり、東海産のものともみられる。

溝1からは灰釉陶器皿(28)、緑釉陶器素地(29)、東海産緑釉大型瓶(40)が出土している。灰釉陶器皿は内面の口縁部付近を中心に刷毛塗りの灰釉が施され、角高台が付く。黒笹14号窯式と黒笹90号窯式の間位置する黒笹5号窯式に類似している。

包含層からも灰釉陶器の耳皿(31)、椀(32・33)が出土している。耳皿は底部糸切りである。椀は三日月高台で、刷毛塗りの釉を施し、内底面に重ね焼き痕がある。また、円盤高台にヘラ記号のある緑釉陶器素地(35)や蛇の目高台の緑釉素地(36)、須恵器平瓶(34)の把手部分も出土している。(橋本)

### 36. 郡家今城遺跡の調査(10)

高槻市郡家新町48番地の北半部で、小字名は茶屋之前である。現状は水田で、今回共同住宅を建設する目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に調査を実施した。

当調査区の南側では今年度の調査(11)で奈良～平安時代の溝・井戸等が検出されているが、その遺構が北側へどの程度広がっているのか注目された。

調査は南側の調査区から約10m北側に、重機で幅3mのトレンチをL字状に延長22mにわたって設けた。耕土(0.1～0.2m)、床土(0.05m)を除去すると砂質気味の灰白色土が全面に堆積し、遺構・遺物はまったく検出されなかった。南側の調査区でみられた灰褐色土も認められず遺跡の北限を示しているものとみられる。(橋本)

### 37. 郡家今城遺跡の調査(11)

調査地は、高槻市郡家新町47・45番地の一部で小字名は茶屋之前である。現状は水田で、今回宅地造成を行う目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ事前に調査を実施した。

当調査区の南側は昨年度に、東側は今年度に調査を実施したことは前述のとおりであり、これまでの遺構が当調査区にも広がっていることが予想された。

調査は東側の調査区の状況からみて、届出地北半部は遺構が希薄であるとみられたため、届出地南半部の耕土・床土を重機で除去し、以下を人力掘削した。予想どおり、遺構は南側に集中していたが、調査区西端近くで南北方向の溝が検出され、北側へのびていることが判ったため、北部に小トレンチを3ヶ所設けて溝の延長部分を確認した。

#### 遺 構 (図版第25・28)

層序は耕土(0.2m)、床土(0.1m)、灰褐色土(0.2m)と堆積し、地山は黄灰色粘土である。南東部で柱穴群が検出されたが、そのすぐ北側に東側調査区の溝2・3の延長部分が検出さ

れた。この付近では地山面を黄灰色砂礫がおおっていた。また、この付近から北側は地山面が0.3m程低くなっており、建物を除いて遺構は検出されなかった。建物の柱穴も極めて浅いものであり、かなりの削平が行われたことを示している。

溝2は調査区東南隅の柱穴群を画するような形で、南側の肩部は明瞭に確認できたが、北側の肩部はわずかな痕跡しか確認できなかった。幅は約1mである。溝3は氾濫時に溝底や肩部を流水がかなり削ったらしく、蛇行したような状態で検出された。幅も一定ではないが1m程度である。溝2・3の溝内および周辺に堆積している黄灰色砂礫から奈良時代を中心とする土師器・須恵器が出土したが、黒色土器A類や灰釉・緑釉陶器の破片も少量ながら含まれている。

溝2・3の北側に掘立柱建物が2棟分検出された。建物1は3間分の柱列(柱間2m)が一方のみ検出された。柱穴の掘形は一辺0.5~0.6mの方形で、方向はN-10°-Eである。建物2は直径0.3~0.4mを測る円形の柱穴で、桁行3間(柱間2.1m)、梁間2間(柱間2m)、方向はN-87°-Wで溝2・3とほぼ同じ方向を示している。

建物1・2の西側で柱間2mの柵列を検出し、方向はN-11.5°-Eである。

これら建物1・2、柵列から土師器の細片がわずかに出土しているが時期を確定することはできない。

調査区西側では蛇行しながら南北方向に掘削された溝4を検出した。調査区北方に設けた小トレンチでも検出され、やや蛇行しながら調査地外へ延びているようである。溝幅は1~1.2m、深さ0.4~0.5mを測る。遺物はまったく検出されなかったため時期は不明であるが、溝内に植物の腐食したものが堆積していたため比較的近時に掘削されたものであろう。

溝4の延長部分確認のために設けた小トレンチでは、耕土・床土を除去するとすぐに地山の黄白色粘土となり、灰褐色土も認められないため調査区北方には遺構が拡がっていないものとみられる。

#### 遺物(図版第26・27b、図19)

遺物は調査区南東部の灰褐色土および溝2・3周辺の黄灰色砂礫から出土したが、完形に復元できるようなものは無かった。しかし、東海系緑釉陶器素地(28)をはじめ灰釉陶器には角高台で内面に厚く施釉する椀(26)や三日月高台で重ね焼痕のある椀(27)も出土している。

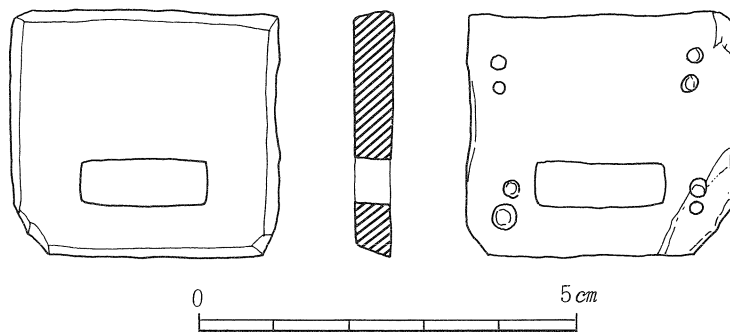


図21 郡家今城遺跡(11) 石鈎帯

なかでも20は越州窯系青磁碗の底部破片である。いわゆる蛇の目高台を呈すもので、胎土は粗く淡褐色である。全面に淡黄緑色の薄い釉が施され、高台外面に白色砂が付着している。さらに、石銚帯の巡方(11)が出土している。横幅3.3cm、縦2.9cm、厚さ0.5cmを測り下方に長方形孔を穿っている。裏面の四隅に2孔一对の潜り孔をあけている。材質は大理石とみられる(図21)。

### 小 結

三島高校北側の3調査区の状況からみて、郡家今城遺跡の北限をほぼ確定できるようになった。また、溝1～3、井戸2から出土した遺物からみて当調査区周辺の遺構は10世紀前葉には姿を消していたものとみられる。

今年度の調査で注目されるのは石銚帯、越州窯系青磁の出土である。越州窯系青磁の府下での出土は大阪市瓜破・同長原、東大阪市西の辻遺跡と本市嶋上郡衙跡であり、今回の出土で5遺跡目となる。越州窯系青磁は平安京や太宰府・鴻臚館を除くと出土量が極端に少なくなり、出土地は地方官衙や官的性格を有する遺跡が中心とみられている。また、昨年度の調査では青銅製の丸鞆が出土しており当遺跡の官的性格が強く印象づけられる。(橋本)

## 38. 郡家今城遺跡の調査(12)

高槻市郡家新町49-3、51-1番地にあたり、小字名は石橋と称する。現状は宅地で、このたび個人住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

届出地は旧西国街道に北面し、郡家今城遺跡の北東部に位置する。調査は届出地の北側に1.5m×5mの調査区を設定し、小型ユンボで盛土を排土後、人力で遺構精査をおこなった。層序は盛土(0.3m)、旧耕土(0.3m)、黄灰色粘土(0.1m)、灰白色粘土〔地山〕となる。地山面は西南から北東へゆるく傾斜して標高は約18.2mをはかり、すぐ北側の旧西国街道とほぼ同レベルである。

調査の結果、遺構、遺物ともまったく検出されず、遺物包含層もみとめられなかった。このことは前出33～35項の調査区で、北半部には遺構が希薄であったことと符号し、当該地は遺跡の範囲外にあたるものとかがえられる。(鐘ヶ江)

## Ⅶ. 郡家本町遺跡

### 39. 郡家本町遺跡の調査

高槻市郡家本町1560-2番地にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。嶋上郡衙跡北方の低い丘陵上に位置し、本遺跡の北東部にあたる。このたび個人住宅増築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のう

え、発掘調査を実施した。

調査は、重機で盛土を排出し、人力で遺構・遺物の精査に努めた。層序は盛土(0.45m)、暗褐色粘質土層〔客土〕(0.4m)、暗黄色粘土塊を含む暗褐色土層〔客土〕(0.3m)、灰緑色砂質粘土層〔地山〕である。地山面の標高は約30.1mをはかる。

客土中に土器細片を見いだしたが、風化が激しく時期、器形とも明らかでない。遺物包含層及び遺構は、客土のさい削平を受けたものか、全く確認できなかった。

(鐘ヶ江)

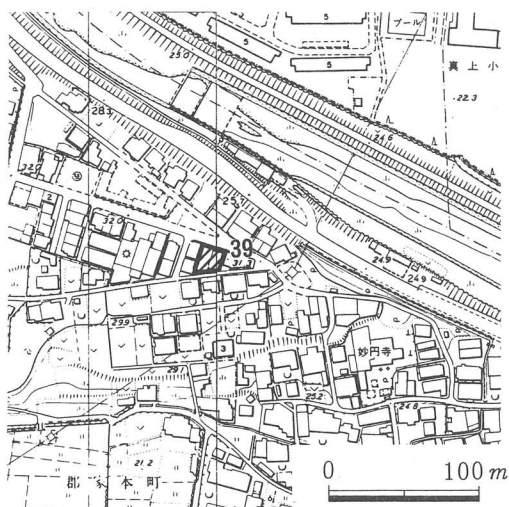


図22 郡家本町遺跡の調査位置図

## Ⅷ. 大蔵司遺跡

### 40. 大蔵司遺跡の調査(1)

高槻市大蔵司2丁目204-1番地にあたり、小字名は二反田と称する。現状は宅地であるが、このたび個人住宅増設工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を実施した。

調査は小型ユンボで届出地の北寄りにトレンチを設定しておこなった。層序は、盛土(0.05m)、旧耕土(0.1m)、床土(0.1m)、茶褐色土層〔遺物包含層〕(0.3m)、暗灰色砂礫層〔地山〕となる。調査区が狭小なためか、明確な遺構は検出されなかった。遺物も包含層から古墳時代とおもわれる土師器の微細片が出土した程度で他に目立ったものはない。

当該調査区は大蔵司遺跡の西端部に位置していることから、調査当初より遺構の希薄なところとかがえられていたが、調査の結果、案に違わず暗灰色砂礫層の地山を検出した。おそらく遺構はこの近くまで広がっていないとおもわれる。すくなくとも弥生時代から古墳時代にかけての集落は南北に縦貫する府道あたりが西限になるものとおもわれる。(森田)

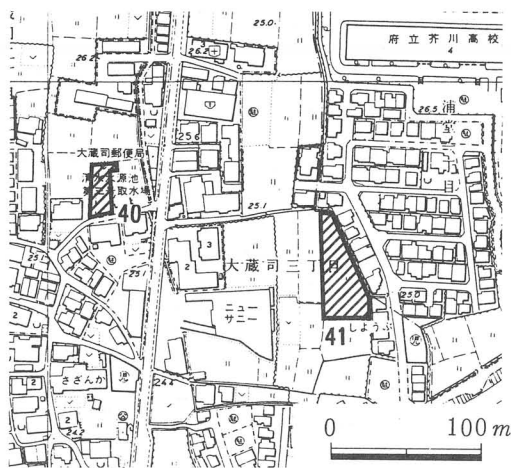


図23 大蔵司遺跡の調査位置図

#### 41. 大蔵司遺跡の調査(2)

大蔵司遺跡は、芥川と真如寺川が形成した沖積地上にひろがり、その範囲は東西400m、南北600mを測る。今回の調査は、個人住宅の建設にさきだって実施した。調査地は高槻市大蔵司3丁目102番地に位置し、遺跡の中心付近にあたる。現状は水田、小字名は三反田である。これまでの調査では、弥生時代から断続的に集落が営まれていたことが明らかになっている。特に隣接地では、奈良・平安時代の掘立柱建物を検出していることから、当該地にも同様の遺構が存在すると考えられた。調査地内には、A・B2ヶ所のトレンチを設定し、重機で表土を除去した後、人力で地山面まで掘り下げて遺構・遺物の検出に努めた。

##### 遺 構(図版第29・60)

Aトレンチは、調査地の北側に設定した43m×17mを測る台形状のトレンチである。層序は耕土(0.2m)、床土(0.1m)、暗灰色粘質土層〔整地層〕(0.2m)、灰褐色粘土層〔遺物包含層〕(0.1m)、黄灰色砂礫層〔地山〕である。南側半分は、暗青灰色粘土層と暗灰色砂礫層が地山となっている。地山面の標高は約23.5mを測り南東に向かって緩やかに傾斜している。

検出した遺構は、掘立柱建物3棟・土塋1基である。掘立柱建物は地山の状態の良い北側に集中し、地山が礫土層になる南側では遺構は少ない。

掘立柱建物1はトレンチ中央で検出した。桁行4間(6.2m)×梁行2間(4.5m)の規模をもつ南北棟である。柱列軸の方向はN-5°-Wを測る。柱掘形の形状は方形を呈し、1辺0.6m、深さ0.2~0.4mである。すべての掘形に径15cm前後の柱が遺存していた。桁行に対して梁行の長い点が特徴的である。

掘立柱建物2は、掘立柱建物1の北で検出した南北棟である。規模は、桁行3間(5.1m)×梁行2間(3.4m)であり、柱列軸の方向はN-8°-Wを示す。柱掘形の形状は、方形で1辺0.5m、深さ0.2~0.4mを測る。西側柱列には径0.15~0.2mの柱が遺存していた。

掘立柱建物3は、トレンチ北端付近で検出した。東側2間分(4.4m)のみ検出し、大半は調査区外にある。柱列軸の方向は、N-0°-Wと磁北に一致している。柱掘形は1辺0.7mの方形で、深さは0.8mを測る。0.2m前後を測る柱根がわずかに遺存していた。

土塋1は南東隅で検出した。短辺0.8m、長辺1.8m以上を測り調査区外につづく。深さは0.3mを測り、埋土は暗灰色粘土1層である。7世紀末~8世紀初頭頃の遺物が出土した。

Bトレンチは、Aトレンチの南側に設定した。20m×7.5mの規模で、層序は耕土(0.2m)、床土・整地層(0.15~0.2m)、暗褐色礫土層〔遺物包含層〕(0.1~0.2m)、暗灰色礫土層〔地山〕である。地山以下は暗灰色礫土層と褐色砂礫層の互層となっている。地山は二次堆積層で形成しており、数カ所の浅い落ちこみが認められたほかに、遺構は検出しなかった。

##### 遺 物(図版第30・31)

検出した遺物は調査面積に比べて少なく、完形に復元できた土器も数点であった。Aトレンチからは、奈良時代を中心とした遺物が出土した。1~4・12・19は土塋1から出土した。1は須恵器の蓋である。口径12.9cm、器高1.8cmを測り、かえりは短くひねりだしている。

陶邑編年のⅢ-3段階にあたる。色調は暗灰色である。2は口径15.7cm、器高3.5cmを測る。色調は暗灰色を呈し、胎土中には砂粒が多くみとめられる。口縁部のかえりは消失して無い。Ⅳ-1段階。杯身3・4はともに

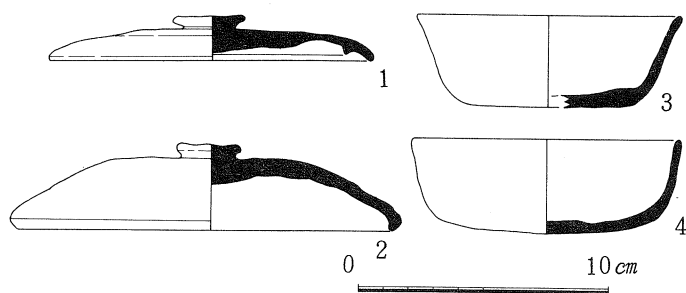


図24 大蔵司遺跡(2) 土壌1(1~4)

口径10.5cm、器高約3.7cmを測る。口縁部は内外面とも回転ナデ調整を行うが、底部外面はヘラ切り後未調整である。土師器杯(12)の口縁部は強くヨコナデを施し、端部はゆるやかに外反している。内面には左上がりの斜放射暗文を一段施している。色調は淡赤灰色である。

掘立柱建物から出土した遺物は少ない。13は土師器鉢の口縁部である。内面をナデ、外面をハケ調整し、口縁端部は内傾して凹面をなしている。14は土錘である。現存長1.5cm、直径1.3cmを測る。中央には径0.5cmの孔をうがっている。大蔵司遺跡では、比較的土錘の出土例は多い。掘立柱建物1より出土。掘立柱建物2から出土した土師器杯(16)は、口縁部内面に中央より正放射暗文・斜放射暗文をそれぞれ1段配している。また外面にはヘラミガキが認められる。淡茶灰色土層からは7世紀末~8世紀中頃の遺物(15・17・18・21)が出土した。製塩土器(15)は内湾した先細りの口縁部形態である。胎土には白色砂粒が顕著であり、器厚は0.8cm前後である。色調は淡茶褐色を呈している。今回の調査で出土した製塩土器はこの1点のみである。8は口径17.1cm、腹径26.5cm、残存高18.6cmを測る。口縁端部は面をなし、1段の楕描波状文を施す。肩にも楕描波状文を1段施している。色調は淡茶灰色である。9は、口径15.1cm、腹径25cm、現存高19.6cmを測る。内外面ともにハケ調整を施している。色調は茶褐色である。8・9はAトレンチ南側に拡がる青灰色粘土層から出土した。

Bトレンチからは、弥生時代後期~古墳時代の土器などが出土した。これらは明確な遺構にとまなうものではなかった。5は片口の鉢である。口径30.1cm、器高24.4cmを測る。体部下半はタタキ成形後ナデ、上半はなでている。口縁部はヨコナデを施し、一方をひねりだして片口としている。淡灰褐色。鉢(6)は口径9.4cm、器高6.1cmを測る完形品である。外面はタタキ成形後、口縁部をなでている。色調は淡茶褐色を呈している。7は高杯の杯部である。口径23.1cm、現存高6.5cmを測る。やや風化が進んでいるが、内面には放射状に施されたヘラミガキが看取できる。色調は淡茶灰色である。5~7は落ちこみ出土である。暗褐色礫土層〔遺物包含層〕からは10・22~30が出土した。小型丸底壺(10)は口径7.8cm、最大径8cm、器高7.6cmを測る。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリをおこなう。色調は暗茶褐色を呈している。壺(22~24)・高杯(25)・甕(26・27)・鉢(28)などの弥生土器は、すべて小片であり、復元できるものは認められなかった。石製品(30)は長さ15cm、幅6.4cm、厚さ4.2cmを測る。断面の形状は、扁平ぎみな楕円形を呈している。中央両側には、それぞれ幅約3cm、

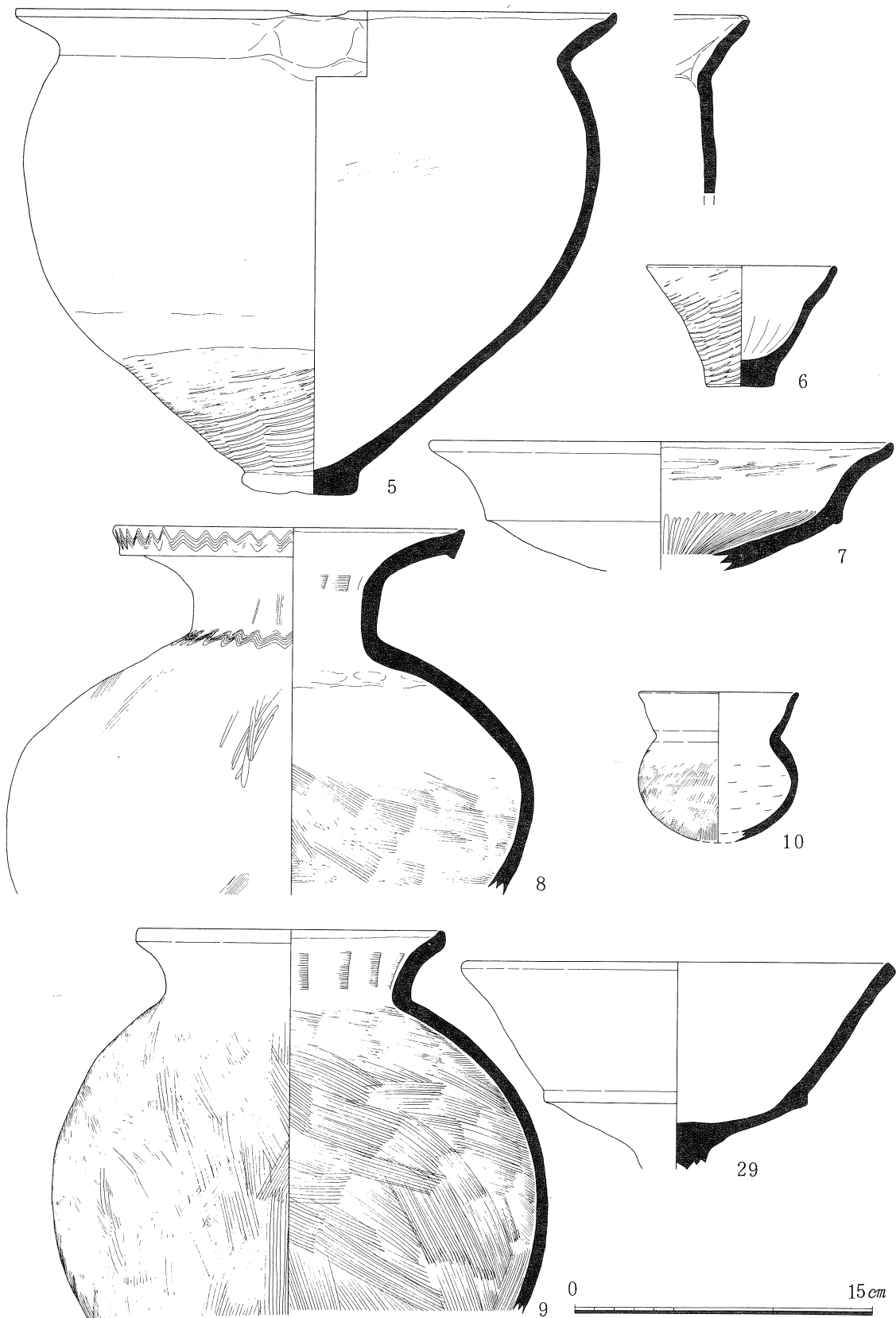


図25 大蔵司遺跡(2) Aトレンチ青灰色粘土層(8・9), Bトレンチ落ちこみ(5~7), 包含層(10・29)



深さ0.5cmのえぐりをいれている。太型蛤刃石斧を叩き石として転用したとかんがえられる。石材は閃緑岩である。

### 小 結

今回検出した掘立柱建物3棟は、出土遺物や柱列軸の方向から判断して、奈良時代に属すと考えられる。各掘立柱建物の柱列軸の方向には、N-8°~0°-Wと若干の差異が認められる。高槻市で

検出した掘立柱建物は、時代が降るにつれて軸方向が東に振ることがあきらかになっていることから、掘立柱建物2→掘立柱建物3→掘立柱建物1の順で建てたとみることができる。また、すべての掘立柱建物に柱根が遺存し、柱抜き取り痕が認められないことから、掘形内から出土した遺物は掘立柱建物の時期をある程度反映しているとみて大過ない。掘形内から出土した遺物は少ないが、掘立柱建物1では平城宮Ⅳ頃の土器が、掘立柱建物2からは平城宮Ⅰ頃の土器が出土している。

掘立柱建物の配置状況を見ると、それぞれの軸方向にずれがあるものの、柱筋を揃えようとする意図がうかがえる。すなわち、掘立柱建物1と掘立柱建物2の西側柱および掘立柱建物3の妻である。これらの掘立柱建物はL字形に配置された1グループとしてとらえることが可能であり、屋十倉という一般的な組合せから判断すれば、掘立柱建物3は倉庫であると考えられる。

調査区の周辺では、昭和53・62年に実施した調査で奈良時代の掘立柱建物を3棟検出している。その軸方向は、N-10°-W(2棟)、N-3°-E(1棟)を示し、今回検出した掘立柱建物群に近い値である。これらが同時に存在したならば、数単位の建物群を想定することができよう。今回検出した掘立柱建物群は、西側を意識した配置形態をとっている。また、東側では谷地形となり流路や水田跡を検出していることから、今回の調査では集落の東限をあきらかにしたといえる。(宮崎)

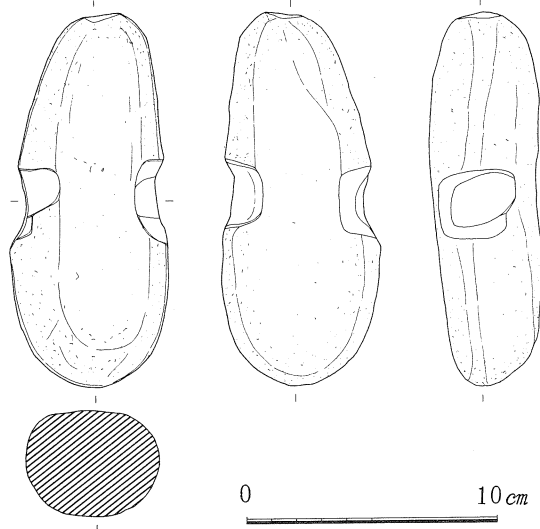


図26 大蔵司遺跡(2) Bトレンチ暗褐色礫土層(30)

## Ⅸ. 芥川遺跡

### 42. 芥川遺跡の調査

調査地は高槻市殿町92-1番地にあたり、小字名は殿ノ内と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅増築の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、工事に先立って発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南辺部に位置し、遺構の分布が希薄な地域とされているところである。調査は届出地の西側に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(0.45m)、耕土(0.2m)、暗灰色砂層〔整地層〕(0.2m)、黄灰色砂礫層〔地山〕となり、遺構はまっ

たく検出することができなかった。遺物は整地層中から土師器・瓦器片が少量出土したが、いずれも摩滅を受けており、遠くから運ばれてきたことが推測される。(大船)



図27 芥川遺跡の調査位置図

## Ⅹ. 高槻城跡

### 43. 高槻城跡の調査

調査地は高槻市城内町1105-7番地にあたり、小字名は三の丸と称する。現状は宅地である。近世高槻城の南大手門推定地の東側約60mに位置し、三の丸東廓の南側の外堀内と推定される地点である。このたび個人住宅建築工事を目的として土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は、届出地の北東部に1.5m×3.5mの調査区を設定し、人力で掘削して層序の把握と地下遺構の検出に努めた。基本層序は、盛土(1m)、旧耕土(0.1m)、暗青灰

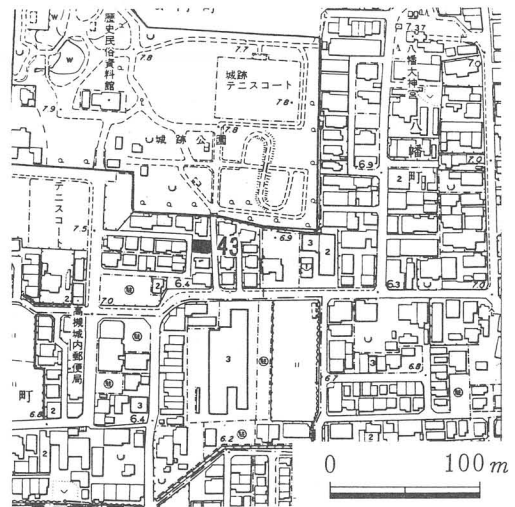


図28 高槻城跡の調査位置図

色粘土層(0.7m)〔客土〕、暗青灰色砂質粘土層(0.3m)、暗青灰色砂層(0.05m)、暗褐色粘質土層(0.5m)、青灰色粘土層〔地山〕となり、地山面は地表下約2.6mにあって標高約4mをはかる。客土は廃城以後の堀埋め立てと水田化に伴うもので、砂質粘土層以下が外堀の堆積土とかがえられる。

遺物としては瓦片、漆器片数点のほか、オオタニシ・カラスガイなどの貝類がみつめられた。漆器片は底径約4cmをはかる碗の底部で、両面に朱漆が塗られていた。遺存状態は悪く全体の形状、時期ともに明らかでない。出土層位はいずれも暗青灰色粘土層の下位及び暗青灰色砂層である。さらに下層の暗褐色粘質土層はほとんど夾雑物を含まず、遺物も出土しなかった。

こうした層序及び遺物出土状況などは、外堀のこれまでの調査例とほぼ一致しており、また地山面はほぼ平坦であったところから、本調査区は外堀の堀底に位置するものとかがえられ、斜面の立ち上がりはなお北側にあるとおもわれる。なお、当該地西側の旧南大手付近及び北側の旧三の丸付近の標高は約7.5～7.8mをはかり、検出した堀底の標高は約4mであって、絵図等からしられる一帯の堀の深さ2間とほぼ一致する。(鐘ヶ江)

## XI. 悉檀寺跡

### 44. 悉檀寺跡の調査(1)

高槻市成合北の町647-1番地、成合中の町649-1・2、651番地にあたり小字名は上ノ山、現状は水田である。このたび、整地工事をする目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査地は春日神社のすぐ南側で、成合中の町の集落北端にあたる。『三代実録』に記載されている悉檀寺はこの周辺に存在したものと推定されており、昨年度も当調査地のすぐ北側の整地工事に先立って発掘調査を実施している。この際は、明確な遺構は検出されなかったものの、整地層から緑釉陶器や須恵器、土師器、瓦器など古代から中世にいたる遺物が出土した。このため、今回の調査では寺域など悉檀寺に関する具体的資料が得られるのではと期待された。

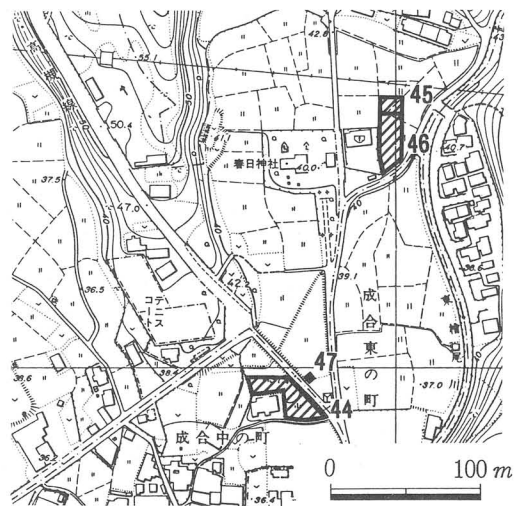


図29 悉檀寺跡の調査位置図

調査は届出地の南部に幅約3 m、長さ約6 mの調査区を設けて実施したが、当初遺物包含層はみられるものの遺構が確認できないため、地山面以下の掘削を行なったところ壁面に柱穴を確認した。このため、調査区を拡張しながら調査を続行した。

**遺構・遺物**(図版第32・33、図30)

調査区の層序は耕土(0.2 m)、床土(0.2 m)、暗褐色土(0.15~0.1 m)と堆積し地山は灰色砂礫である。遺構は直径0.3~0.5 mを測るほぼ円形の柱穴を30個余りと、一辺約3 mのほぼ方形の落込みを検出した。いずれも内部から土師器、瓦器の細片が出土するため、鎌倉時代以後の年代と推定されるが、柱穴の方向に統一性を見い出すことができず、建物としてまとめることはできなかった。

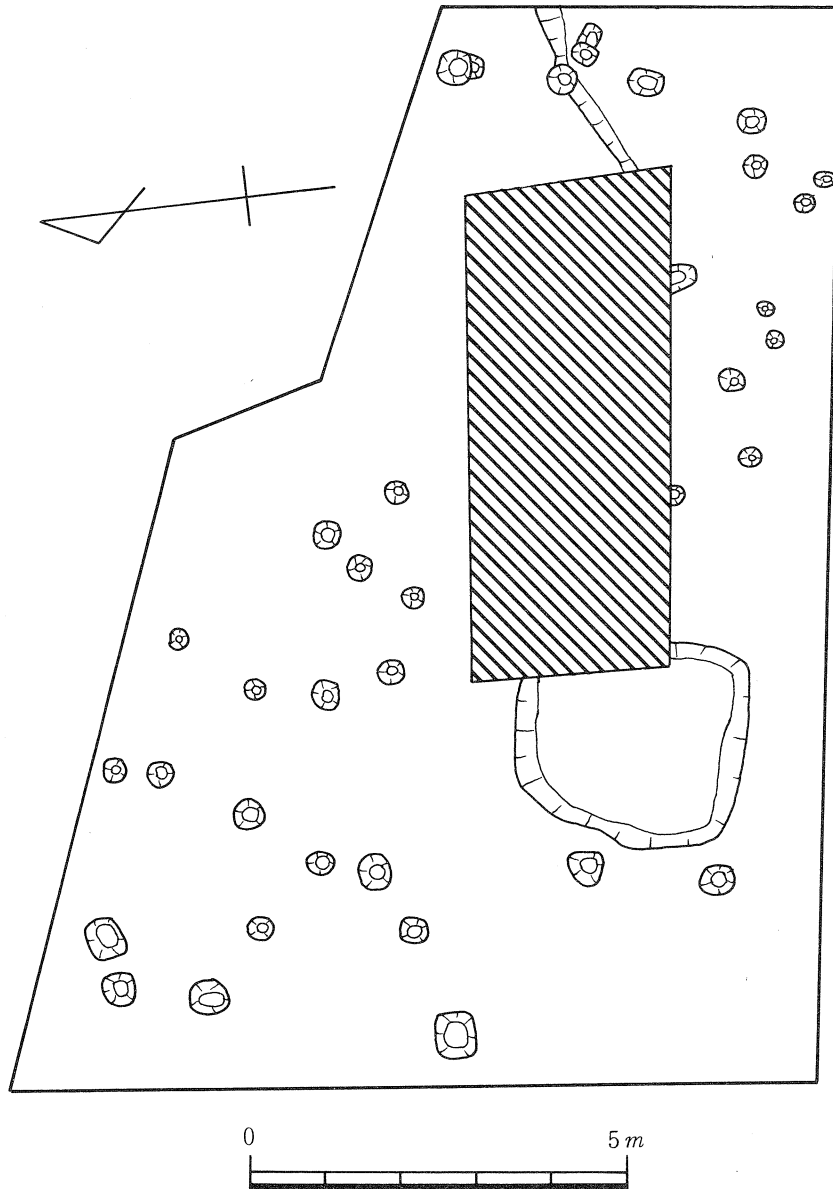


図30 悉壇寺跡(1)遺構平面図

調査区北部では遺物包含層である暗褐色土層がほとんど堆積していないため、届出地北端に小トレンチを設けたが遺構・遺物は確認できなかった。

遺物包含層からコンテナ1杯程度の遺物が出土した。瓦器碗(1~4)は内外面のヘラ磨きが省略されたものである。土釜は瓦質で脚付のもの(5~8)と脚の付かないもの(9・10)がある。土師器皿(11~13)は淡褐色で胎土が粗い。須恵器鉢(14~16)は口縁が肥厚する東播磨産である。須恵器甕のうち17・18は東播磨産とみられるが19・20は不明である。盤の口縁部破片(21)と盤の胴部破片(22)は土師質である。

これらは、いずれも13世紀後半から14世紀にかけての特徴をもつものであり、悉檀寺とは直接関係が無いものとみられる。後述のように、今年度の調査では悉檀寺跡の遺構がまったく確認されておらず、当調査区の状況からみると、むしろ現在の成合中の町の集落にかけて鎌倉時代以後の遺構が広がっていることが確認できた。(橋本)

#### 45. 悉檀寺跡の調査(2)

高槻市成合北の町604-1、605番地にあたり、小字名は宮脇、現状は水田である。春日神社の東側約30mにあたり、このたび整地工事を目的に土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ調査を実施した。

調査は届出地の中央部に幅3m、長さ11mのトレンチを設けて実施した。盛土(0.8m)、床土(0.2m)を除去するとトレンチ全体で灰褐色砂礫が確認され、遺構・遺物は検出されなかった。(橋本)

#### 46. 悉檀寺跡の調査(3)

高槻市成合北の町606番地にあたり、小字名は宮脇、現状は水田である。春日神社の北東約50mにあたり、このたび整地工事を目的に土木工事等に伴う発掘届が提出されたため文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ調査を実施した。

調査は届出地に幅3m、長さ7~10mのトレンチを2ヶ所設けて実施した。いずれも盛土(0.2m)、耕土(0.1~0.2m)、床土(0.1~0.2m)を除去すると灰褐色あるいは黄褐色の砂礫が堆積するのみで遺構・遺物は検出されなかった。(橋本)

#### 47. 悉檀寺跡の調査(4)

高槻市成合北の町646-1番地にあたり小字名は上ノ山、現状は宅地である。このたび、防火水槽設置の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査地は今年度の調査地(1)のすぐ北隣である、現存する用水池(一辺約4m)を利用して防火水槽が設置されるため、用水池の周囲に幅約2mのトレンチを2ヶ所設けて実施した。いずれも層序は盛土(0.8m)、耕土(0.3m)、床土(0.2m)、褐色土(0.2~0.4m)と堆積し地山は灰色砂礫である。調査区が狭小なため遺構・遺物は検出されなかったが、遺物包含層と

みられる褐色土が確認され、春日神社につづいているようである。(橋本)

## XII. 安満北遺跡

### 48. 安満北遺跡の調査

高槻市安満中の町488番地にあたり、小字名は井戸田と称する。現状は水田である。このたび宅地造成の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

届出地は安満北遺跡の南西部に位置し、すぐ北側の住宅地では弥生時代後期に属する遺物包含層が検出されている。このため調査は遺構・遺物の分布を把握したうえで進めることとし、届出地の四辺に沿って幅2mのトレンチを設定、表土は重機で排土し、以下は人力で掘削して精査した。その結果、調査地の大半は水田化の際に削平され、また明確な遺構は検出されなかったため、全面調査はおこなわなかった。

基本的層序は耕土(0.15m)、床土(0.1m)、灰褐色粘土層(0.1~0.2m)、暗灰色粘土層(0.2~0.3m)、黄灰色粘土層〔整地層〕(0.2~0.25m)、灰緑色砂礫層〔地山〕となる。砂礫層下は砂質粘土層と粘土層が互層に堆積している。地山面は北西から南東へと緩く傾斜しており、調査地の北西隅部では床土直下にあつて標高は約12.4m、南東隅部では約13.9mをはかる。

明確に遺構としてみとめられるものはなく、調査地南半部の地山が谷状を呈している部分で、遺物包含層を検出した。包含層は、西トレンチの南半部で厚さ約0.1m、南トレンチの中央部で厚さ約0.3mの暗褐色ないし暗灰色粘土層が地山面上にみとめられ、弥生時代中期~後期の土器片を少量検出した。いずれも風化が激しく、わずかに壺底部などから器形・時期が知られる程度であった。

包含層及び遺物の検出状況からして、これらは二次的に形成されたものとかんがえられ、したがって遺跡の本体は調査地のさらに北側に存在するものと判断される。(鐘ヶ江)

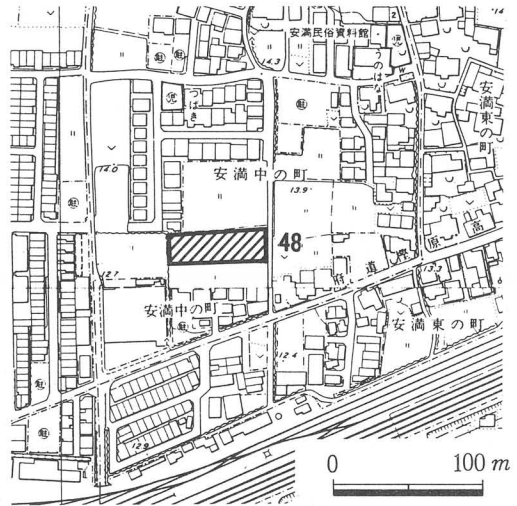


図31 安満北遺跡の調査位置図

## XIII. 安満遺跡

### 49. 安満遺跡の調査(1)

高槻市高垣町85-1番地他にあたり、小字名は目ヶ本、現状是水田である。この地域は安満遺跡でも東部地区にあたり、檜尾川が形成した氾濫原に相当する。これまでの調査において、弥生時代の方形周溝墓群や古墳時代の竪穴式住居跡などが検出されている。とくに、奈良時代以降の掘立柱建物群や井戸などは古代から中世にかけての集落変遷を考えるうえで重要な資料を提供している。

このたび、分譲住宅建設に先立ち土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に発掘調査を実施した。調査は届出地が道路を隔てていることや耕土置場の関係からA～D地区の4調査区に分けて順次実施した。

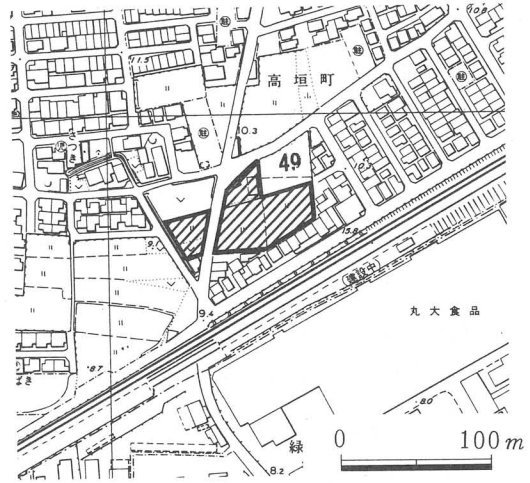


図32 安満遺跡の調査位置図(1)

#### 遺構(図版第34～38、61～66)

A～D区とも遺構は基本的に黄灰色砂質土上面で検出されたが、遺構検出面は東方へゆるやかに下降しており、A区北西部で標高約9.4m、B区東南部で標高約8.7mを測る。

A区の層序は耕土(0.2m)、灰褐色土(0.1～0.2m)と堆積し、すぐに遺構検出面となる。調査区の中央からやや西よりに南北方向の攪乱(旧水路か)があり、この攪乱から西側では数個の柱穴が検出されただけである。ところが、攪乱から東側では直径0.1～0.5mの柱穴が約360個検出された。柱穴内から出土した土器から11～14世紀の時期幅が考えられるが、あまりにも密集しているため、建物としてまとめることができなかった。

B区北半部の層序は耕土(0.2m)を除去すると遺構検出面まで約0.5mは褐色砂礫が厚く堆積し、檜尾川のたび重なる氾濫が想像される。南半部では耕土(0.2m)、灰色土(0.2m)、褐色土(0.3m)、暗褐色土(0.2m)、黄灰色砂質土〔地山〕の層序であるが、暗褐色土上面からも若干の柱穴が検出された。

C・D区の層序関係はB区南半部とほぼ同様であり、遺構検出面は平坦で、標高約9mを測る。B～D区でも多数の柱穴が検出され、B区で2棟、C区で3棟の建物が確認できた。また、井戸15基、溝、土壙墓なども検出された。時期はやはり11～14世紀までの幅があるが、B区は主に11世紀代、C区は11～14世紀、D区は13～14世紀が主である。以下、遺構ごとの概要を記す。

#### 掘立柱建物

建物1はB区の中央部に位置する。桁行3間(柱間1.6m)、梁間2間(柱間1.4m)の総柱建

物である。方向はN-24°-Eを測る。

建物2は建物1のすぐ南に位置し、N-17°-Eを測る。桁行3間(柱間2m)、梁間2間(柱間1.4m)でやはり総柱建物である。西北の隅柱のみやや外側にズレている。建物1・2の柱穴はいずれも直径0.3~0.5mの円形で、柱穴内から黒色土器B類椀、初期の瓦器椀、土師器皿の破片が出土しているため11世紀代に属するものとみられる。また、両者はほぼ同一方向であり、規模もほぼ等しく、前後関係は把握できないが、建替えによるものとみられる。

建物3・4・5はC区中央を中心に検出された。いずれも一辺0.5m程度の方形の柱穴で、方向もN-12°-Eに揃っている。このため、建物3を主屋とし、建物4・5は副屋の関係にあるものとみられる。建物3は桁行4間(柱間2.4m)、梁間2間(柱間2.4m)で、北側中央部の柱が無く、この部分が入口と想定される。南側には1.9mの廂が付く。建物4は桁行2間(柱間2.4m)・梁間1間(柱間2.4m)、建物5は桁行2間(柱間2.3m)・梁間1間(柱間2.2m)である。いずれも柱穴から13~14世紀の土師器皿、瓦質羽釜などの破片が出土しているため14世紀代の時期が考えられる。

土壌(図版第38c・66)

不定型の土壌がいくつも検出されたが、ここでは検出状況から墓とみられるものを中心に報告する。

土壌1はA区北部で検出された。長さ1.5m、幅1.3m、深さ0.2mを測るほぼ長方形で、上面にこぶし大の石がほぼ全面に敷かれていた。内部から11世紀代の瓦器椀、土師器皿の破片が若干出土している。

土壌2は建物1のすぐ東側で検出された小判形のもので、長さ2.8m、幅1.6m、深さ0.3mを測る。内部には青灰色粘土が堆積しており、黒色土器B類椀や土師器皿の破片が若干出土した。墓としては規模は大きく、建物1に伴う施設であろうか。

土壌3はB区南よりで検出され、長さ1.6m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。不整形であるが、内部からほぼ完形の黒色土器B類椀3点、土師器皿3点、土師器羽釜の破片が出土した。

土壌4はB区中央のやや西よりで検出され、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.1mを測る。内部から11世紀代の瓦器椀1点、土師器皿6点がほぼ完形で出土した。

この他にB区南東部で不定型土壌がいくつも重なって検出されたが、出土遺物も少なく、重複関係も明瞭でない。

井戸(図版第36~38b、62~65)

井戸は15基が検出された。形態から三つに大別される。①は底部に水溜の曲物を置き、上部を井戸側で囲ったものである。曲物・井戸側の抜き取られたものが多いが、掘形の形状から推定することが可能である。時期は11~12世紀代に属する物が多い。②は曲物を何段か積み重ねたもので、時期は13~14世紀に属する。③は不定型土壌の片すみに曲物を据えたもので、井戸の関連施設とが合体したものとみられる。

井戸1は①で、直径1.4m、深さ1.3mを測る円形で、井戸側等は抜き取られていた。黒色土器B類椀・瓦器椀の破片が出土した。



井戸2も㉔で、直径1.1m、深さ1.5mを測る円形で、底部がやや狭くなっている。井戸側等は抜き取られていた。11世紀代の瓦器椀・白磁皿が出土している。

井戸3は㉔に属し、井戸側は抜き取られていたが、底部に直径0.43m、高さ0.1mの曲物が据えられていた。掘形上端で直径1.6~1.7m、深さ1mを測る円形で、底部もほぼ円形を呈し、直径0.95mを測る。11世紀代の瓦器椀破片が若干出土している。

井戸4は㉔に属すが掘形上端で直径3.3mを測る。大形の円形井戸で、深さ1.2m、底部径1.4mを測る。井戸側等は抜き取られていた。埋土の下層から11世紀代の瓦器椀・土師器皿等が出土している。

井戸5はB調査区南壁ぎわで検出され、㉔である。長径約3m、深さ約0.6mの不定形土壌の東側壁面に沿って直径0.4m、深さ0.3mの曲物を据えるために壁面に掘形を設けており、不定形土壌と曲物が一体のものである。土壌の埋土から11世紀代の瓦器椀、白磁碗の破片が出土している。

井戸6は長さ3m、幅2.4m、深さ0.35mの不定形土壌で、井戸7と類似するため井戸と報告するが、曲物は検出されなかった。

井戸7は㉔に属し、長さ3m、幅2.6m、深さ0.6mの土壌の東側の壁面に沿って直径0.6m、高さ0.3mの曲物1段が据えられていた。曲物を固定するように周囲に数個の小石がおかれていた。11~12世紀の瓦器椀・土師器皿が出土している。

井戸8は㉔に属し、直径約0.6m、深さ0.65mの円形掘形が検出されただけである。瓦質羽釜の破片が出土しており13~14世紀とみられる。

井戸9は㉔とみられる円形井戸で、直径1.4m、深さ0.85mの掘形が検出されただけである。瓦質羽釜破片、土師器皿が出土しており14世紀代とみられる。

井戸10は掘形上端で長径1.4m、短径1.2m、深さ1.9mを測る円形で、曲物は抜き取られていたが、掘形中位の内径で直径約0.6mを測るところから、直径0.5m程度の曲物を数段積み重ねたものであろう。内部から奈良時代の須恵器杯、黒色土器B類椀、瓦器椀などの破片が出土している。㉔に属す。

井戸11は曲物は抜き取られているが㉔に属すものとみられる。掘形上端で長径1.5m、短径1.3m、深さ0.95mを測る。底部は長径0.8m、短径0.7mで、瓦器椀、土師器皿、瓦質羽釜、常滑焼破片が出土しており13世紀代とみられる。

井戸12は㉔に属し、曲物上端の周囲が長径1.35m、短径1.2mの広さに0.1~0.15m程掘り下げられている。このため、曲物上部に井桁が据えられていたものとも考えられる。曲物は直径0.4m、高さ0.15mのものと直径0.4m、高さ0.23mのもの二段が重ねられていた。13世紀の瓦器椀が出土している。

井戸13は長径3m、短径2.4mの不定形の掘形で、底部は長径1.4m、短径1.2m、深さは約1mを測る。井戸側、曲物は検出されず、埋土内に少量の塊石が混じっていたため石積であった可能性もある。埋土の上部から信楽焼破片が、下部からは土師器皿の小破片が出土している。14世紀以降のものともみられる。

井戸14は㉔に属すものとみられる円形井戸で、直径1.2m、深さ0.75mを測るが、曲物は抜き取られていた。

井戸15も㉔に属し、長辺1m、短辺0.8m、深さ0.2mの長方形掘形の片側に直径約0.4m、高さ0.1mの曲物1段が検出された。

以上、概要を記して来た建物・土壌・井戸以外にB区には幅0.3～0.5m程度の小溝が何本か検出されており、建物と何らかの関連があるものかともみられるが詳細は不明である。

#### 遺物(図版第39～45、図33～35)

平安時代以降を中心にコンテナ数十箱の遺物が出土している。多方面にわたるため、遺構と関連あるものを中心に概要を記していく。

建物1の柱穴からは土師器皿(1)、瓦器皿(2)が出土している。土師器皿は厚手の「て」字状口縁で、瓦器皿は内外面をていねいにへら磨きするものでいずれも11世紀後半代であろう。この他、建物の柱穴やまとめられなかった柱穴から多数の土器類が出土しているが、29・30のように復元できるものは少ない。29の瓦器皿は底部外面に成形時の粘土結合痕が認められる。

井戸2からは内面にへら描きの花文がある白磁皿(79)が出土している。井戸4からは土師器皿(3)、瓦器碗(4)をはじめ、篠窯とみられる玉縁状の須恵器鉢口縁部(66)、輪花の白磁皿(67)、白磁碗(68)、山茶碗(69)が出土している。篠窯の鉢は古い時期であるが他は11世紀後半代に収まるものである。

井戸5から11世紀後半の瓦器碗(5)と白磁碗(102)が出土している。白磁碗は白色の精良な胎土に青白色の釉が施され、口縁は薄い玉縁状である。同じ色調を呈す底部破片(103)が包含層から出土しているが、こちらは高台部成形に際し底部中央を浅く削りこんでいる。

井戸7からは土師器皿(6)、円盤高台の軟質緑釉陶器(71)が出土している。

井戸11からは13世紀代の瓦器碗(7・8)と滑石製石鍋破片(72)が出土している。

井戸12からはやはり13世紀代の瓦器碗(9・10)が出土している。

土壌2からは土師器杯(11)、皿(12)が出土している。

土壌3からは「て」字状口縁の土師器皿(16・17)、黒色土器B類碗(18～20)、土師質羽釜(21)が出土している。土師器皿はやや厚目となっているが、このタイプの古い様相を残している。黒色土器B類碗は内外面をていねいにへら磨きし、18・19は底部外面も磨いている。羽釜は口縁下に鏝の付くもので、体部外面を縦方向の刷毛目で仕上げている。11世紀前半の良好な資料と捉えられる。

土壌4からは厚手の「て」字状口縁の土師器皿(22～27)と11世紀代の瓦器碗(28)が出土している。

A地区東北隅で地山が落込み状になる部分から13世紀末～14世紀初めの瓦器碗(13・14)と脚付の瓦質羽釜(15)が出土している。

包含層出土のものも特徴的なものを記していくと、まず底部に糸切り痕のある土師器杯(48・49)・皿(50)がある。胎土は比較的精良であり当地域の土師器皿・杯との差異は顕著な

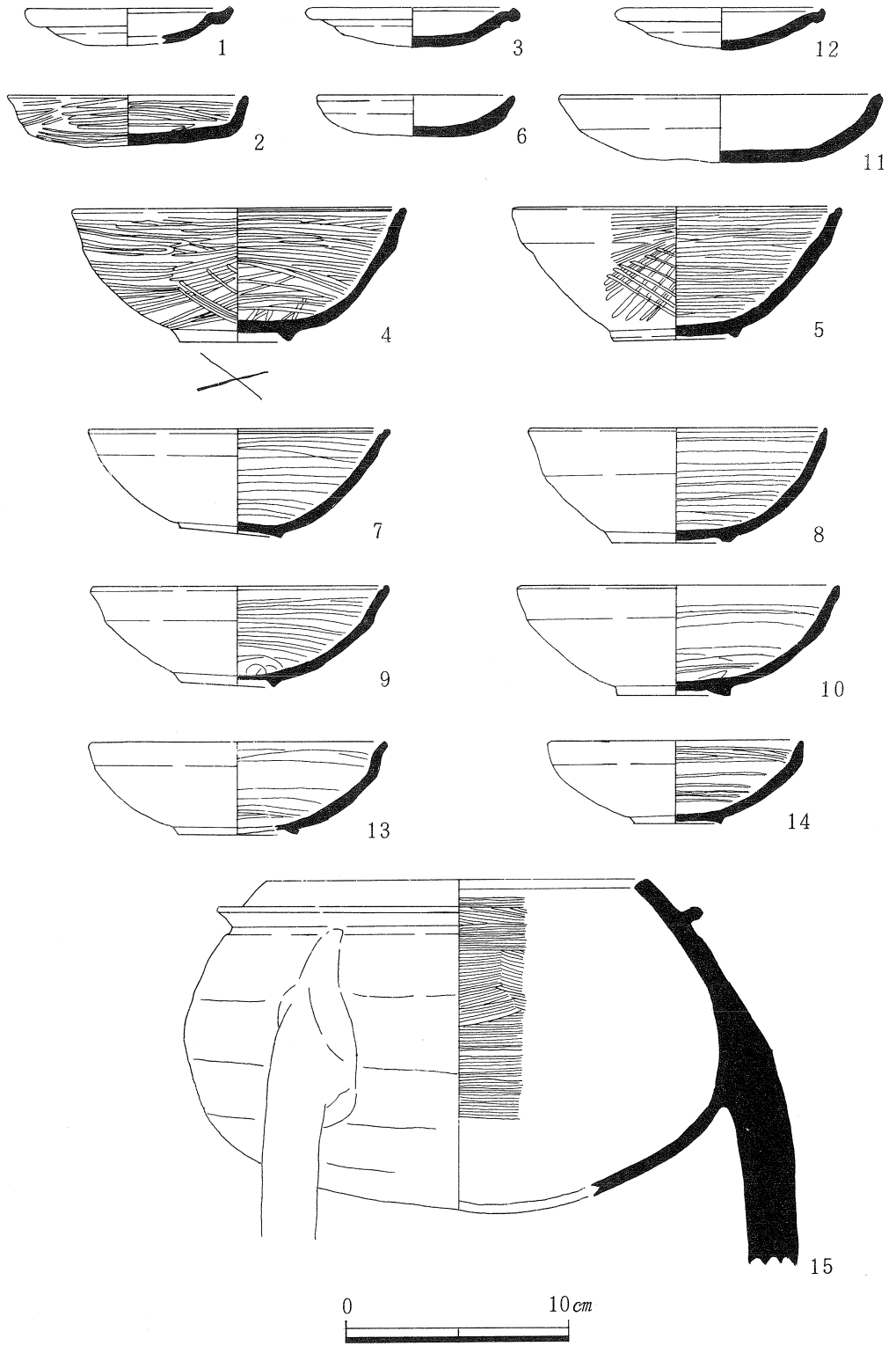


图33 安満遺跡 (1) 建物1 (1・2), 井戸4 (3・4), 井戸5 (5), 井戸7 (6), 井戸11 (7・8)  
井戸12 (9・10), 土壇2 (11・12), A区落込み (13~15)

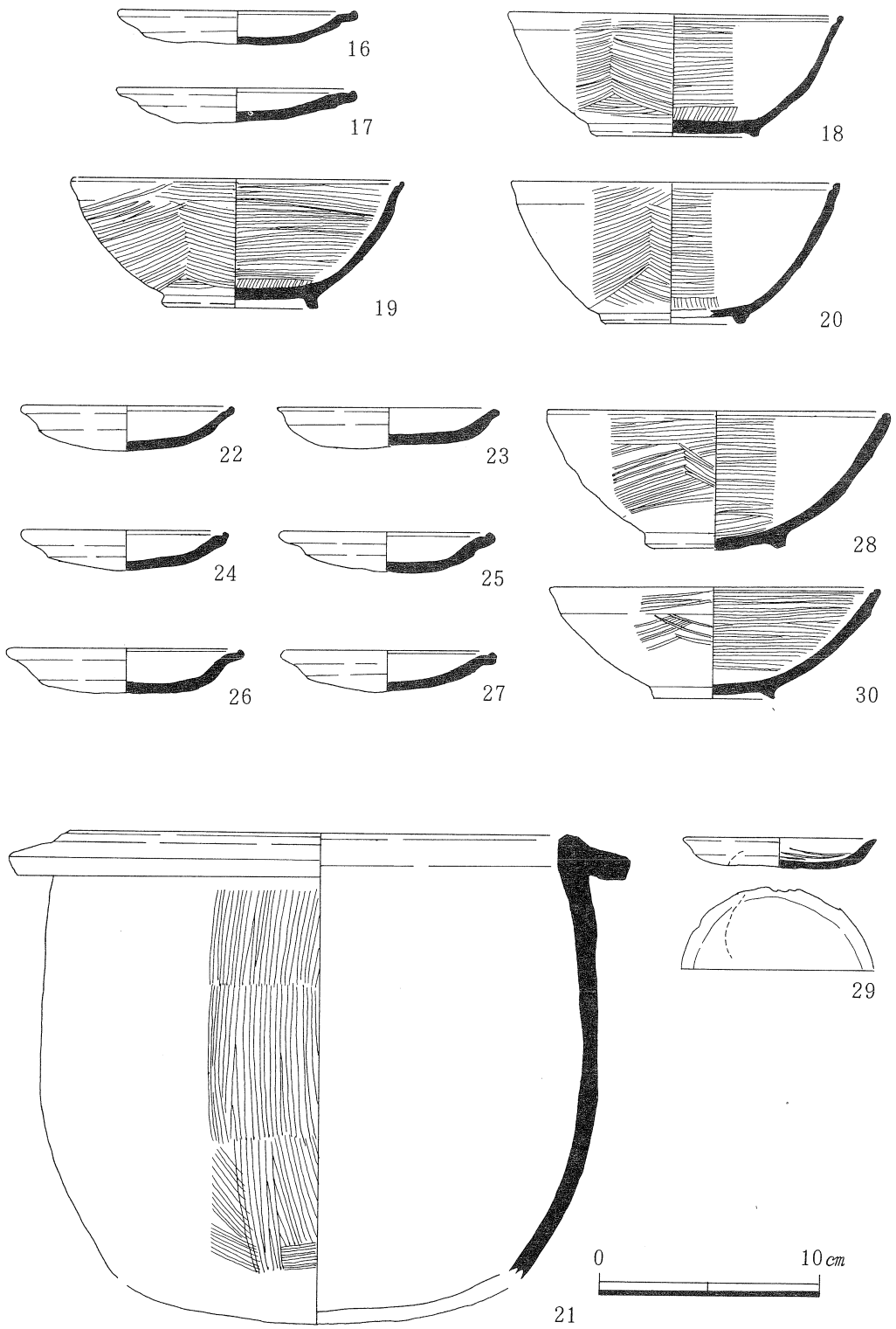


图34 安满遗迹(1) 土坑3(16~21),土坑4(22~28),柱穴(29·30)

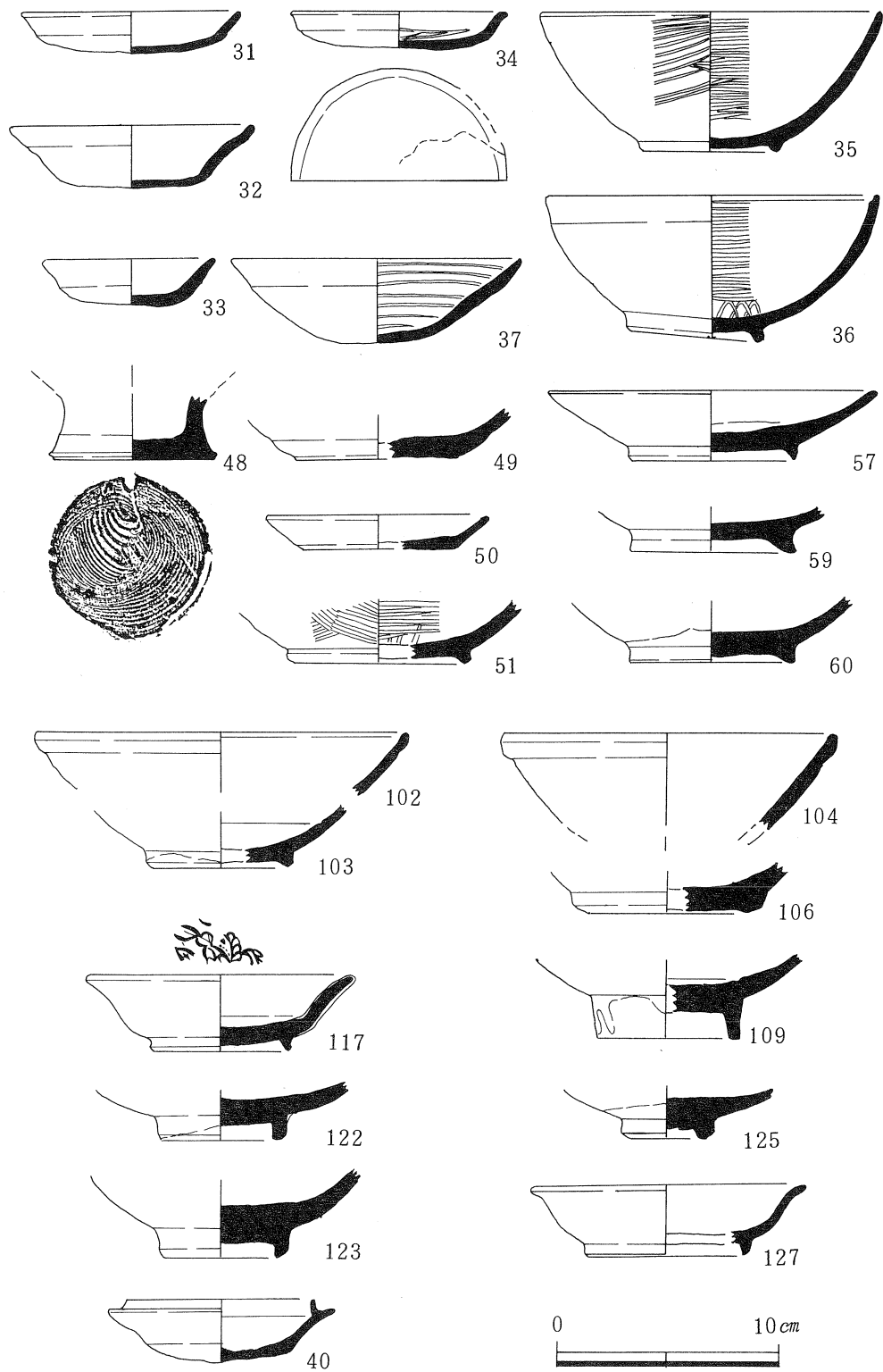


图35 安満遺跡(1) 井戸5(102) 包含層(31~37・40・48~51・57~60・102~106・109・117・123~125・127)

ものではない。47は井戸11から出土したもので51・52とともに内外面をヘラ磨きしたもので、器形は黒色土器B類碗あるいは初現期の瓦器碗と同一である。しかし、炭素が吸着せず酸化焙焼成のままである。53はヘラ磨きが認められないが類似したものである。

57～65は東海地方産の灰釉陶器である。57・58は内面のみ薄い釉が刷毛塗で施され、重ね焼痕が認められ、黒笹90号窯式に相当する。いずれも三日月高台で57は皿、58は碗である。59～65は美濃の丸石2号窯式とみられ体部外面のヘラ削りは省略され厚目である。底部外面に糸切り痕をのこしている。60の高台がやや退化しており丸石2号窯式でも時期が降るものとみられる。

緑釉陶器は軟質で円盤高台、黄緑色の薄い釉が施される京都洛北窯系のもの(54・55・129)と硬質で高台を削り出す京都洛西窯系(48・56)がある。

須恵器には口縁が玉縁状を呈する篠窯の鉢(79～81)と口縁が肥厚する東播系の鉢(82～85)が目立つ。前者は10世紀代、後者は13世紀～14世紀とみられる。86は口縁に重ね焼痕のある碗で、東播地方産とみられる。38は壺の底部である。外面に格子状の叩き痕があり、内面は粗いなどで仕上げである。灰白色の色調で軟質に焼かれたもので、器形的には香川県十瓶山窯の製品に似ている。

土師器皿には13世紀後半～14世紀のもの(31)や15世紀代とみられるもの(32・33)も含まれ、後者は淡褐色で胎土が粗い。瓦器碗(35～37)・皿(34)も出土しているが、37は厚手で口縁部が外反しておりこれまで類例の無いものである。

87～92は瀬戸窯の製品である。87は瘤状の脚が付く鉢、88は天目茶碗で黒褐色の厚い鉄釉がかかる。90・91は黄緑の灰釉がかかる平碗・香炉、92はおろし皿である。94は菊花のスタンプを押した瓦質の火鉢である。口縁に縦ヘラを押し輪花状にしている。これらは15～16世紀の時期が考えられる。

備前焼の鉢(92・96)、壺(97・98)もある。鉢は間壁編年のIV B期に相当する。98は口縁部に櫛描で直線文・波状文を施すものである。信楽焼は甕の口縁(99)と底部の破片(39・100)が出土している。口縁部はN字状を呈し14世紀代まで遡る可能性がある。常滑焼の甕(101)、唐津焼の碗(93)も若干出土している。

中国製陶磁器は、玉縁状口縁の白磁碗(104～107・110)と端反りあるいは直口の白磁碗(108、109、114)、白磁皿(111～113・115)、口禿げ白磁皿(116)が出土している。125・126は粗い削り出し高台の付く皿で厚い白釉が施されている。

青磁には内底面に花文をスタンプした皿(117)や端反りで厚い底部の碗(119～124)がある。これらはすべて高台内は露胎である。118・127は端反りの白磁皿で全面施釉の後、高台の接地部を露胎としている。128は染付の碗とみられる。以上、中国製陶磁器には11世紀から16世紀までの資料が出土している。

中国製の銅銭が6枚出土している。このうち4点がA区(44の1点は柱穴)でB・C区からは1点ずつである。41はA区出土の元豊通宝(初鑄1078年)、42はB区出土の紹聖元宝(初鑄1094年)、43・44はA区出土の元祐通宝(初鑄1085年)、45はA区出土の聖宗元宝(初鑄1101

年)、46はC区出土の洪武通宝(初鑄1368年)である。

この他に土錘(76~78)も若干出土しており、檜尾川あるいは付近の低地で漁をしたものとみられる。

### 小 結

今回の発掘調査では11世紀から14世紀にかけて遺構が検出されたが、これらは安満遺跡の東部地域でどのような位置を占めるのであろうか。図36は主要な調査区を昭和30年代の地図にはめたものである(番号は任意に、建物・井戸の方向・縮尺は正確さを欠く。また、奈良時代以前は省略した)。

今回の調査で確認できたことに、建物や柱穴が9区の東側ではほとんど存在せず、8区では耕土・床土を除去するとすぐに遺構面となることである。5~7区と東側の11・13~15・18区の北部も同様で、檜尾川氾濫原の微高地を選んで集落を形成していたことが指摘できる。5~8区では奈良時代の遺構・遺物は検出されていないが、11・14・16~18区の主要な建物は奈良時代に属し、2・3区にも若干の遺構が検出されている。このため、現在のJR京都線と市道が交差する付近から18区まで東西約200mの範囲に奈良時代の集落がまず形成された。このなかには、18区西部のようにL字状に建物を配し規模の大きなものも認められ、当地域が大規模に開発されたことが想像される。

ところが、これまでの調査では平安時代前・中期(9・10世紀)の遺構がまったく確認されていない。5・8・9区から灰釉陶器や緑釉陶器が出土しているため、この付近に集落が移動したとも考えられるが、奈良時代から次に集落が姿を現わす平安時代後期(11世紀)まで遺構的に断絶が認められる。記録では、天長9年(832)、嶋上郡の荒野・野地222町が安満の勅旨田として寄せられたとあり、口分田の荒廃現象が当地域においても深刻であったらしい。また、16~18区の調査では奈良時代遺構面の上部には砂礫が厚く堆積しており、檜尾川の氾濫という自然現象も加わり奈良時代に形成された集落が崩壊していったものとみられる。

平安時代後期(11世紀)に再び形成される集落は、9区の東部や14区西部・17区で平安時代以降の遺構・遺物が検出されないところから5~9区と11~18区の2つに大別できる。ひとつの調査区では不明明であったが9区から8区の東側にかけて遺構が集中し、7区では東部の小溝より西側に遺構の集中していることが認識できる。また、5区南東部でも建物・井戸が検出されているが、これらはいずれも11世紀中頃から後半に収まるものであり、11世紀代には西側の単位のなかで最低3つの屋敷地のあったことが想像できる。このなかでも本年度調査の8・9区に遺構が密集しており、14世紀代まで継続しているが、8・9区の東西約70mの範囲内を時期によって建物が移動したものであろう。そして、建物1・2が11世紀代の主屋的なものであり、建物3が13世紀~14世紀の主屋であったと考えられる。

建物3は面積46.08㎡・約14坪である。11世紀代の建物1が13.44㎡・約4坪、建物2が16.8㎡・約5坪であり、かなり大規模となっている。このような建物で構成されるものを有力農民の屋敷地と捉えておく。

このように、有力農民を中心とした荒地の再開発によって安満遺跡をはじめ宮田・上牧・

津之江南に集落が再出現あるいは新たに出現する。安満遺跡周辺は12世紀以降は多くの領主に分割支配されたが、15世紀初めには一部が春日社領として領有されている。このため、基本的には摂関家領に包括されていたものと思われる。ところが、応永末頃(15世紀初め)には春日社の支配が衰え、細川氏の支配が浸透するらしい(『高槻市史』第1巻による)。このような社会情勢を反映するように宮田・上牧遺跡は姿を消してしまう。安満遺跡においては1区で15世紀代の備前焼の出土する井戸が検出されているため、新たな社会情勢に対応するためにより北方の地域へ集落が移動したものとみられる。

出土した遺物のうち、土師器皿・瓦器碗の多くは11～14世紀代のものである。前者は「て」字状口縁の模倣など京都系であるが、胎土・色調からみて在地産である。後者はすべて楠葉型である。

土壇3から出土した黒色土器B類碗・土師器皿・土師質羽釜は11世紀前半の良好な一括資料であり、古代末の土器編年上有意義である。

包含層から出土した土師器には底部に回転糸切り痕を残すものがある。このような資料は大阪北部ではほとんど知られていない。48の杯と類似するものは龍野市小犬丸・同宝林寺北遺跡、神戸市神出窯、明石市魚住窯で出土しており、12～13世紀代とみられる。48の胎土・色調は判出の資料と大差が無いため在地製品なのか搬入品なのか検討を要する。

灰釉・緑釉陶器も少量であるが出土し、有力農民に使用されたのであろう。また、102・103の中国製白磁碗は調査が進行中の福岡市鴻臚館で出土しているもので、11世紀中葉以降大量に輸入される白磁碗に先行するものとみられる。中国陶磁には、15～16世紀の資料が若干出土している。この時期の資料の多くが城館跡に限られているが、農村にどの程度普及していたのかを知ることも重要であろう。

備前・信楽焼も少量出土しているが、信楽焼には14世紀代とみられる甕がある。この時期の信楽焼は生産地以外ではあまり出土例の無いものであり、当地域が交通の要衝であったという性格も多分に影響しているものと考えられる。(橋本)

## 50. 安満遺跡の調査(2)

高槻市高垣町229番地他3筆にあたり、小字名は弓ヶ池、現状は水田である。届出地は安満遺跡の東北隅でJR京都線に接している。周辺部では奈良～鎌倉時代の遺構・遺物が数多く検出されているため関連する遺構の存在が予想されていた。

このたび、共同住宅・駐車場建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ事前に調査を実施したものである。なお、

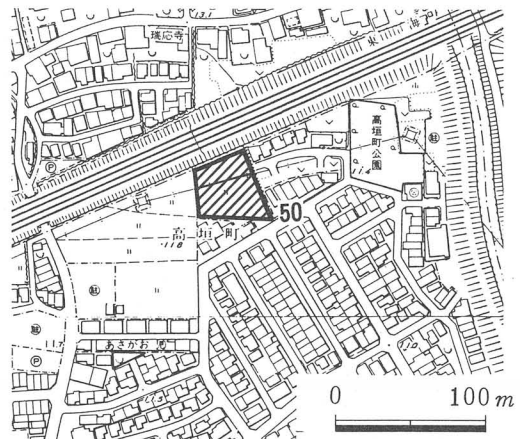


図37 安満遺跡の調査位置図(2)



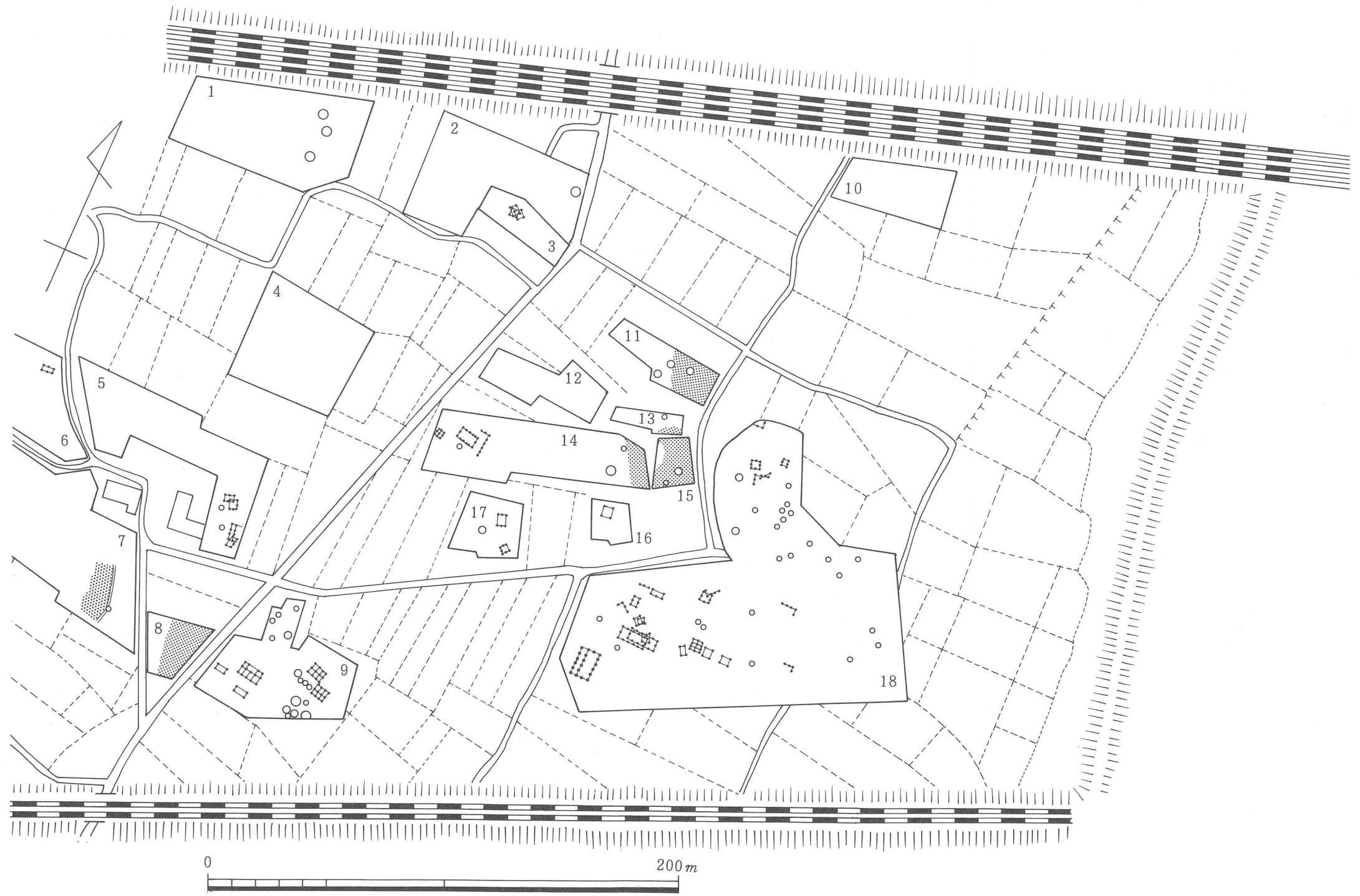


図36 安満遺跡東部地域の遺構略図

調査は共同住宅部分(南側)と駐車場部分(北側)に分けて実施した。

#### 遺 構(図版第46・47・67)

基本的な層序は耕土(0.1~0.2m)、灰色砂(0.05~0.1m)、灰色粘土(0.1m)、青灰色土(0.6m)、礫まじりの青緑色土(0.2m)、青灰色砂礫(0.1m)で地山は青緑色粘土である。遺構上面に堆積した青灰色砂礫や耕土下の灰色砂など、しばしば檜尾川が氾濫したことを示している。遺構は掘立柱建物2棟と10本余りの素掘り溝や落込みが検出された。

掘立柱建物の柱穴はいずれも不定形で規模も不揃いである。柱穴内から土師器・須恵器の細片が出土しており、おおむね7世紀頃の時期が想定できる。建物1は梁間2間(柱間1.8m)、桁行3間(6.4m)であるが中央の柱間が2.8m、両脇の柱間が1.8mを測り、中央に入口が設けられていたものとみられる。方向はN-41°-Wである。建物2は梁間2間(柱間2m)、桁行3間(柱間1.6m)以上で、方向はN-25°-Wである。

建物1の南側で棟の方向とほぼ同一方向に掘削された幅0.8m、深さ0.1m、長さ約5mの落込み1が検出された。建物1の雨落ち溝的なものとみられる。また、調査区南東部では広い範囲にわたって0.1m程の深さで落込み2が検出されたが性格は不明である。調査区南壁ぎわでは直径約1.8m、深さ0.6mの落込み3が検出された。井戸の可能性もあるが井戸枠などは検出されなかった。

南側調査区の北部から北側調査区にかけて素掘りの小溝が数多く検出された。幅0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mを測る。南側調査区の中ほどにこれらの小溝の南端を区切るように東西方向の小溝がある。小溝と小溝の間隔は南部で約1m、北部で約3mを測り規則的に掘削されていたらしい。時期は切り合い関係から掘立柱建物2や他の溝より新しく中世に降るものとみられるが詳しくは不明である。

素掘りの小溝と交差するように東西方向の溝が2本検出されているが、やはり時期は不明である。

#### 遺 物(図版第48・49、図38)

南側調査地区の遺物は、包含層及び各遺構から出土した弥生土器・石器・土師器・須恵器・瓦器・瓦片がコンテナに約10箱程ある。いずれも破片の状態出土したものばかりで、完形品に復元できたものは少ない。弥生土器は中期から後期末までの各種の器形が認められるが、小破片ばかりで全形がわかるものは井戸1から出土した小形の鉢(1)のみである。底部は安定しない小さな平底を呈し、体部は外面を斜め刷毛調整によって仕上げている。11は甕の底部で(12・13)は鉢の底部である。出土した弥生式土器の大部分は後期に属するが、形態や調整などの特徴によって後期でも末頃のものを中心を占めていることがわかる。9は先端を欠失した有茎の磨製石鎌である。扁平な体部から緩い角度で両面から研ぎ出し鋭利な刃部に仕上げられており、茎部は荒い砥石で垂直に削り取っている。石材は石包丁と同じ淡灰色の粘板岩で、一般には高島石と呼ばれているものである。

古墳時代の土器は、井戸1から出土した布留式を中心とした土師器と包含層から出土した須恵器が少量あるが、いずれも破碎したものばかりで、二重口縁の壺(2)と直口壺(3)以外

に須恵器の蓋杯を数点復元しえたのみである。2は肩の張った球形を呈し、少し外反する口頸部から水平に伸びてさらに外反する口縁部がつく。体部外面はハケ調整後、全体をナデ調整によって仕上げている。また口縁部および内面も丁寧なナデ調整によって仕上げられている。3は体部が胴の張った球形を呈し、斜め上方にたちあがる口頸部がつく。外面および口頸部の内面はナデ調整によって丁寧に仕上げられており、体部内面は全体にヘラ削り調整が施されている。16は山陰の影響を受けた複合口縁の甕で、体部内面は他の時期のものと同じようにヘラ削りがおこなわれている。14・17・18は口縁の内面を肥厚した典型的な布留式の甕で、体部内面はヘラ削りが頸部近くまでおこなわれており、胎土は他の時期の物と比べると非常に精良で、小礫などを殆ど含んでいない。須恵器は蓋杯・壺・甕片など6世紀後半か

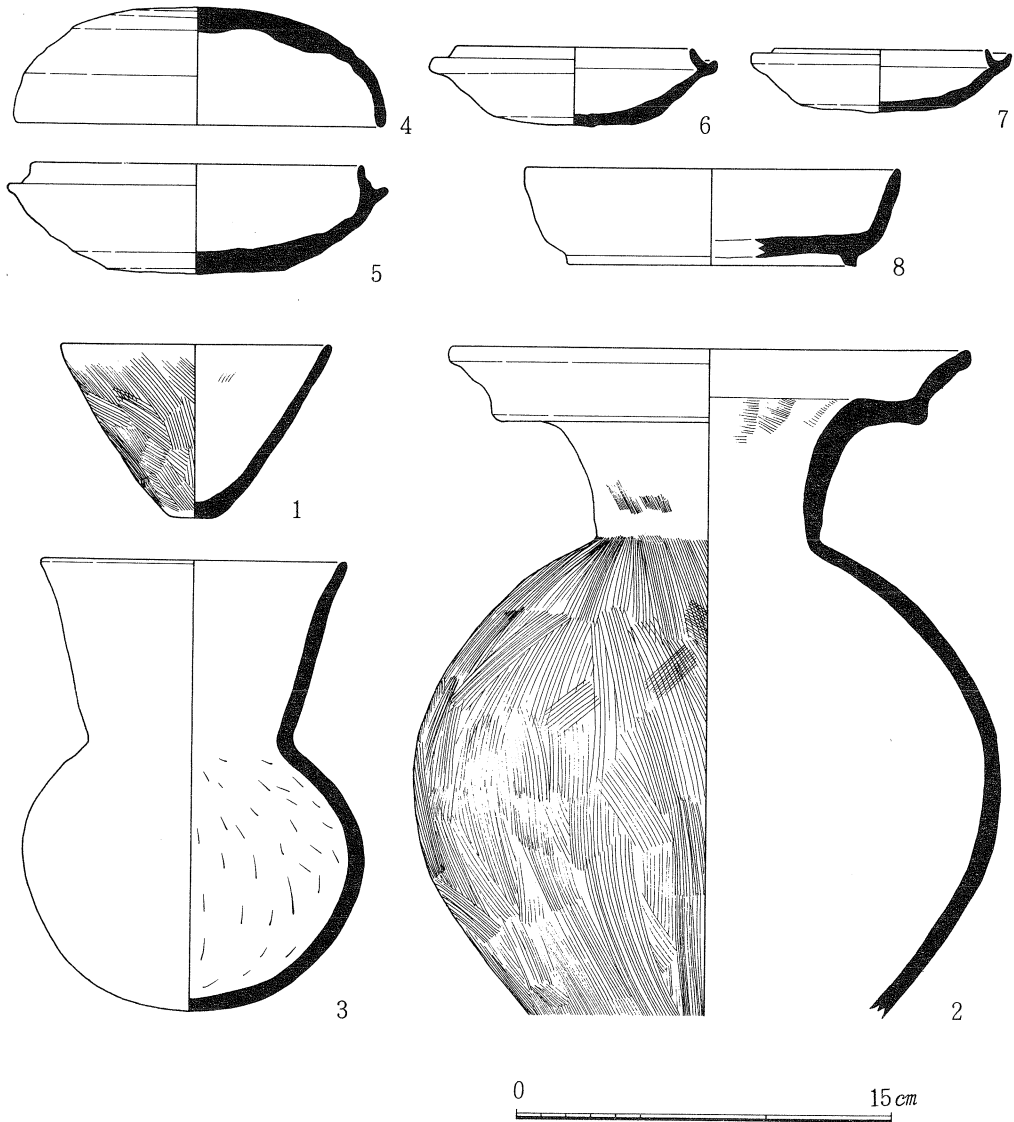


図38 安満遺跡(2)出土遺物 井戸1(1~3), 包含層(4~8)

ら7世紀前半にかけてのものが包含層から少量出土した。杯蓋(4)は天井部からなだらかに口縁部まで移行するもので、天井部の約2分の1は回転ヘラ削りによる調整がおこなわれている。杯身(5)は、受部の立ち上がりが高くないもののしっかりしており、底部の回転ヘラ削りによる調整も約2分の1近くまでおこなわれている。焼成いずれも良好で、堅く焼きしめられている。杯身(6・7)は完形で出土したもので口径8.2~9.2cm、器高3~4cmを測り、ヘラ切りの後未調整のまま、口縁部のたちあがりは(5)と比較すると非常に退化し小形化している。包含層から出土する須恵器の多くは7世紀前半を中心としているが、6世紀前半の時期まで上がる杯身片(20)や奈良時代まで下がる高台の付いた杯身(8・26)も僅かに含まれている。その他、白磁碗(28・29)、瓦器碗(30)、土師器蓋(31)など中世に属するものも僅かであるが出土している。(大船)

## ま と め

今年度は嶋上郡衙跡で20件、その周辺地域で30件余りの発掘調査を実施した。

嶋上郡衙跡は、ここ数年の傾向であるが、水路・農道の整備や個人住宅改築などをはじめとする小規模な発掘調査が多くを占めるようになってきていた。そのために調査区もおのずから狭小なものとなり、郡衙やそれに関連する明確な遺構・遺物などは検出することができなかった。ただ、郡衙北側に位置する5-D、6-A・E・F地区では縄文時代晩期の土器や、石器類が出土している。過去の調査でも、ごく希に縄文土器や石器などが出土することがある。今回も多くはないが、これまでのなかではまとまっており、本遺跡における縄文時代の状況を考えるうえで貴重な資料となろう。

また、宮田遺跡では明確な遺構の検出こそなかったものの、縄文後期の土器を層位別に取り上げることができた。これらの土器の編年の観などから、当遺跡では長期間集落が展開していたことがあきらかとなった。今後は遺構の検出も含め、集落の規模・構成などを追求していきたい。

郡家今城遺跡では、昨年に引き続き北辺部を中心に調査を実施した。これまでの調査でも北辺部は遺構が希薄となってくるのがわかっているが、今年度の調査(8)~(12)ではそれが一層明白なものとなった。特に郡家今城遺跡(9)で検出した掘立柱建物は、当遺跡では最も北に位置し、これより北側で実施した調査では遺構を検出していないことからすれば、集落の北限をほぼ把握し得たと考えられる。遺物に関しては、郡家今城遺跡(9)で出土した越州窯系青磁と石鏝帯が特記できる。高槻市における鏝帯の出土例は、ツゲノ遺跡(巡方1)、郡家今城遺跡(丸鞆1・鉦尾1)、岡本山古墓群(一式)、梶原南遺跡(鉸具1)が知られる。今回出土した巡方は郡家今城遺跡で出土した鏝帯の3例目となり、越州窯系青磁と共に官衙との密接な関係を一層裏付けるものとなった。

いっぽう、郡家今城遺跡(3)・(8)の調査では近世~近代の瓦窯や井戸そして粘土採掘跡を検出している。これは昨年度検出した瓦工場跡〔概要12：郡家今城遺跡(4)〕と一連のものと考えられ、今回検出した遺構・遺物と併せて近世~近代にかけての瓦生産を知るうえで好資料となろう。

悉檀寺跡では、昨年に引き続いて数件の調査を実施した。これまでの調査では、古代~中世の遺物がわずかに出土したのみであった。今年度の調査では寺跡に直接関わりないもの、はじめて中世の遺構を検出することができた。今後も引き続き寺域の把握に努めていきたい。

安満遺跡は東側の地域で調査を実施した。遺跡東側には檜尾川が形成した氾濫原がひろがり、その上に古代~中世の集落が展開していた。安満遺跡(2)で検出した7世紀頃の掘立柱建物2棟は、柱軸を大きく西へと振っている。とくに掘立柱建物1はN-41°-Wと本市平野部で検出した掘立柱建物では最も西へ振る部類に含まれる。そして、軸が40度前後西へ振る掘立柱建物は嶋上郡衙跡など比較すればその数は多いようである。安満遺跡(1)では11世紀~14世紀にかけての掘立柱建物・井戸・土壇などを検出した。調査区周辺では中世の村落

が展開していることが判明しており、今回も同じような状況が認められた。掘立柱建物の軸は東へ振り、その角度などから数単位の屋敷地が考えられる。出土した遺物では、大量輸入以前の中国製白磁など、中世の流通形態を考えるうえで看過できないものがある。

土室遺跡では、新たに奈良時代～平安時代にかけての集落を発見した。今回検出した遺構は、集落の北東部にあたるとかんがえられ、掘立柱建物は軸方向や切り合いなどから2時期に分けることができる。そして、各掘立柱建物の配置状況からみて複数の単位(掘立柱建物群)を認めることができる。また、平窯や粘土採取坑とみられる土壌群など特徴的な遺構を検出し、集落内で生産活動を行っていたことがあきらかとなった。今後は工房跡などを含め、集落の全容を追求していきたい。

なお、高槻市西部、土室地区では今年度から来年度にかけて、新池遺跡・土室遺跡などの大規模な調査が実施・予定されている。新池遺跡では、5世紀及び7～8世紀の集落跡などの比較的まとまった遺構を検出している。遺物も土器類のほかに、滑石製模造品や鐔形土製品、そして新羅土器などが出土している。特に新羅土器の出土は、日本書紀の欽明天皇23年11月条にある『今撰津国三島郡埴盧新羅人之祖也』の記述を裏付けることとなった。これらの調査は、本市では比較的研究の遅れていた西部地域の歴史を明らかにする重要なものとなっている。(宮崎)

昨年度の概要において、9世紀から12世紀にかけての土器について調査の成果をまとめたが、本年度の郡家今城遺跡の調査では、昨年度に引き続き10世紀前後の遺物が検出されたのははじめ、安満遺跡でも11世紀以後の遺物が多数検出された。この他にも断片的ではあるが、これまでの調査でこの時期の土器様相を知るうえで重要な遺物が検出されている。本市をはじめ、大阪北部では古代から中世に至る土器様相についてはあまり明確ではない。

このため、今年度の調査成果を中心に今後の調査・研究の参考になるように9世紀から11世紀にかけての土器様相を表にまとめた。表では9世紀をⅠ、10世紀をⅡ、11世紀をⅢとし、それぞれa・bあるいはa～cに区分している。この表では、一括して出土したものを中心にしたが、厳密な意味での編年表としては不十分であることをおことわりしておく。以下、表の説明を中心にして土器様相の変遷を追うことにする。

Ⅰ期に先立つものとして、郡家今城遺跡(11)の井戸1あるいは土室遺跡の井戸1から出土した須恵器杯・土師器杯がある。また、昨年度の郡家今城遺跡(2)の溝1出土の須恵器杯などがある。平城編年のⅥに近いもので、おおむね8世紀末から9世紀初めにかけての資料とみられるが、良好な一括資料はない。

Ⅰ期は前半をa、後半をbとしている。Ⅰa期の資料としては、昨年度の郡家今城遺跡(5)井戸2出土資料があげられる。土師器杯Aでは外面をヘラ削りするc手法7に対し、口縁部を横なでし底部にてずくね痕をのこすe手法は3である。しかし、杯Bは外面をていねいにヘラ磨きするもので、緑釉陶器も軟質で円盤高台をもつ京都洛北窯の製品である。土師器の手法のみをみると、c手法が大半をしめる平城編年のⅦよりやや時期が下がるものとも理解

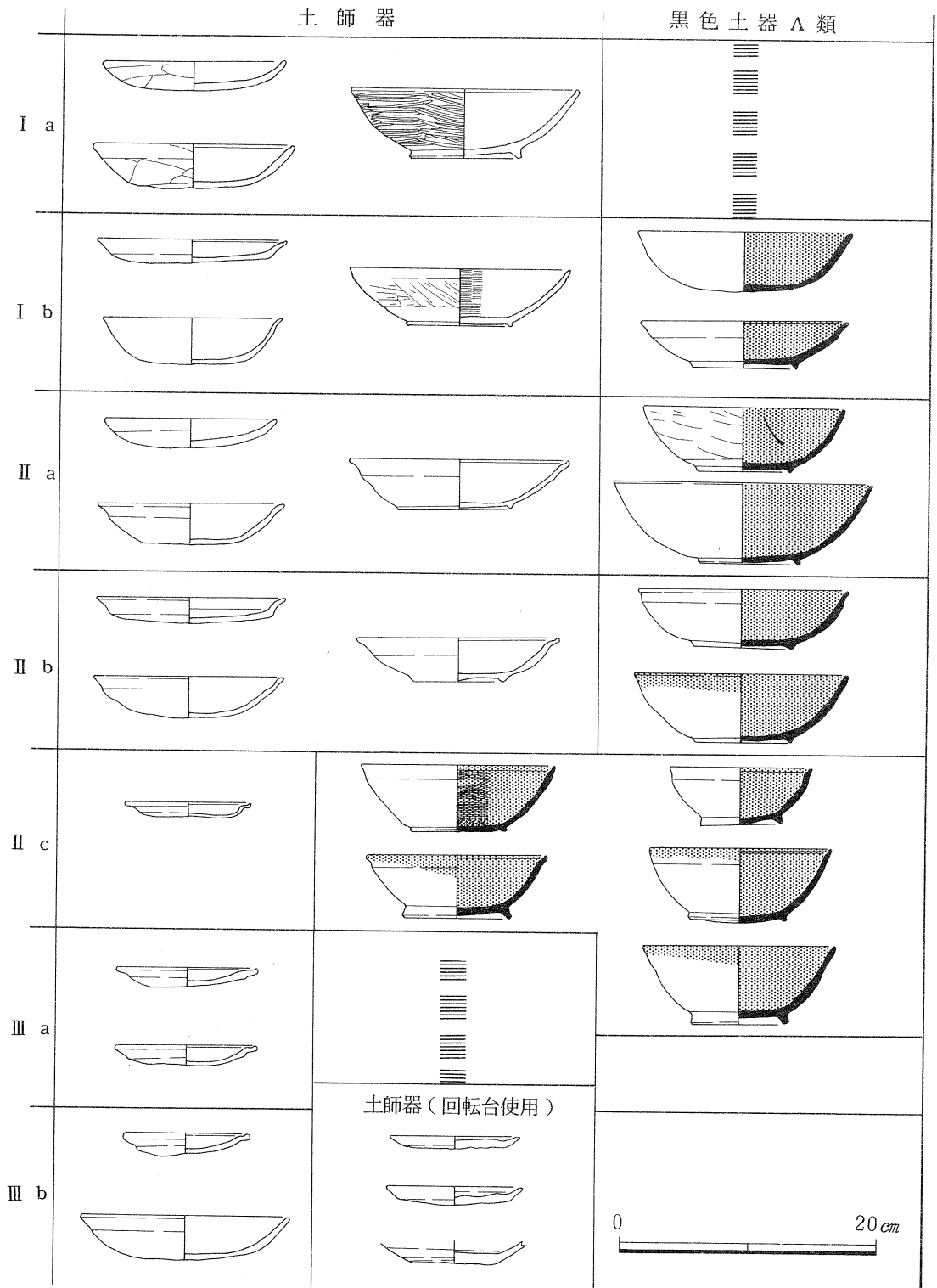

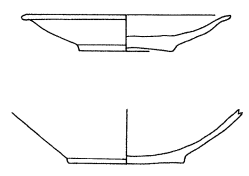

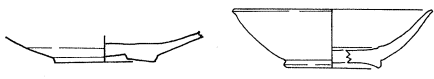
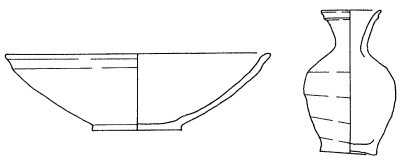


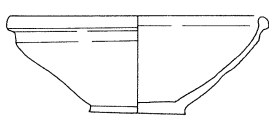
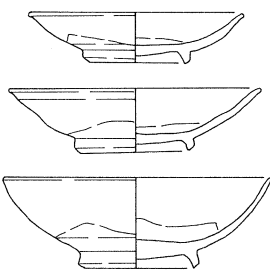


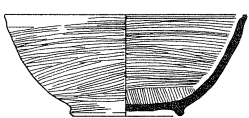
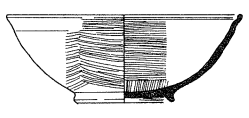
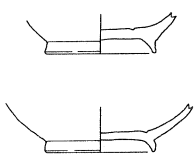
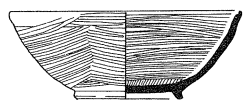
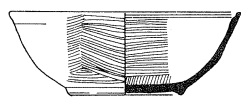

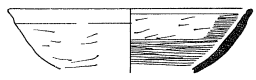

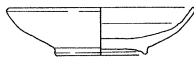


図39 9~11世紀の土器様相

須惠器	綠釉陶器	
		
		
		
	<p data-bbox="720 714 857 753">灰釉陶器</p> 	
<p data-bbox="397 1043 603 1081">黑色土器 B 類</p>		
		
		
	<p data-bbox="603 1477 734 1516">瓦 器</p> 	



できるが、他の要素を考えあわせ、ここでは9世紀前半の資料としておく。井戸2では須恵器の供膳具は出土しておらず、他に良好な資料はないが前代に比べ須恵器の供膳具は減少するようである。

I b期は三島高校建設時に調査された郡家今城遺跡井戸8出土資料をあげることができる。土師器杯ではc手法とe手法の両者があり、ややe手法が多いようであるが、杯Bはc手法である。黒色土器にも杯Aと杯Bがあるが、後者の方がやや多く器形は杯に高台の付いたものに近い。須恵器の供膳具では杯Aが少し存在している。緑釉陶器は底部を蛇の目高台あるいは平高台に削り出した京都系のものである。このような土器構成は平城京跡東三坊大路側溝S D650Bに極めて類似している。

I a期とI b期の間に平城京跡東三坊大路側溝S D650Aに平行する土器群を位置付ける必要があるが、市域では良好資料が無い。府下的にみても良好な資料は限られているが、その中で吹田市垂水南遺跡河川内堆積層から出土した遺物群は黒色土器杯Aを中心としており、一定量の須恵器類も報告されている。

なお、I期では灰釉陶器の良好な出土資料は少なく、黒笹14号窯式に属するものでは嶋上郡衙跡と郡家今城遺跡でわずかに存在しているだけである。しかし、黒笹90号窯式では今年度の郡家今城遺跡・安満遺跡の包含層からもある程度出土している。緑釉陶器も京都系・東海系のものがかなり目立つようになり、これらは9世紀後半には村落の上層農民にある程度普及したものとかがえられる。

II期は土師器杯がすべてe手法によって成形されていることを目安にし、a・b・cに三分割した。II a期では、黒色土器はすべて杯Bで内面に暗文を施すものがある程度残っている。外面はヘラ削りをした後、比較的ていねいにヘラ磨きしている。法量は口径20cm程度を測るものもあり法量分化が認められる。本年度の郡家今城遺跡(13)の井戸2などがあげられるが、須恵器では篠窯の製品が目立つようになる。表にあげた平高台の椀は10世紀第一四半期とかんがえられているが、9世紀末に位置付けられる京都市北野廃寺S K20では土師器杯の大半がe手法であり、ここでは9世紀末から10世紀初めとしておく。

II b期は84年度の大蔵司遺跡土壙2・同87年度の土壙1が良好な資料である。黒色土器杯Bは法量的にかなりまとまりがみられるようになる。須恵器ではやはり篠窯製品がみられ、灰釉陶器には、尾北篠岡窯のS 4'(折戸53に平行)の椀・皿がある。

II c期では、器種構成の面でおおきな変化が認められる。土師器に口径10~11cmの小皿が出現し、いわゆる「て」字状口縁を呈している。黒色土器には従来のA類にB類が加わる。A類では杯の形態をひくものと、椀に近いものがある。B類は椀の形態であるが、深めのもとの口縁が外反気味で浅めのものである。このB類椀は枚方市楠葉東遺跡周辺で生産されたものとみられ、後の瓦器椀に続くもので専門的に生産されたものであろう。

この時期の資料は55年度調査の嶋上郡衙跡井戸の資料が良好であるが、伴出の緑釉陶器は近江産であり、最近の研究では11世紀初めとされることから多少の混じりを考慮したい。しかし、土師器と黒色土器のセット関係は四條畷市岡山南遺跡でも確認されており10世紀後半

としてとらえることができる。なお、須恵器の供膳具はほとんどみられない。

Ⅲ期は瓦器椀出現までをa・bにわけた。Ⅲa期は本年度の安満遺跡(1)の土壇3出土資料が良好である。土師器小皿はやや厚手となっている。黒色土器A類はみられず、B類椀のみである。ヘラ磨きは比較的ていねいに施されているが高台などにやや簡略化がみられる。他の判出資料はいまのところ不明である。

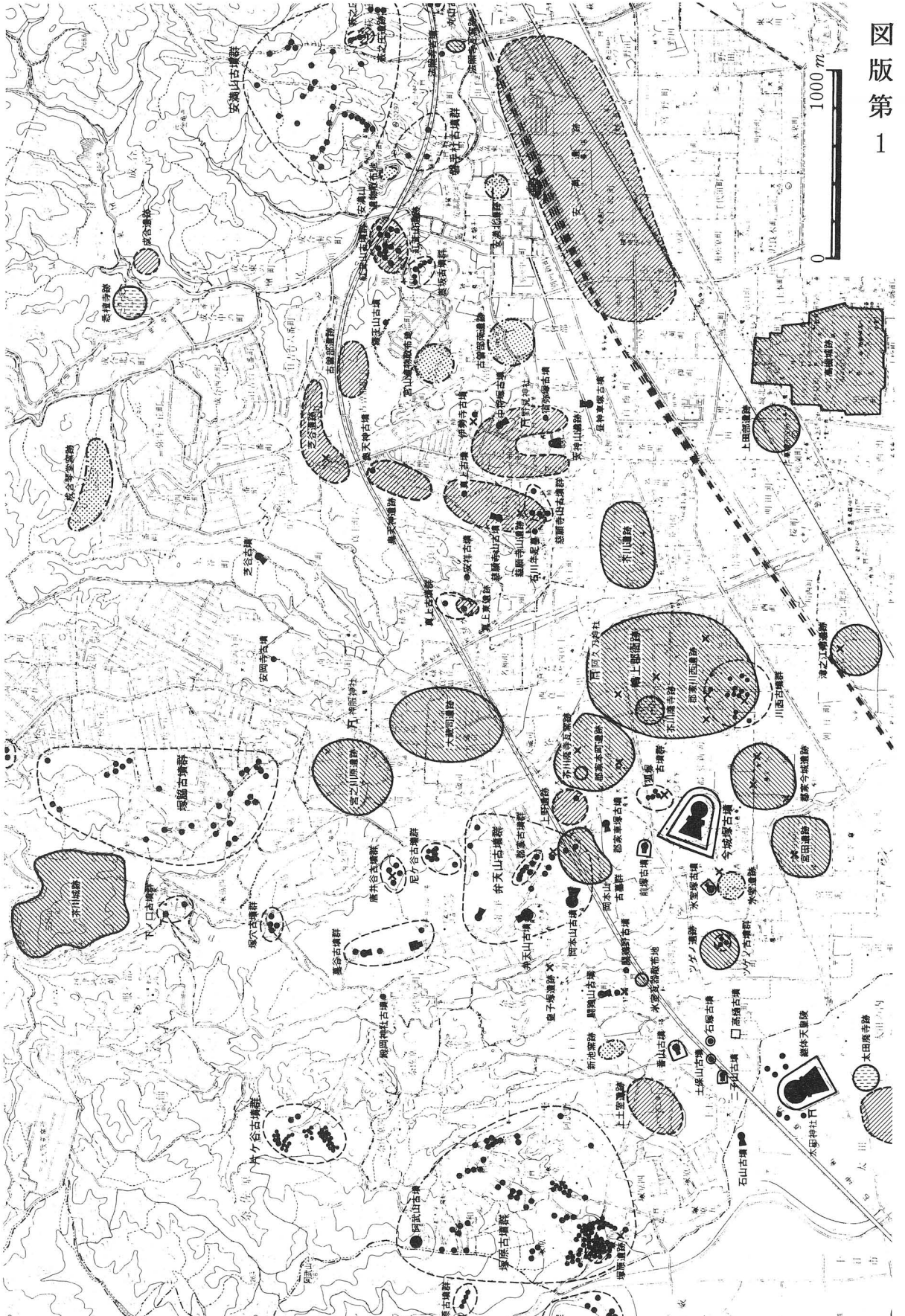
Ⅲb期の土師器小皿は厚手となり、大蔵司遺跡の昭和59年度土壇1では黒色土器B類椀の破片が出土している。この土師器小皿と宮田遺跡神社南地区の溝から出土したものは時期的に大きな差は無く、平安京跡左京三条三坊S D 1の例からみてすでに瓦器椀が出現しているものとみられる。大蔵司遺跡土壇1では底部にヘラ切りや糸切りの痕跡をのこす土師質の杯・皿が出土しているが、Ⅱc期に相当する昭和45年度調査の郡家今城遺跡井戸でも出土している。この種の土師質土器については畿内中心部ではこれまでほとんど考慮されてこなかったが、本年度の安満遺跡をはじめ豊中・箕面・能勢などで出土例があり、時期的にも限られるようであることから今後注目していく必要がある。

以上、これまでの資料をもとに古代から中世への土器様相の変遷をみてきたが、Ⅱc期に古代と中世の接点を見いだすことができるものの、なお緑釉・灰釉・黒色土器A類という前代からの器種が残っている。Ⅲb期に瓦器椀、土師器皿を中心とする中世的土器様相へと変化するが、この土器にみられる変化は村落の変化にもみられることは安満遺跡の検討でも指摘できる。(橋本)



圖 版





嶋上郡衙跡とその周辺



a. 1-D·G·H·K地区 Aトレンチ (南側から)



b. 1-D·G·H·K地区 Aトレンチ (北側から)

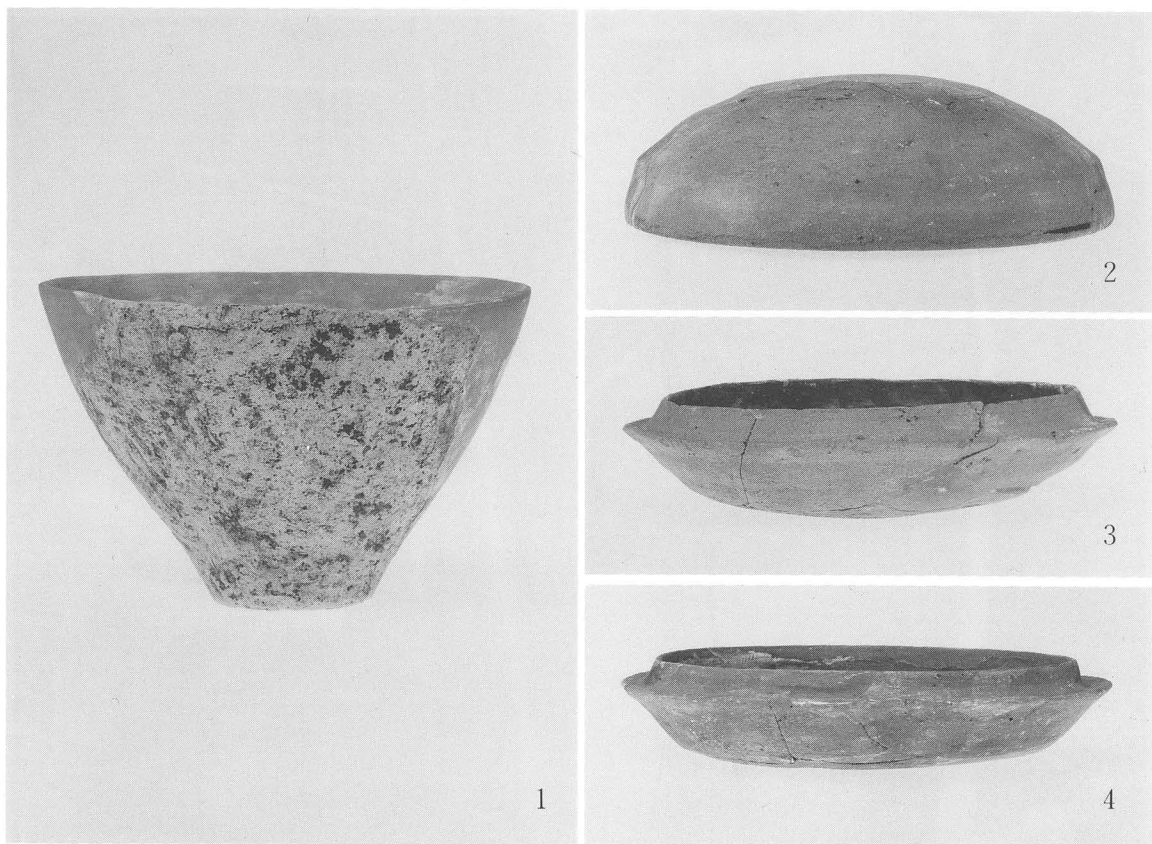


c. 3-J·N, 13-B·F地区 IIトレンチ (北側から)

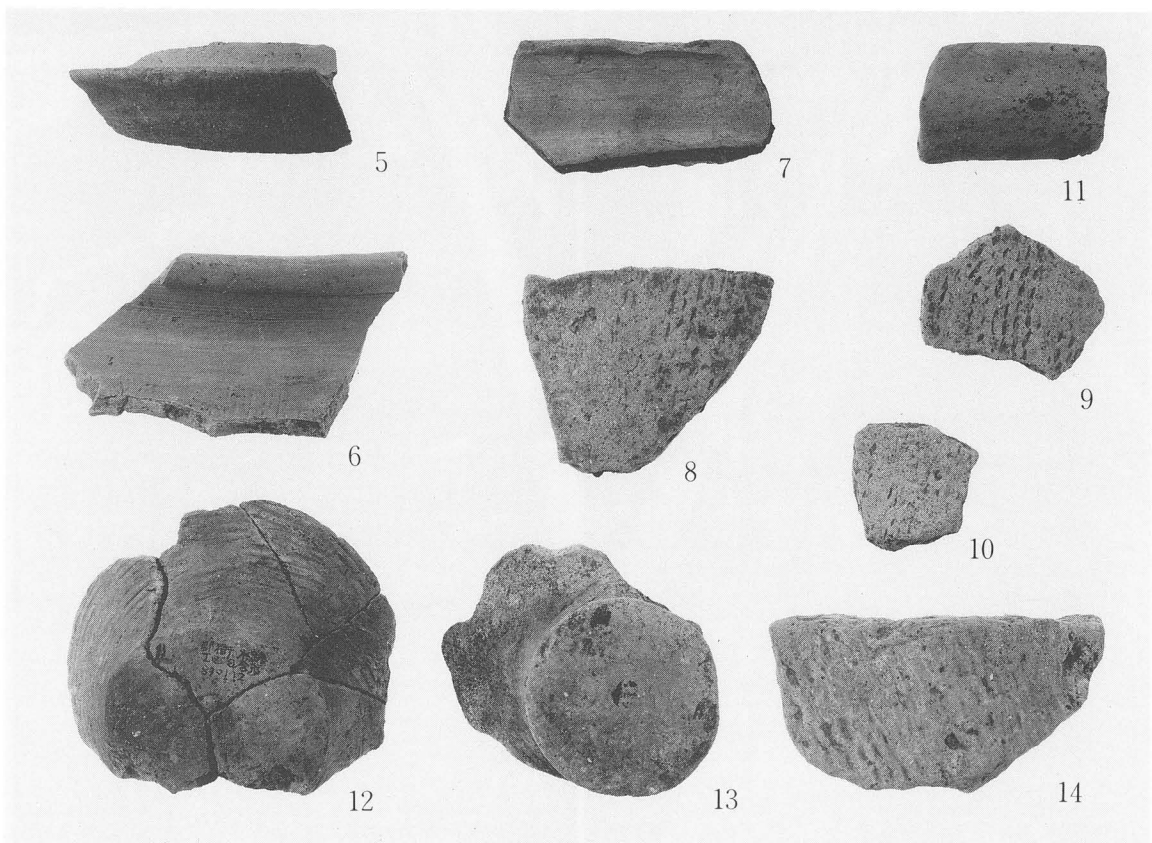


d. 3-J·N, 13-B·F地区 IIトレンチ (南側から)





a. 3-J・N, 13-B・F地区 IトレンチP-1 (1), IIトレンチ落ちこみ1 (2~4)



b. 3-J・N, 13-B・F地区 落ちこみ1 (5~10), P-2 (11), 包含層(12~14) 約1/2





a. 5-D, 6-A地区全景 (東側から)



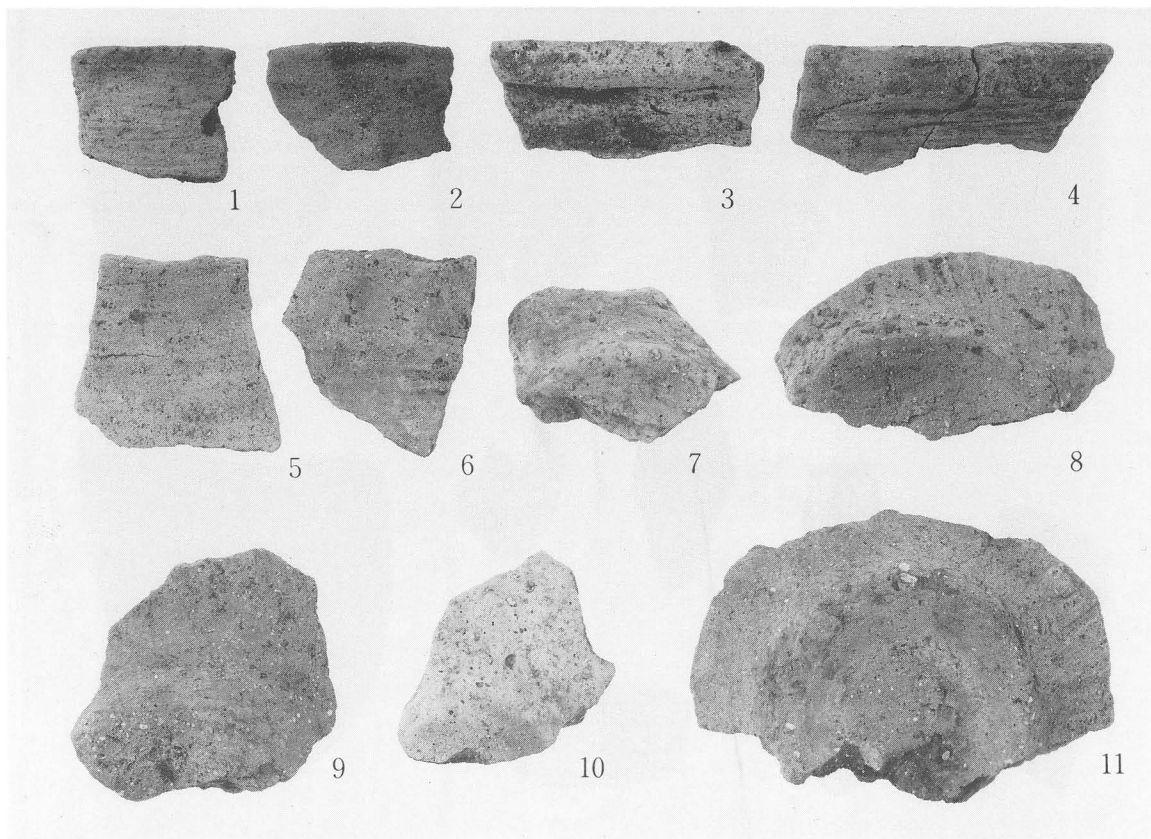
b. 6-E地区全景 (北側から)



c. 6-E, 6-F地区全景 (西側から)

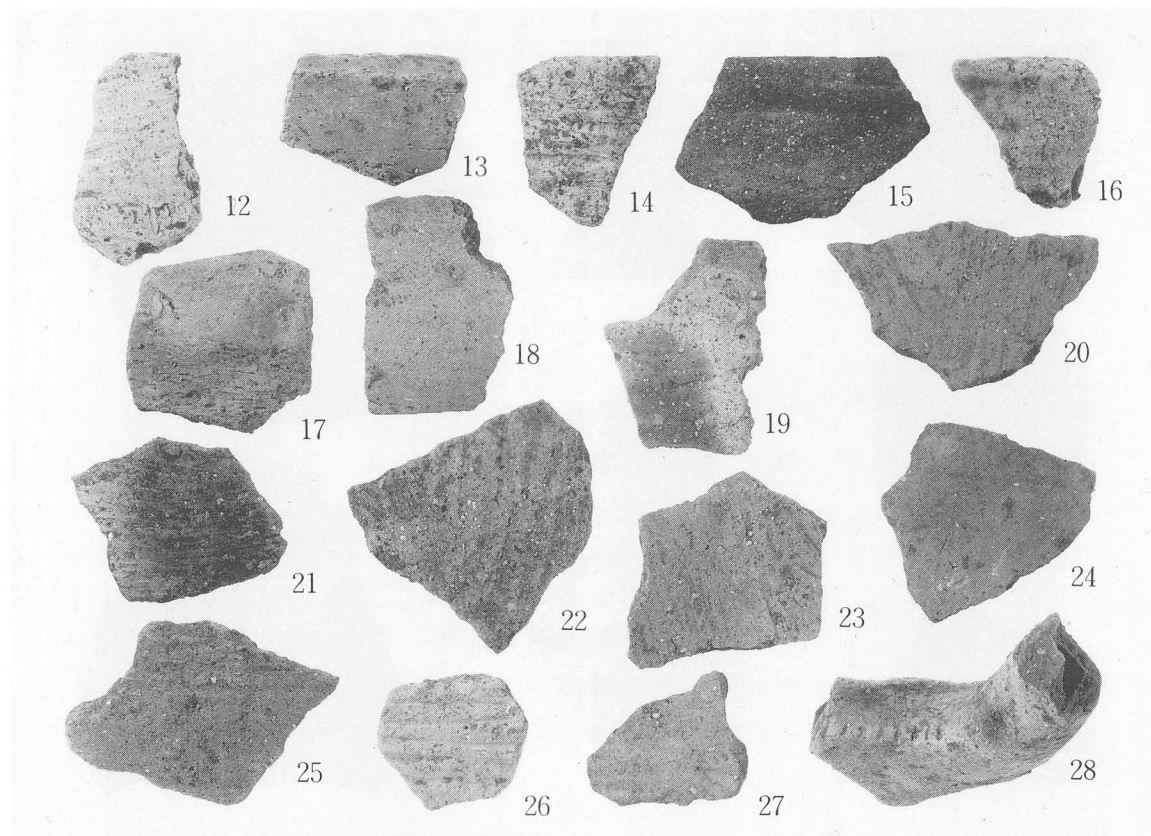


d. 6-E, 6-F地区全景 (東側から)



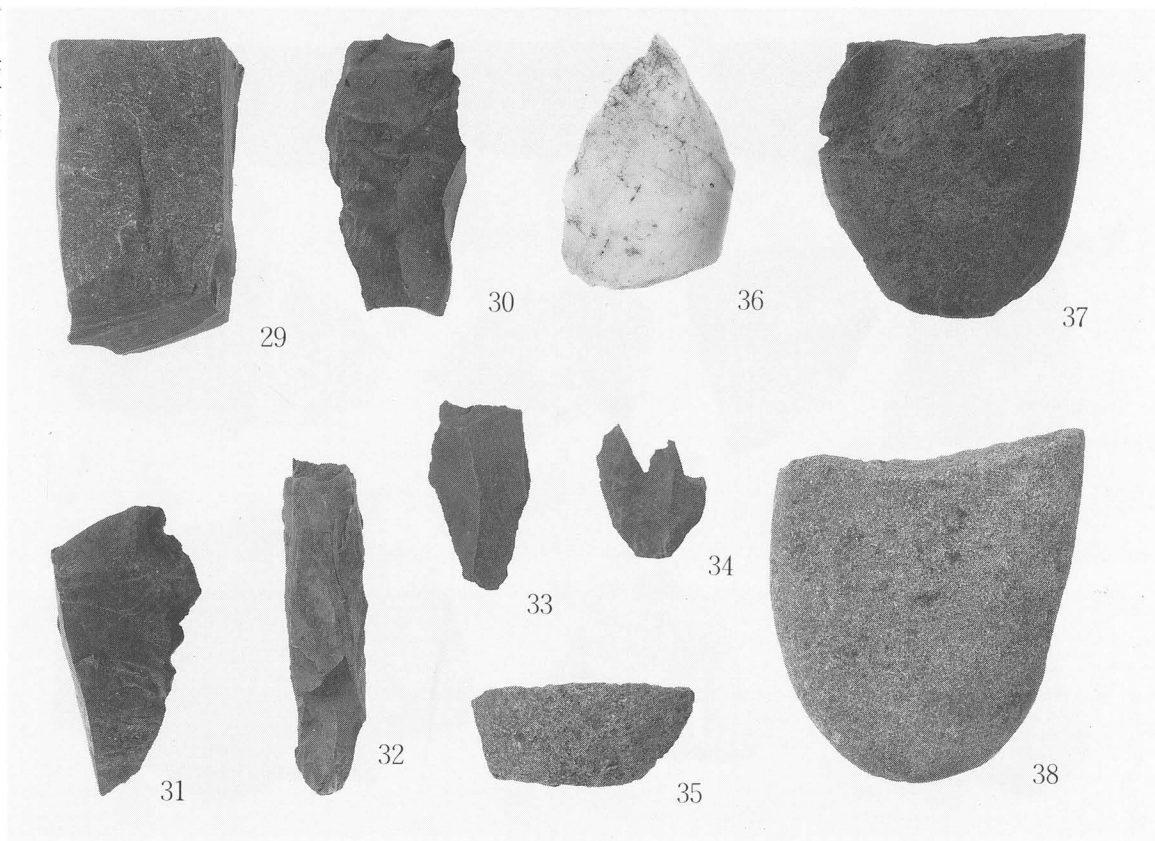
a. 6-E, 6-F地区 包含層 (1~11)

約 $1/2$



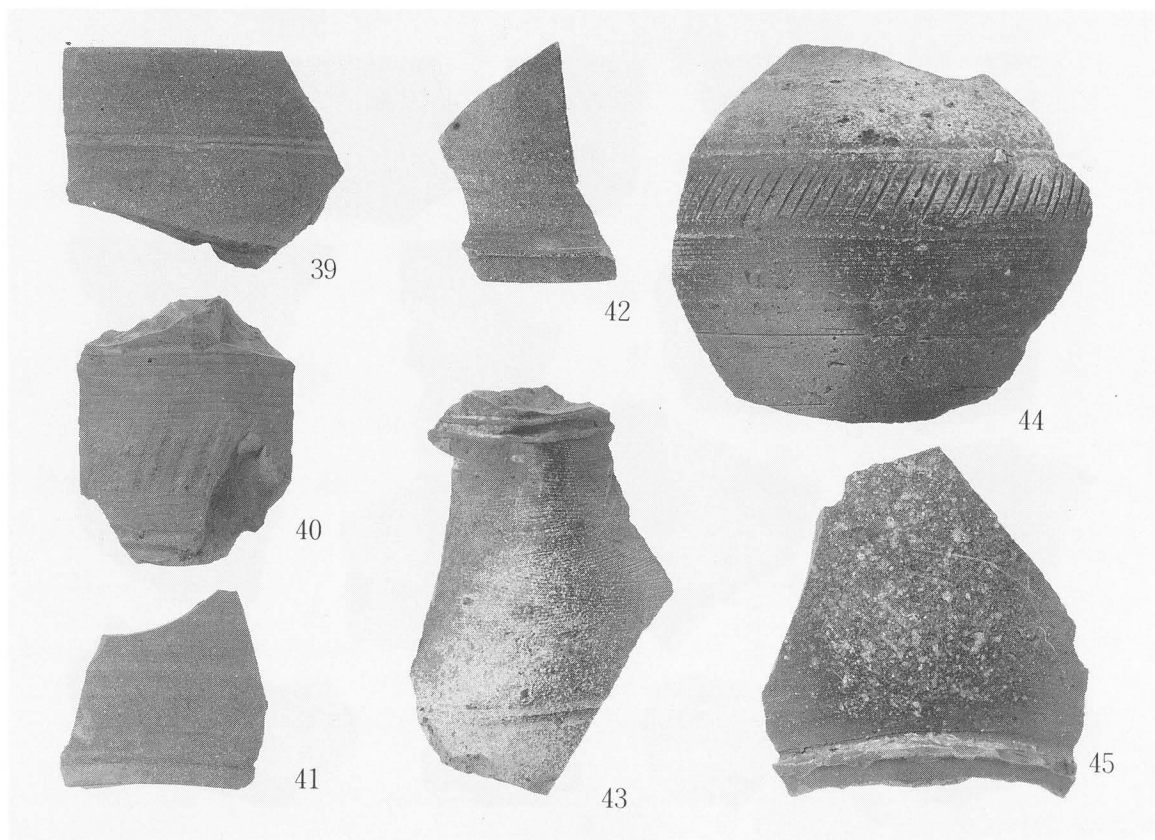
b. 6-E, 6-F地区 包含層 (12~28)

約 $1/2$



a. 6-E, 6-F地区 包含層 (29~38)

約 $\frac{1}{2}$



b. 6-E, 6-F地区 包含層 (39~45)

約 $\frac{1}{2}$





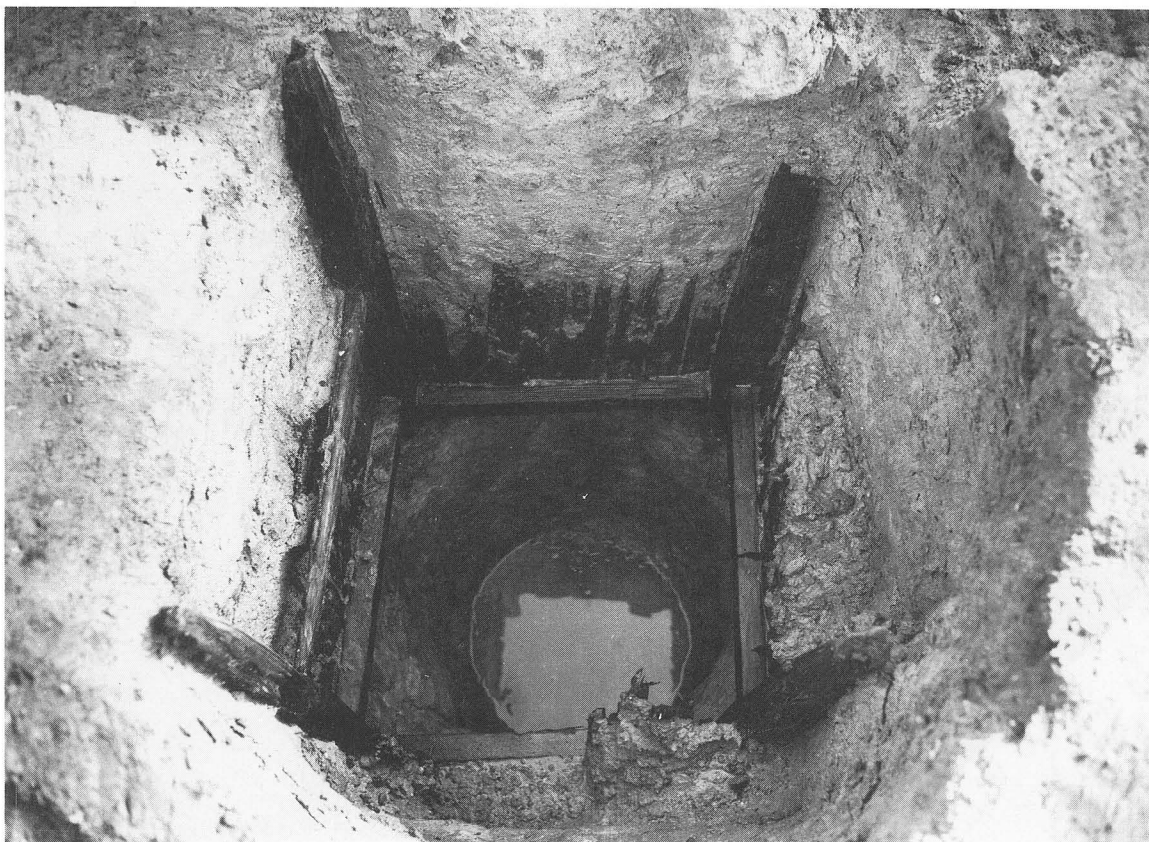
a. 土室遺跡 西トレンチ全景（東側から）



b. 土室遺跡 東トレンチ西半（南側から）

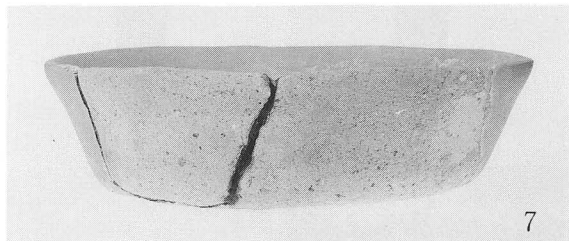
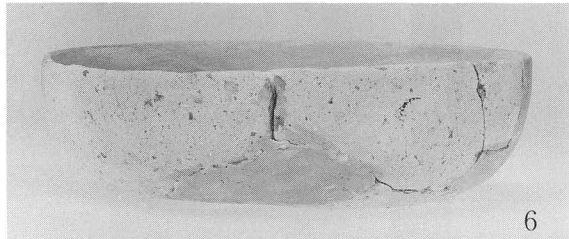
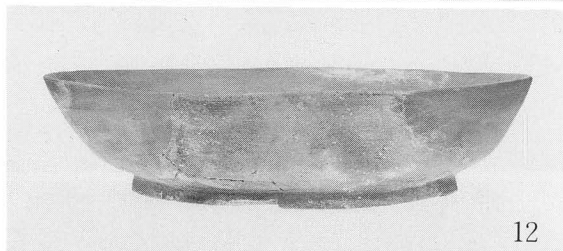
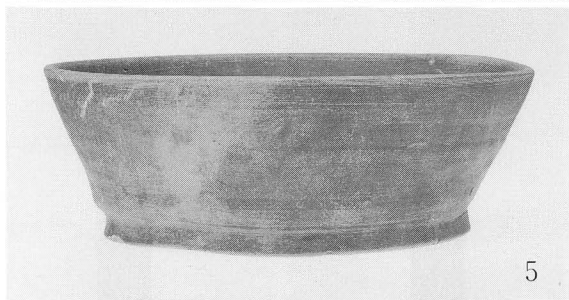
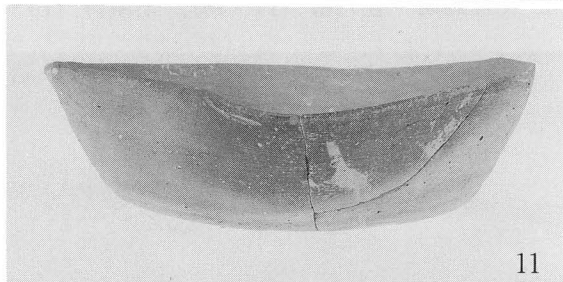
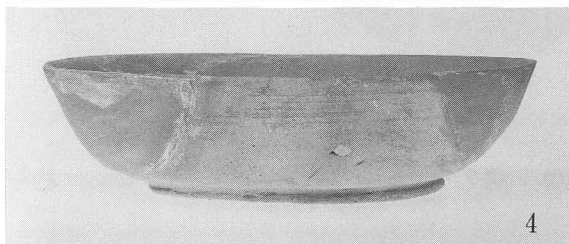
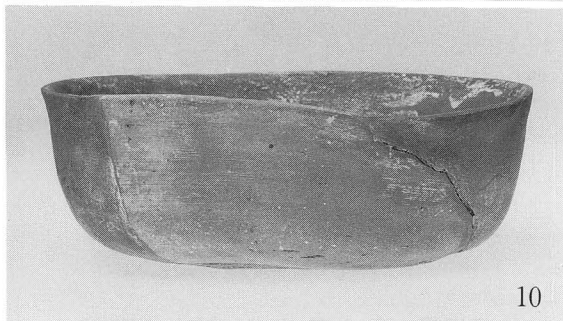
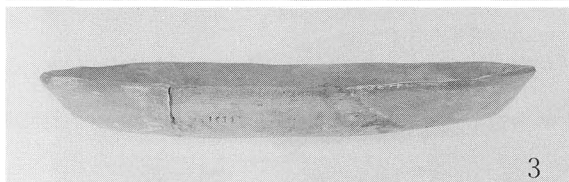
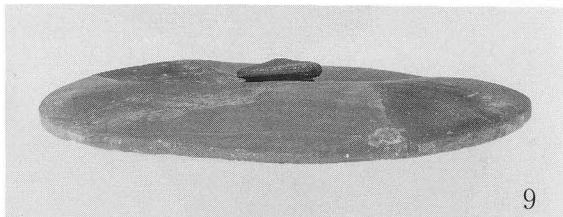
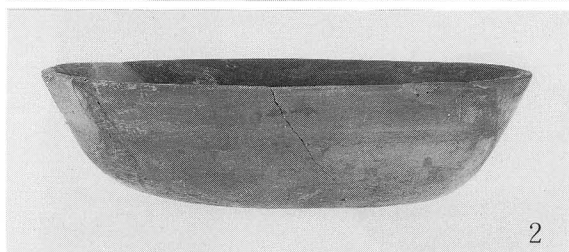
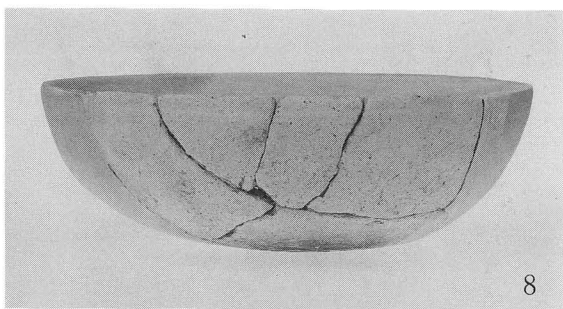
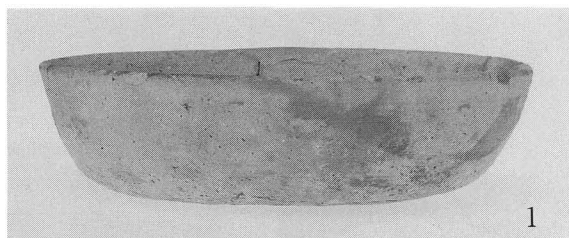


a. 土室遺跡 西トレンチ 小形平窯 (東側から)

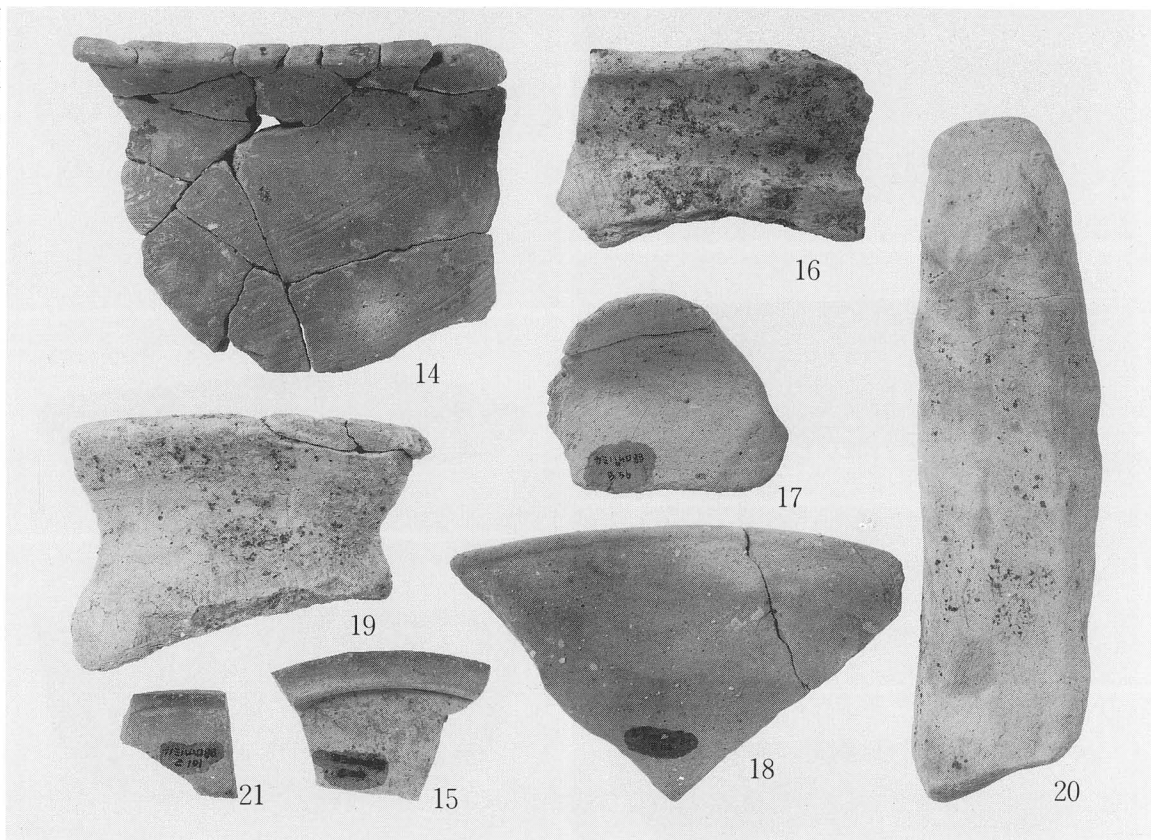


b. 土室遺跡 西トレンチ 井戸1 (北側から)



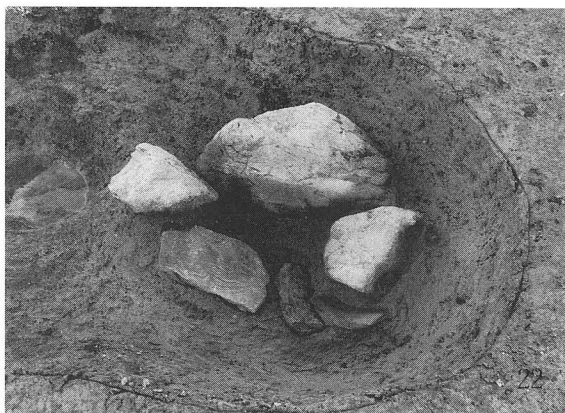


土室遺跡 井戸1 (1~5), 溝1 (6~12), 土壇1 (13)

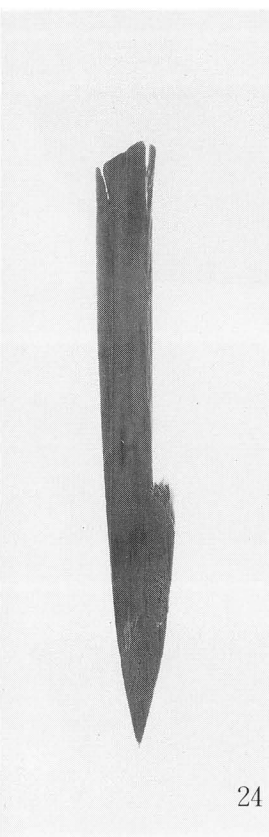


a. 土室遺跡 柱穴群 (14~18), 土壙群 (19・20), 溝2 (21)

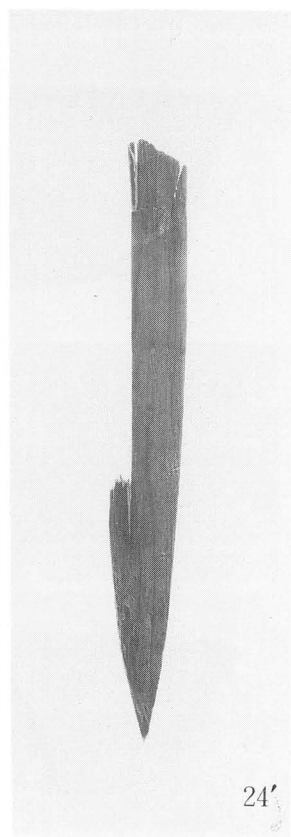
約 $1/2$



b. 土室遺跡 柱穴8 (22), 柱穴9 (23), 井戸1 (24)



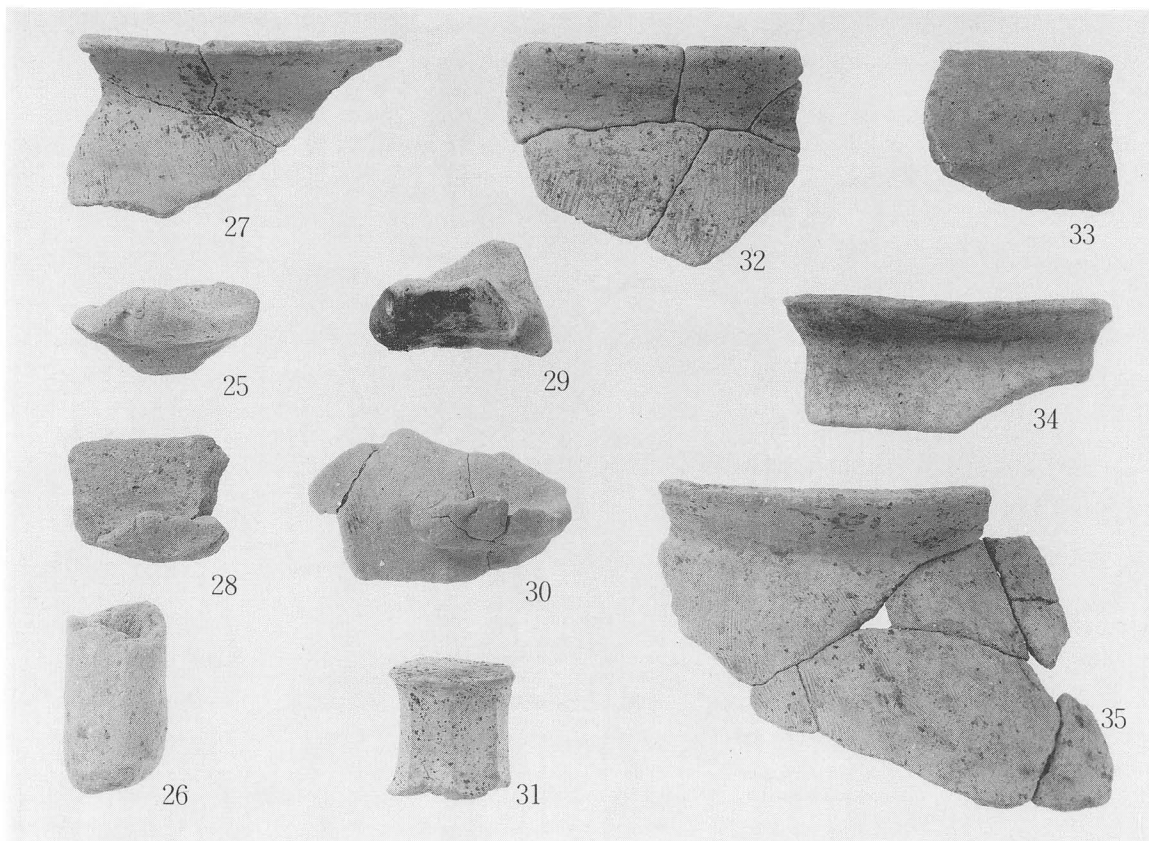
24



24'

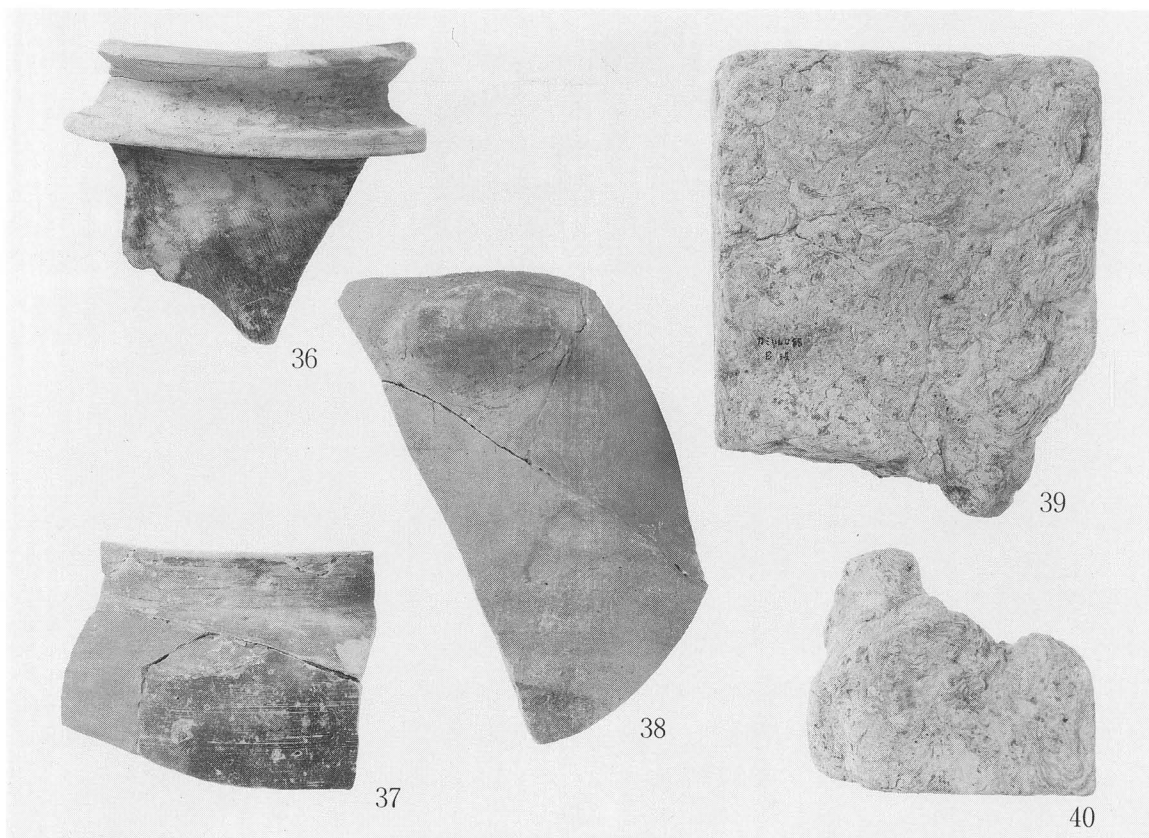
約 $1/2$





a. 土室遺跡 柱穴群 (25・26), 溝1 (27~35)

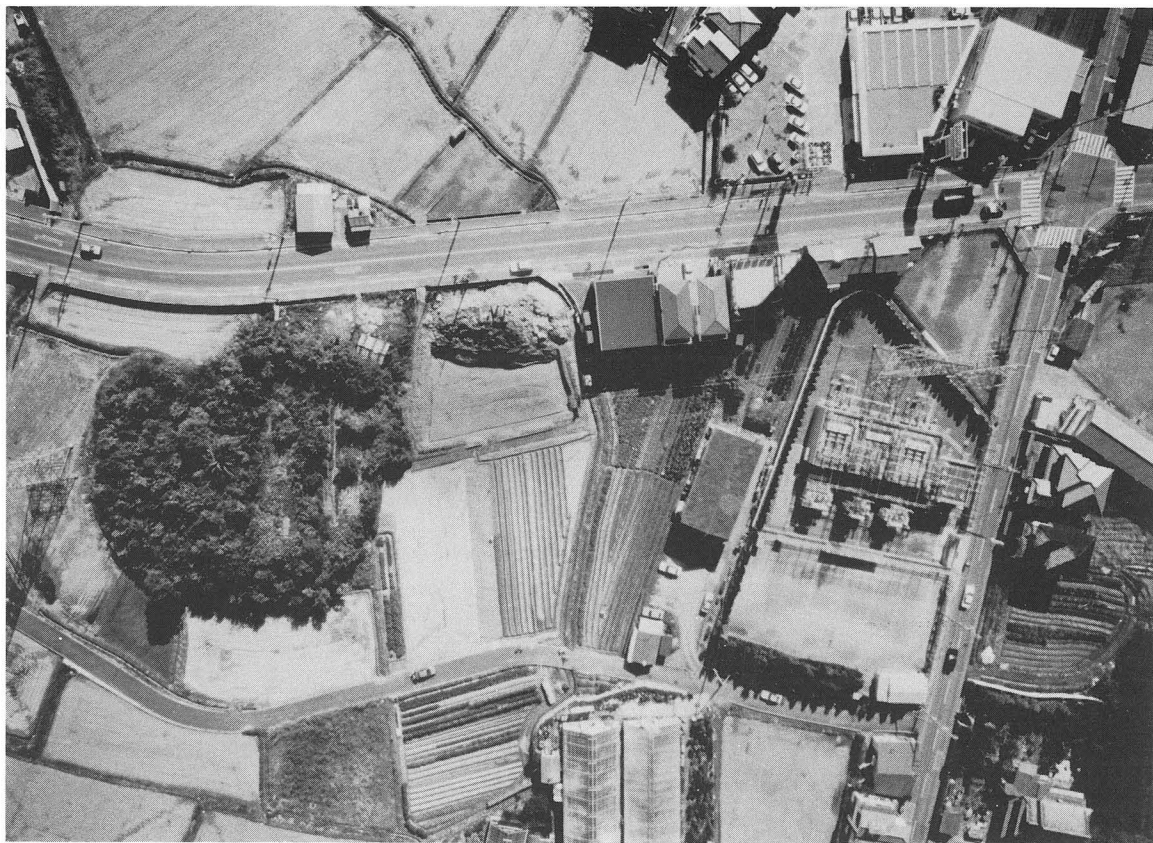
約 $1/2$



b. 土室遺跡 溝1 (36~39), 小形平窯 (40)

約 $1/2$

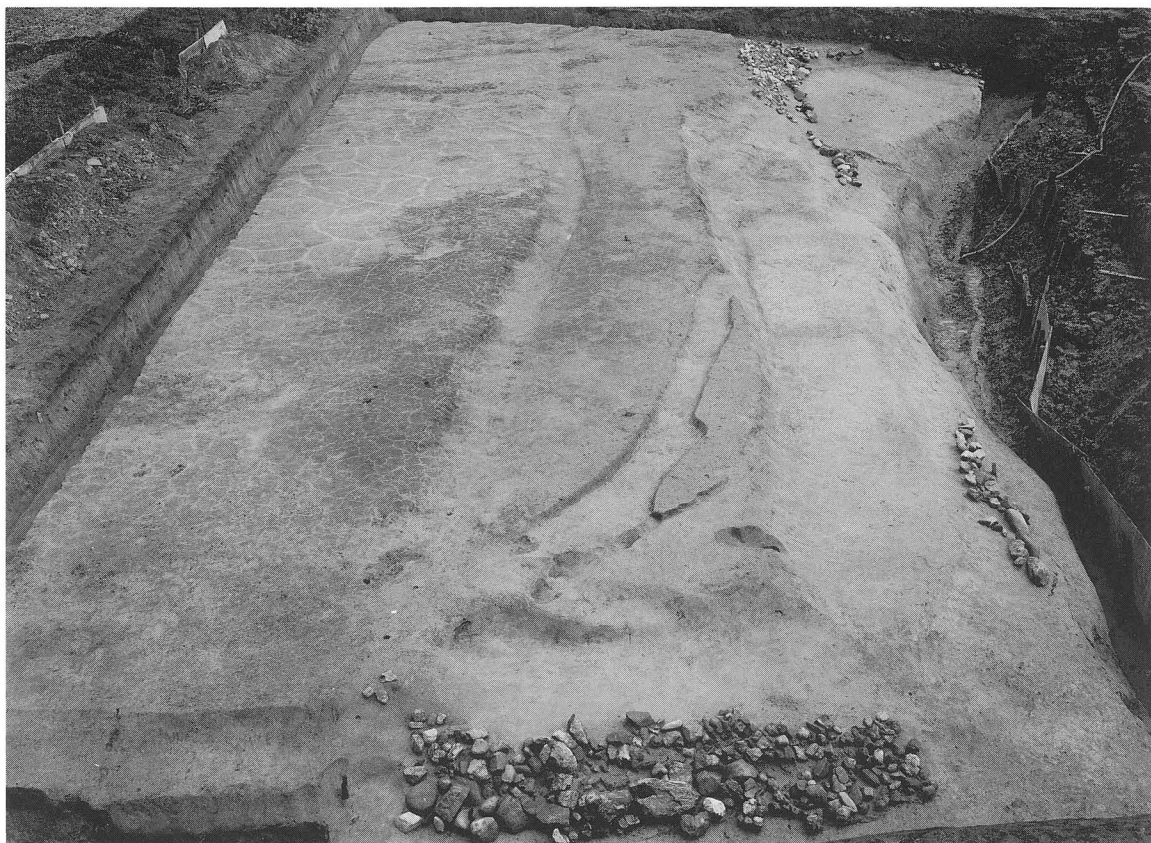




a. 前塚古墳 空中写真



b. 前塚古墳 全景 (西側から)



a. 前塚古墳 前方部 (西側から)



b. 前塚古墳 前方部 (南側から)

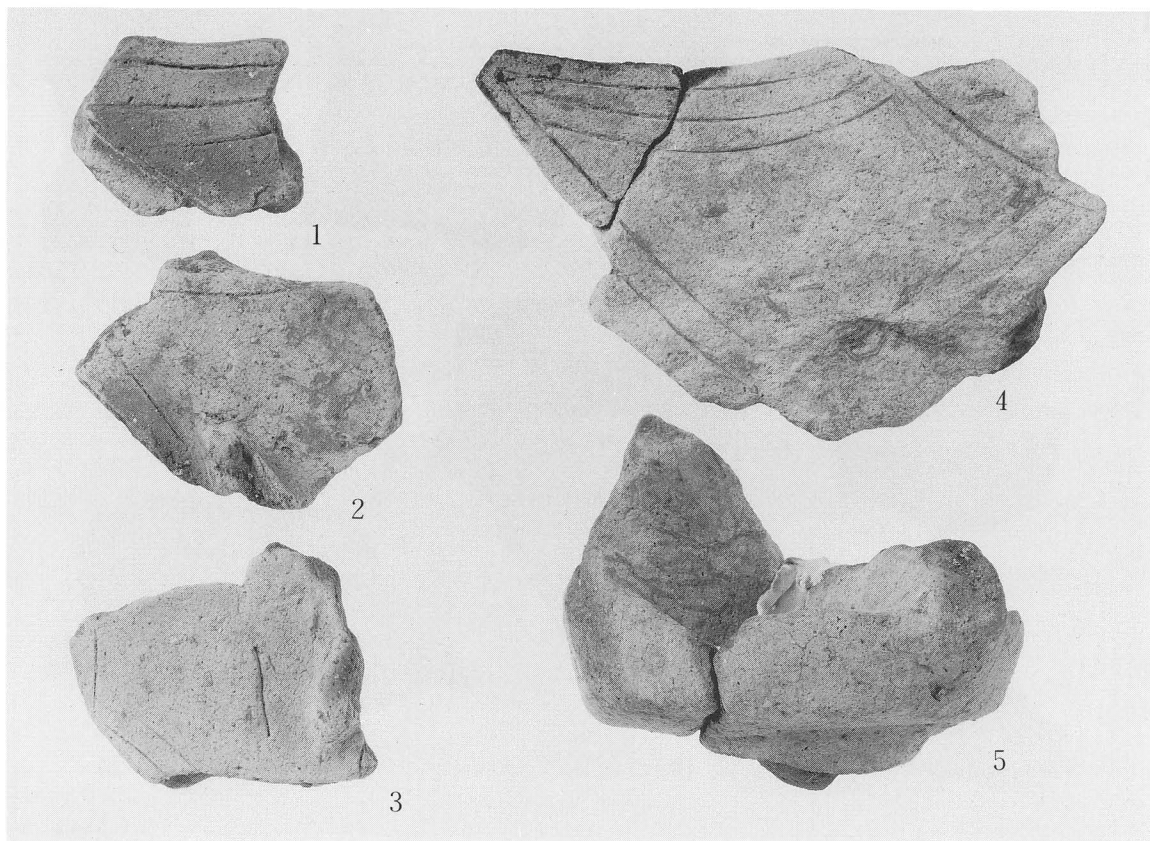




a. 前塚古墳 周濠・自然流路（北側から）

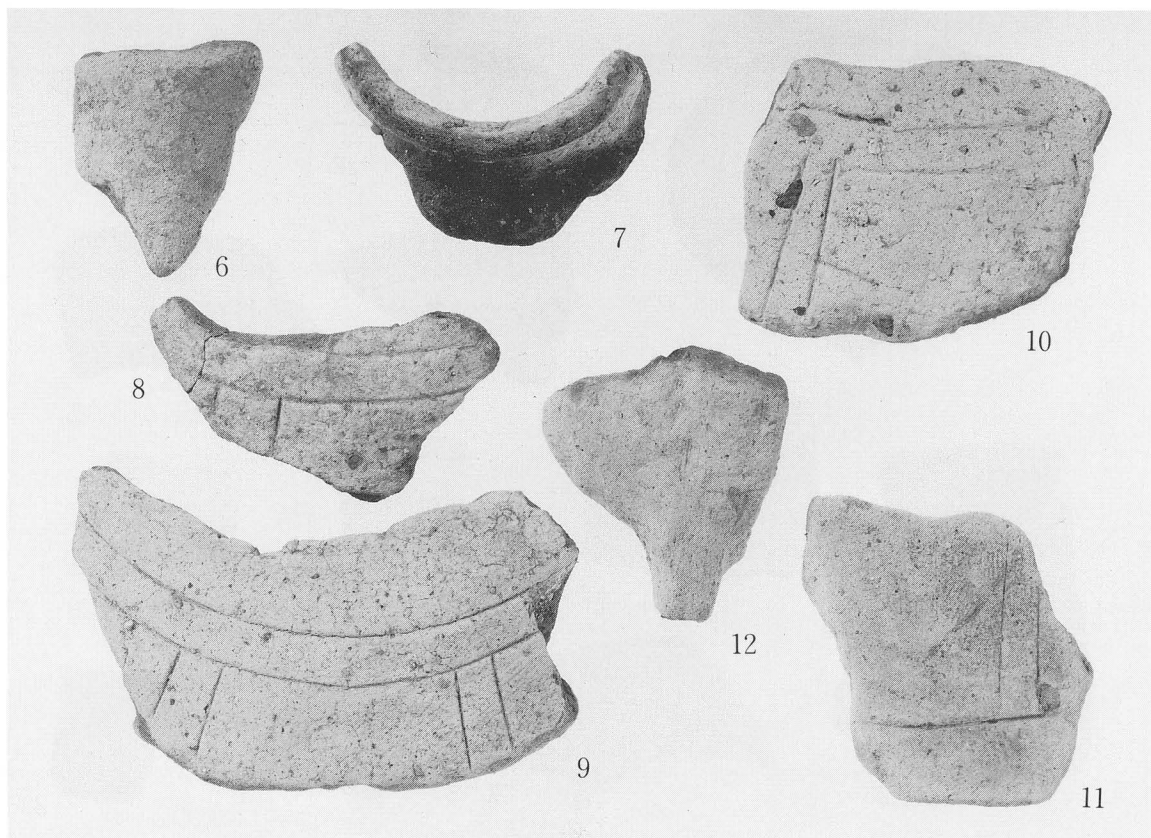


b. 前塚古墳 周濠（東側から）



a. 前塚古墳 くびれ部 (1~5)

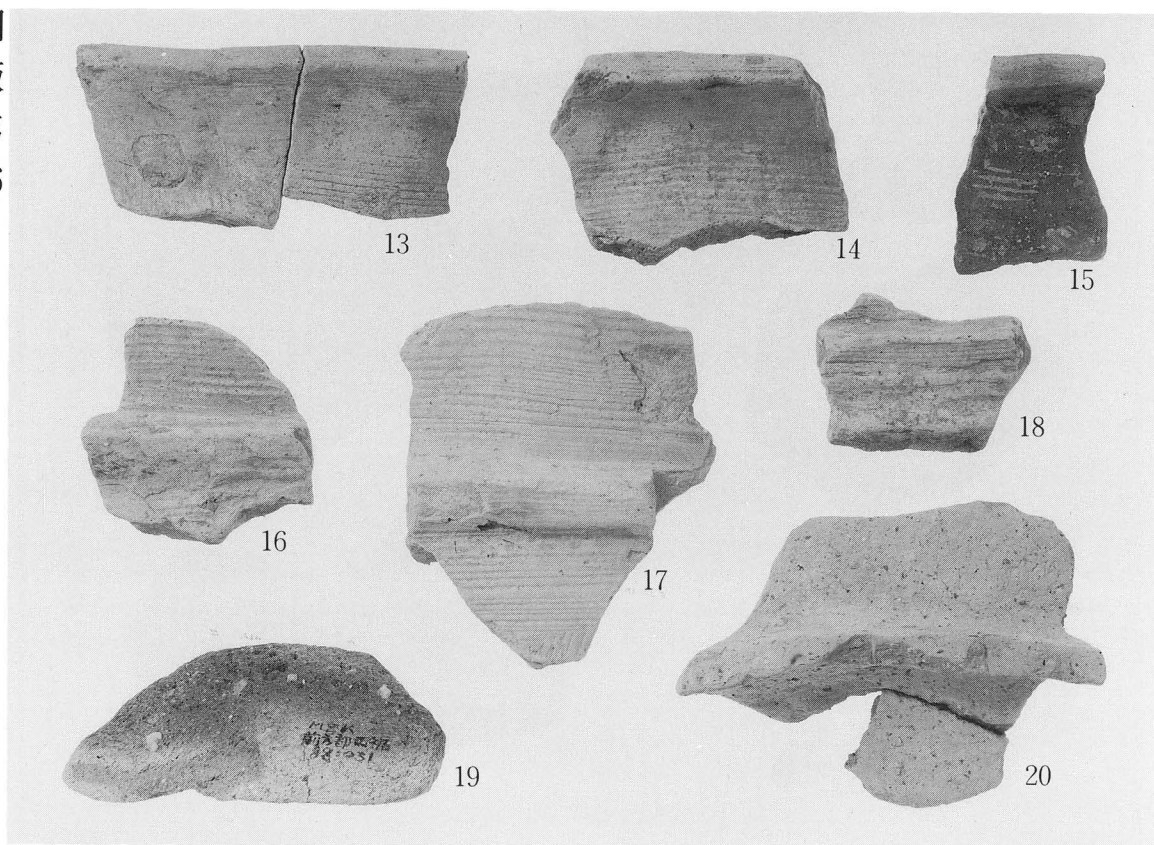
約 $\frac{1}{3}$



b. 前塚古墳 くびれ部 (6~12)

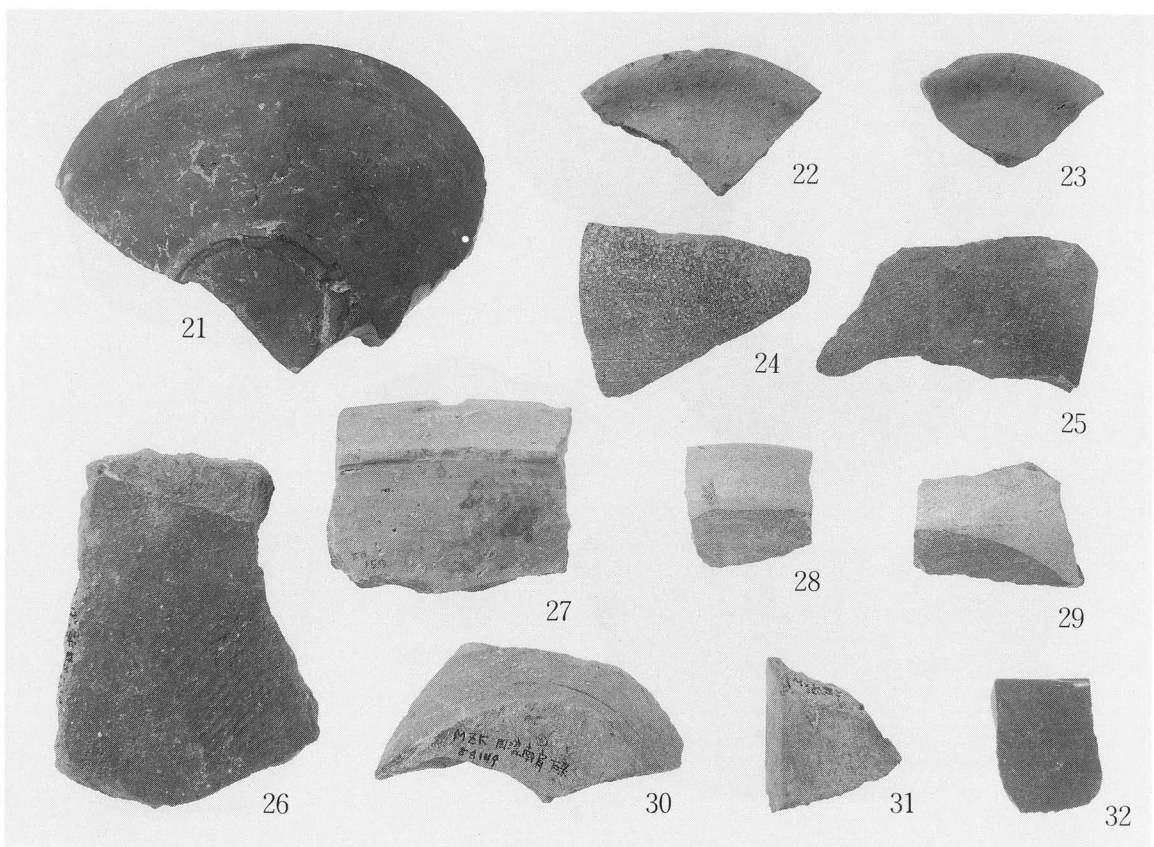
約 $\frac{1}{3}$





a. 前塚古墳 前方部前端付近

約1/2



b. 前塚古墳 自然流路(21~23・30), 攪乱坑(25~29・32), 整地層(24・31)

約1/2



a. 宮田遺跡 調査区全景（北側から）



b. 宮田遺跡 I群 縄文土器検出状況